
場版とある魔術の禁書目録～戦いの神と呼ばれた者～ × 時間を渡る電王《王玉、それは絆の石

桐生 乱桐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

劇場版とある魔術の禁書目録〈戦いの神と呼ばれた者〉×時間を渡る電王《王玉、それは絆の石》

【Nコード】

N0772X

【作者名】

桐生 乱桐

【あらすじ】

鏡祢アラタと皇海音スメラホイト

上条当麻と綾崎ハヤテ

四人の道筋が重なる時、物語は始まる

Prolog to the INDEX

「王玉？」

その日、俺は蒼崎橙子の事務所に来ていた

「ああ。場所はわからないが、なにやらヤバげな匂いが漂っている。お前はその王玉を発見し入手、可能であれば破壊して欲しい」

破壊、という単語が橙子の口から出るとは意外だ

「…そんなにヤバいのか、アンタなら自分の持ち物として懐に入れそうなのに」

「ヤバいものとヤバくないものの区別くらいつくさ。…王玉は、世界を終わらせる力を秘めている」

世界を、「終わらせる」？

「…どういう事だ？」

「行けばわかるさ。…幸いにも、イギリス凄教から、旅行勧誘の手紙が届いてる」

「旅行？」

「イギリス凄教から旅行に行かないかと誘いが来てね、恐らく上条当麻とかにも行っていると思うのだが」

イギリス凄教からそんな誘いが来てるとは知らなかった

「…けどなんで俺にそんな事頼むんだ。アンタなら自分で行ってどうにかできるだろ」

「あいにくと仕事が入ってしまった。私は旅行に行けない。だからお前に頼んだのさ」

仕事、ねえ

「ホントに仕事か？ どうもきな臭いな」

「失礼だなお前は。私は人形師だ。まあ、建設の設計もしているが。今回は設計の仕事が多々来てな。早いとこ終わらせたい」

そう言うと橙子は机の引き出しから数十枚の紙を取り出してバサッと机の上に叩き付ける

どうやら仕事というのは本当らしい

「まあ了解。んじゃ俺は準備するために寮に戻る」

「ああ、頼むぞアラタ。世界の命運は、お前にかかっている」

「んな大袈裟な…」

その頃はまだ笑い飛ばしていたが、後にそれに匹敵する状況に遭遇するとは思いもしなかった

.....

そもそもなぜイギリス凄教が旅行の招待状を上条当麻や鏡祢アラタに送ったのか

まずはそこから話さねばいけない

それは完全にコイツの気まぐれだ

「旅行に行きたい事よ、クロス」

「…は？」

一体何を言い出すんだコイツは

「いやー、何やら神裂のヤツが、オン・ガエーシなるものに四苦八苦しるところにつき、ちょっとキツカケでも作ってやるうと一肌脱ぐう事にしていのよ」

「自分が旅行行きたいだけじゃないのか？ ローラがそんな事言うのはなんか企んでる気がするし」

「失礼けりね、クロス。今回は純粹に好意を込めりね…」

「…まあ、わかった。とりあえず誘ってみようかね」

そんなローラの一言で、クロスの招待状渡しが始まった

なんとローラの直筆だ

なんか魔術でも込めているのかと軽く調べたが何もなかった

… 本当に純粹なのか

ちよつとローラを見直した

ただ海外である学園都市には普通に宅配を頼んだ

んで

……

「にわかには信じられませぬ。あの「アーケヒショップ最大主教」がそんな事を提案するなんて」

言つてステイルはテーブルに置かれた紅茶を啜る

ここはイギリスでもそれなりに名のあるオープンカフェ

シンプルな紅茶はなかなかだ

屋外に設置されており、パラソルをかけてあるそのテーブルは何かと目を惹かれる

「んで、ステイルはどうすんの。行くの？ 行かないの？」

「そうですね。…ここ最近は暇ですし、せっかく「アーケヒショップ最大主教」がこんな事を用意してくれたんだから、乗らないと損かな」

「了解、参加決定な」

俺は懐から招待状を取り出しステイルに渡すと次の目的地に赴いた

……

「アークビショップ「最大主教」がこんな事を？」

次にやってきたのはイギリス凄教女子寮

話をしているのはこの女子寮に住んでいる神裂火織だ

「ですが、唐突過ぎて意味がわかりません。それにあの女狐の事です、裏で何か企んでるに違いありません」

「いや…、それは俺も考えたんだけど…」

俺は頬をポリポリと書きながら

「けど学園都市にも招待状送っちゃったし？ 上条当麻に恩返しするチャンスだと思っぜ？」

「恩返し」という単語を聞いた神裂のこめかみがピクリと動く

「…、」

「まあそつちにも都合があると思うし、まあ無理にとは」

「行きましよう」

「…は？」

「その旅行に行くと言ったのです。アラストル、招待状を」

神裂火織の参戦が決定しました

.....

「行きます!!」

天草式十字凄教の本拠地に行ったところ、教皇代理の建宮を押しつけて五和が飛び出してきた

「お、おう、じゃ、荷造りしといてくれな」

「はい!!」

超満面笑顔の五和

……ま、まあ問題ないだろうさ

「建宮、お前もいろいろ大変だな」

「……お察しただけで嬉しいのよ」

災難な建宮に合掌し、俺はその場を後にした

.....

所変わって学生寮

「当麻ー、入るぞー」

ガチャリ、とドアを開け当麻の部屋に入る

「お、アラタ。お前の所にも来たのか？ この招待状」

「という事は、お前も？」

言われた当麻は二枚の招待状を見せる

「…なるほど、コイツは本物だ」

「いきなりでビックリだけど…もしかして、これってマジなのか？」

おずおずといった様子でそんな事を聞いてくる

「マジだな。久々の海外だ。たまには楽しんで行こうぜ」

「…、」

なんだか当麻が震えている

数秒ぶるぶるしていたと思っ た矢先

「やったあああああ！！」

叫んだ

「ちよ、どろした当麻」

「いや、俺さ、こつこつ旅行ものにちよつとトラウマあるからな…、
純粋な旅行って久しぶりなんだよー」

嬉々として立ち上がり荷を作り始める当麻

「なにになにとつまー、どうしたのー」

そんな様子が気になったのか三毛猫スライククスを抱えて当麻の元に歩み寄るイ
ンデックス

「…旅行、か」

これから何が起ころのかはまだわからない

だが、楽しい旅になる事には違いない

そう思いを馳せて、当麻の荷造りする様を見守った

Pr o l o g T o t h e H A Y A T E N O G O T O K U ! (前書き)

もついろいろ申し訳ないですm) | | (m

後書きにイメージOP主題歌を書きます

題名だけですけれど…

Prolog to the HAYATENOGOTOKU!

「では、よい旅を」

そう言って受付の人は僕にパスポートを手渡した

僕はそれを頂いて大切に懐にしまう

「僕、成田空港に来たの初めてですよ」

「ほう。じゃあ飛行機に乗るのも初めてなのか？」

「はい、初めてですお嬢さま」

この4ヶ月、様々、かつ激動な体験をしてきた僕にとって、「飛行機に乗る」なんて一大イベントを体験出来るなんて思いもしなかった

それもこれも、お嬢さまのおかげだ

「そっかー…、なら初めての海外なら暖かい南の島にすれば良かったな」

「そんな。ものすごく楽しみですよ、地中海の島だなんて」

そつ他愛ない会話を交わすお嬢さまの表情がいつもと違いイキイキしてるのがよくわかる

私生活が…、その、「アレ」なので普段はダラッとしています

「ハヤテ」

「は、はい！ 何でしょうかお嬢さま」

「今一瞬不愉快な地の文が見えた気がするが。気のせいだよな」

「もちろんですよお嬢さま。空耳です」

キヨロキヨロと辺りを見回すお嬢さまはムスツとした顔だったがやがて落ち着きを取り戻し

「ま、何にせよ」

お嬢さまは飛行機の見える位置に移動すると空を見て

「楽しい旅になるといいな」

純粹な笑顔でそんな事を言った

その一言に付近にいたマリアさんも笑顔で返し

僕もこれから始まる旅に心を踊らせるのだった

.....

綾崎ハヤテと三千院ナギ

この二人が主従となってからまだ四ヶ月

始まりはハヤテはナギを誘拐し身の代金をせしめようとふんでいた

のだ

こう言うとまるで悪人だがハヤテにもやむにやまれぬ海より深い事情があった

綾崎ハヤテの両親はどんなに頑張つてせいっぱい超好意的に表現しても「ろくでなしのクズ野郎」だ

無職の癖にギャンブル好きで借金を繰り返し、あまつさえハヤテが稼いだアルバイト代さえかつさらって利子の返済にあてるありさまあげくに積もり積もつた借金総額一億五千六百八十万四千円

これを息子であるハヤテにそっくりそのまま押しつけて行方知れずとなつた

ハヤテは生まれてこの方ずっと心正しく生きてきた

貧しくても苦しくてもいつか報われる

そう信じて生活してきた

が、その時ばかりは心が折れた

『結局世の中ズルい奴が勝つんだ、真面目に頑張つたとしても手に入るものなんてないんだ』

そう思つても無理はない

時はクリスマスイブの夜

たまたま公園で見かけた小さな女の子をさらって家族から大金をせしめようと画策した

その女の子が三千院ナギその人だ

だがこの計画は未遂となった

本物の誘拐犯がハヤテより先にナギを誘拐したからだ

ハヤテは誘拐犯の車に自転車を追いつくという常人には到底不可能な離れ業を披露し、ナギを救出

それを恩義を感じたナギは行く宛てないハヤテに執事として屋敷に雇用することにした

これが主、三千院ナギと執事、綾崎ハヤテの出会いだった

三千院ナギは世界融通の財閥系グループ総帥のご令嬢で、ハヤテの約一億五千万の借金を現金一括で肩代わりし、ハヤテはナギに仕えながら四十年かけてこれを返済してく運びとなった

しかしハヤテはこの生活を苦に思った事はない

肉親に裏切られ、全てを失ったハヤテにとって『ここにいていい』
と言ってくれた三千院ナギは大切な恩人で、役に立ってる事はこの上ない喜びなのだ

余談だが仕えるようになった時、ナギがヒキコモリクイーンでゲームオタクである事を知って驚くのだが、またそれは別の話

また、かつてハヤテがナギをさらおうとした際の会話に「ある誤解」が生じているのだが、これに触れるならまたいずれとしよう

.....

一方その頃千桜自宅、その自室にて

「皆今頃海外かー」

春風千桜は椅子に腰掛け、窓の外に映える大空を眺めていた

「お金持ちはいいな余裕があつて……」

「千桜さん？」

後ろから声をかけられて千桜は振り向いた

そこにいたのは皇海音^{カイト}という少年だ

中性的な顔立ちで、耳元で切り揃えられた髪は見ようには女の子にも見られるだろう

「どうしたの？ 黄昏て」

「いや、何でもなし。それより買った新巻を読もう」

そう言って千桜は机に置いてある紙袋から数冊の文庫本を取り出した

それは数日前に発売された新巻だ

千桜は椅子から立ち上がるとベッドにぽふと壁に背を預けながら座って、その隣に海音も座った

これが二人の日常

最初は千桜が既に購入した文庫本を海音を一冊ずつ海音が読んでいたのだが、学校に行っていない（ちよくちよく遊びには行ってる）内に殆ど読破してしまったのだ

それで経費を抑える為に二人で一冊を読もう、という事になったのだ

無論最初千桜は物凄く恥ずかしかった

すぐ横に海音の顔があるのだから

だが何時の間にか慣れてしまった

慣れてしまったのは単純に千桜が彼にある感情を抱いたのと、彼女の心境が変化した事にあるのだが

「それにしても海外かー」

「千桜さんそればかりだね。行きたいの？」

「そりゃあね。けど我が家にそんなお金は」

「行くっつか？」

「…へ？」

彼の存在が

「行くつて…、どこに?」

「愛歌さんや、皆がいると」

本来参戦しなかった少女をいざなっていく…

Prolog To the HAYATENOGOTOKU! (後書き)

OP主題歌

『No buts!』

川田まみ

出典『とある魔術の禁書目録?』

チャプター1（前書き）

三者三様な機内の様子

チャプター 1

飛行機というものには明確な格差がある

まず一番安いエコノミーなら三万円の席があり、ビジネスはその約五倍の十五万円

ファーストクラスなら同じ場所に行くだけでもそのビジネスの倍の三十万円にもなる

ではそんな格差社会の中、上条当麻らは…

「とうま！　とうま！　なんだかいろいろすごいよ！」

「はいはい、わかったからあんまハシャぐなインデックス」

内側から外の景色を見てハシャぐインデックスにそれをたしなめる当麻

「けど、テンションも上がるよなこんな状況じゃ」

なんだかんだで時たまインデックスと一緒にあって外の風景を眺めている姿を見ると当麻も楽しいのだろう

そんな状況の中俺は…

「飛行機かー…、これでアラタと二人きりならロマンチックなんだけどなー」

隣に座っている恋人、御坂美琴はそう愚痴る

「愚痴んないでくれ美琴。とりあえず、学園都市で待ってる黒子たち土産考えないと…」

学園都市では現在佐天や初春、黒子がお留守番している

「気が早いわよ、アラタ」

「そうそう、最初の内は、このバカンスをどう楽しむか考えないと」
そう言っただけでヒョコッと頭を出したのは、後ろの席に座っている伊達明さんと

「いやー、海外なんて初めてだー…ふふふ」
気味悪い笑みを浮かべたのは神那賀雫だ

「こらバカアラタ！ 気味悪いってなによ、くら！ 聞こえてるの！」

なんだかワーワー言ってるが、気にしない

「気にしろー！」

「そついや伊達さんはなんでいるんです？ 伊達さんには招待状来てないって話ですけど」

「子供らだけの旅行なんて、おじさん許しませんよ。だから」

伊達さんは一拍間を置き高らかに言う

「実費で来た」

「…うわーお」

なんたる人だ

いや、この人ならやりかねん

「紅司さんと咲良ちゃんは？」

「俺の後ろの席さ。初めてだから、窓の外に釘付けよ」ぴ、と親指で後ろを指す

立ち上がって指した方向を見ると目をキラキラさせた紅司さんと咲良ちゃんの姿があった

「…なんだかんだで、楽しみなんだな」

少しだけ、イギリス淒教に感謝した

上条当麻とインデックスの席から後ろへ一つ離れた席

そこには天草式十字淒教の五和と現教皇代理である建宮齊子が座つ

ていた

「なんで建宮さんと一緒なんですか…」

「そんな文句言われても困るのよ…」

不満たらたらな五和を宥めるのはもう嫌なのよ

口には出さず建宮は心の中で呟いた

「けど、なかなか皆で旅行なんてないですよね？」

「それもそうよな…、どという風の吹き回しだ？」

ふとそんな疑問を口にする

アイクビシヨツ
最大主教とはあまり親しくはないのだが…

「ま、深く考えるのは止めましょう。束の間の休暇と考えれば」

「休暇にしては規模が大きい気がするのよな…」

同飛行機に同乗しているステイルと神裂は後ろからその光景を眺めていた

「全く…。浮かれすぎといつかなんといつか」

「浮かれてしまう事情もわかります。何人かは、外国も初めてのよ

うですし」

「やれやれ……」

言いながらステイルは何気なく懐にしまつてあるタバコへと手を伸ばす、が

「ステイル、機内は全面禁煙ですよ。それは貴方でも例外ではありません」

言われたステイルはぴく、と手を止めてやがて懐から手をのける

数秒、間をあげて再びステイルは懐に手を伸ばしガサガサと何かを探す

「ステイル、だからタバコは……」

取り出したのは見た目こそタバコの箱だが材料は木だ

ステイルはそこから何かを取り出すとそれを口に放りガムみたいに噛み締めた

「……。ステイル、何ですそれは」

「噛みタバコだ」

「……私は貴方とそれなりの付き合いですが、時折貴方がわからなくなつてきます」

「わかってないな神裂。ニコチンとタールのない世界の名前は地獄という。そして僕のように善良で敬虔^{けいけん}な仔羊は地獄に落ちるような

事はあつてはならないんだ」

なんだそれは、と神裂は内心溜め息を漏らす

しかしそれがステイルだ、と勝手に納得し、旧友の行動を追求するのを止めた

「…にしても、噛みタバコなんてあんのかよ」

二人の後ろの席から声が聞こえてきた

二人は首だけ後ろにやってその人物を確認する

と言つてもその人物は二人の知人だ

「入手は容易だよ。普通に売っている場合もあるしね」

「齊堵、貴方もそれなりに満喫しているようですね」

白いYシャツに青ジーンズとめちゃめちゃラフな格好をしている男性は名を霧島齊堵きりしま さいとという

以前学園都市にちよくちよく姿を現していたが、突如姿を消した謎の人物

その正体は「必要悪の教会」ネセサリウスに属する魔術師で、仮面ライダーオーズでもある

ちなみに、劇場版で、超電磁砲編以来久しぶりの登場である

「なんだ不愉快なナレーション」

齊堵はそれを聞き流すことにした

「まあはっきり言って誰も覚えてないだろうね」

「そうですね」

「そこ。同意するな」

話を戻す

「ステイル、齊堵。此度の最大主教アークヒショッフの行動、どう思います」

「あの女狐の考えていることが、僕たちにわかるとでも?」

ステイルは憎々しげに舌を打つと最初に噛んだ噛みタバコを紙に吐き出すと二個目の噛みタバコを口に含む

「全くだ。アイツの考えははっきり言って理解不能だよ、ホントに」

同じく憎々しげに嫌みを口にすると読んでいた雑誌をめくる

この答えはなんとなくわかっていた

アークヒショッフ
最大主教

彼女の考えていることはわからない

時に自分たちを欺き騙したり時に協力的だったり

「…ワケのわからない女です…」

神裂は一言言うと、鞆の中から本を取り出すとペラペラと捲り読み始める

場所は変わって三千院ナギお嬢様たちの移動風景

現在三千院ナギお嬢様は「自家用ジャンボジェット機」でゆづゆづと移動してました

「…、」

我らが庶民代表、綾崎ハヤテはそんな機内で呆然とするしかないのだった

「いや、なんかもおすごすぎて声も出ませんね」

「何がだよ」

ハヤテの疑問にナギはごく当然に答える

「これならミコノスの空港に直接乗り入れられるから便利なんだよ」

「どんだけ金積みめばそんな事が許されるんですか…」

まさしくそれは金持ちの特権、お嬢様の成せる荒技だ

しかしそれにはちゃんとした理由がある

「普通の飛行機に乗るのは気が引けるんだよ」

「誘拐とか、ハイジャックとか。他の人を巻き込むかもしれないし…」

ナギの言葉の続きを紅茶を乗せたお皿を持ったマリアが引き継ぐ
なるほど、とハヤテは納得した

確かに一般の飛行機に乗って目的地に行くのも良いかもしれない

しかしその一般の中に自分が紛れ込んでしまう事で、関係ない人たちを巻き込む恐れがあるからナギは自家用という手段を取ったのだ
(確かに旅行とはいえ浮かれていてはダメだ。場所は外国、どんな危険が待っているかわからない…)

ハヤテは誰に悟られる事なく密かに決心する

(三千院家執事として、僕がお嬢さまをお守りしなければ…！)

とハヤテが一人決心してる最中、ナギがハヤテに声をかける

「そうだハヤテ。お前は旅行の間は執事服着なくていいからな。バカンス中は好きにしていぞ」

そんな言葉に驚かされたハヤテは普通に疑問を投げかける

「え？ な、何故ですか？」

「行くとわかるけど、ミノノスはものすごく安全な島だからさ」

「もう何年も大きな事件が起こっていない平和な島なんですよ」

ナギとマリアの二人が言うとなんだか説得力がある

「きつとマフィアもとつくに廃業してるだろうから、守ってもらおう必要はない。それに何より……」

ナギは一拍間をあけて次の言葉は紡いだ

「これはバカンスなんだから」

また所変わって

今度は白皇学院内の深い森の中

そこは海音と千桜が出会った場所だ

「ここって……」

「はい。僕と千桜さんが出会った場所です。ここに、デンライナーが……と」

海音がケータロスを弄る

するとさっきまで何もなかった空間に電車が現れた

それが海音の移動手段

デンライナー・ゴウカだ

「…え？　もしかして海音くん、これで行くの？」

「はい。流石に時を飛んで移動は出来ませんし、移動速度は平均の飛行機並みですけど…。高度を高めれば問題ないと思います」

海音と二人で旅行に行くのは嬉しくないと言ったら嘘になる

無論嬉しいに決まってる

ただ…

>流石に、ゴウカで移動するのはちょっと…無理があるんじゃないかねえか？<

呟いたのは海音の首にかけてある四色の宝石の赤、「モモタロス」だ

「大丈夫。こういうのって、堂々としていれば受け入れてもらえるよ」

そのポジティブを見習いたいよ

千桜は心の中でそう心情を吐露した

とりあえず千桜は色々振り切ってデンライナーに乗り込んだ

これから始まる海音との旅に想いを馳せて

「あ、そうだ千桜さん」

「ん？」

デンライナーの中でラノベを読んでいた千桜は海音に呼ばれて顔を上げた

「旅行先に着いたら、僕の傍をあまり離れないでください」

「え？ そりゃ、離れる気は、ないけど…」

言った数秒後のその一言が物凄く恥ずかしい言葉だと気づき顔を真っ赤にする

「正直にぶつちやけると、マフィアとかがないとも限らないんです」

「む、むう」

至極当然な問題だ

「千桜さんにもしもの事があつたら千桜さんのご両親に顔向けできない。…だから貴女は僕が守りますから」

「…め、面と向かって言われると、照れるな…」

頬を赤らめながら千桜は返す

「ちーちゃん顔が赤ーい」

デフォルメリュウタロスがそんな千桜を冷やかした

「ば！ なんな何言ってるんだリュウタ！」

「だってホントなんだもーん」

とてとてという擬音が漫画なら書かれてそうな速度で海音のペンダントの中に戻っていった

「…まったく、リュウタったら…。…ごめんね、千桜さん」

「気にしないで、もう慣れてきたから」

そう考える自分も、なんだかいけない気がする

そんな思考を千桜は心のゴミ箱に投げつけた

「とにかく、私をエスコートしてくれるんだろう？」

そう千桜が言うと海音は数拍黙った後千桜の前に歩いていき、膝を着いて

「はい、お任せあれお嬢様」

最近読んだ黒い執事っぽく海音は手を差し出した

「…、こほんつ。…任せるぞ、海音」

ノリに合わせて千桜も返し、その掌に自分の掌に乗せる

そしてお互いの顔を見て、どちらともなく微笑んだ

チャプター2 (前書き)

空港到着、そして出会う二組の物語

チャプター2

「お、見えてきたぞ」

俺がそれを言うと皆一斉に窓を見始めた

「うわぁ…!!」

隣の美琴が感嘆の声をあげながら、視線を一点に集中させる

その後その一点の周囲に目を配らせる

「あれがエーゲ海か…、人生生きてる内に、こんな絶景が見れるなんて…!!」

「な、なんだかとうまが悟りをひらいた修行僧みたいなんだよ」

きっとそれはいつもの発作だ

俺は内心そんな事を呟きつつも、高揚する気分を隠せない

「けど確かになかなか見れないよな、こんな光景」

「俺も色々海外生活してたけど、初めて見たぜ…」

ふと気になる単語を聞いた

「伊達さん、海外言った事あるんですか？」

そんな疑問を先に感じた紅司くんが俺より早くその事を問いたです

「昔医者やっててね、紛争地域の近くに陣取って、怪我人を治療してたのよ」

そう言っただけか遠い目をする伊達さん

その目に何かを感じ取った紅司くんはそれ以上追求をしなかった

「そろそろ空港に付くから、席に座ってベルトを締めてくださいーい」

神裂の一言でガタガタと音を立たせながらそれぞれ席に座りベルトを装着

着陸姿勢を取った

「…初めての海外旅行…、楽しみだな」

隣の美琴がそう呟いたのを俺は逃がさなかった

…俺なりに、思い出を作っただけだと、心から感じた瞬間だった

そんなこんなで飛行機から荷を持って降りる

空港内では怪しい物等を隠し持っているかをチェックするゲートがある

わかりやすく言うとボディチェックだ

天草式の二人は常に武器を隠し持つことを常としている為か、見事そのボディチェックをかいくぐる

神裂も荷物と一緒に七天七刀を送ってるらしく、ボディチェックを受けた後に受付で大荷物と一緒に布でくるんだ七天七刀を受け取っている

ステイルは身に付けている貴金属がセンサーに引っかかり、鬱陶しそうに係員の指示に従っている

伊達さんや、神那賀、俺と美琴はセンサーに引っかかることなく通過する

次は上条当麻とインデックスの二人

当麻は難なく通り過ぎるが

>ピー！<

インデックスが引っかかりました

「にゃ！ と、通してほしいんだよ！」

インデックスが着ている修道服は大きめの安全ピンで繋ぎ合わせている

その安全ピンが金属製な上、使い方次第では凶器になると判断されたのだ

数人のSPみたいな黒服を着た係員がやってきてインデックスの周

困をかこむ

「ちょ…通してよ！　ねえってば！」

このままではジリ貧だ

そう感じた当麻とアラタは頷き合う

まず当麻がインデックス近辺にいる係員を説得し時間を稼ぐ

その際に空港内のお土産ショップ等を漁り金属製安全ピンの代わりになるものを物色する

…お、このプラスチック製の安全ピンなんかいかがだろうか

レジに赴いてそのプラスチックピンを清算し、急いでインデックスたちの所に戻る

「美琴、インデックスの安全ピンのところをこのプラスチックピンに付け替えてきてくれないか？」

「おっけー。インデックス、ちょっと来なさい」

「うん、わかった」

美琴につられてインデックスはトイレに入っていく

「到着早々災難だねえ、上条ちゃん」

若干疲れた顔をしている上条当麻に伊達さんが言葉をかける

「全くです…」

「本当にな。上条当麻、貴様貴金属類が引つかかる可能性がある事くらいはわからなかったのか？ あの子に無駄な事をやらすな」

眉間にシワを寄せてステイルが当麻の胸ぐらをつかむ

「気が付かなかつたんだって！ ホントだよ！」

このステイル、実は過去にインデックスの隣にいた人物なのだ

しかしインデックスは最大主教により植え付けられた魔術により、一年ごとに記憶を消さなければならぬ状態にあった

ステイルは記憶が無くならない方法を探し奔走するが、結局何も出せずに、涙を流しながら断腸の想いで彼女の記憶を消去した

そしてステイルは誓った

「君が全て忘れても、僕は何一つ忘れず君の為に生きて死ぬ」、と

「ステイル…、彼もそう言ってるようですし…」

今ステイルを宥めている神裂火織もその一人

ステイルと共に奔走したインデックスの親友

どんなに思い出を作っても、どんなに楽しく過ごしても

一年の度にリセットされる

そんな拷問みたいな事を二人はずっと実行し続けてきた

ならその悲しみを少しでも軽減させようと二人自らが「敵」となる事で、悲しみを和らげてきた

しかしその呪縛を解き放った一人の少年がいた

その少年が今ステイルに胸ぐらを掴まれている上条当麻だ

異能ならば全てを打ち消すその右手「幻想殺し」でインデックスに植え付けられた魔術を打ち消した

少年のおかげで今のインデックスがいる

ステイルは既に自覚している

かつて自分がいた場所には上条当麻がいて

もうその場所には戻れない事も

だがステイルは自らに立てた誓いを最優先とし、今後もそれを変える事はない

それほどの決意を、彼はしたのだ

「今後はしっかりと確かめるんだな、上条当麻」
パツと胸ぐらを離れたステイルはタバコを取り出して吸い始めた

「はあ…、やっと解放されたぜ…」

げっそりしている当麻に俺は声をかける

「災難だったな、当麻」

それに対し苦笑いをして返す当麻

「お待たせー、ちょっと手間取ったー」

安全ピンを付け替えたインデックスと美琴が駆け足で戻ってくる

「気にすんな、そんなに待ってないから」

「とうまとうま、あれ食べたい！」

「早速かよ！ 機内食あれだけ食べてまだ足りないか!!」

機内食を数十人分たいらげた時は流石に驚いた

そんなインデックスを優しげな瞳で見守るスタイルの表情がどこか寂しげだったがすぐに笑みを浮かべた

と、そんな時

「運命をバカにするなー!!」

そんな大声が俺を含むそれぞれの人物に聞こえてきた

「運命をバカにするなー!!」

そう言ってお嬢さまは僕の顔面に自分が持っていたカバンを直撃させた

結構痛い

「だ、大丈夫？」

近くに居合わせた泉さんが駆け寄って声をかけてくれる

「え、ええ……」

なんだか体が痙攣する

だけどこんな難所何度もくぐり抜けてきたから、なんとか耐えられます…：そう、気合で

「ハヤテくん、本当に大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫ですマリアさん。…だけど、どうしてお嬢さまはそんなに怒ってらっしゃったのでしょうか…」

空港で偶然泉さんや朝風さん、花菱さんと出会って、今晚はヒナギクさんと西沢さんがやってくる

そう偶然が重なるとちよつとした運命を感じ率直な感想をお嬢さまに告げただけなのに…

ちなみにマリアさんが苦笑いしながら僕を見ていた事に僕は気付きませんでした

「ころー！ スフィンクスー！」

いきなり幼い女の子の声が聞こえた

「インデックスー！ なんで連れてきてんだよー！」

「だってだって、スフィンクスだけお留守番なんて可哀想なんだもん！ …あ、待ってよスフィンクスー！」

向こうの方から小さい三毛猫が走ってくる

僕は目の前を駆け抜ける三毛猫をタイミング良く捕まえた

「おっと…、捕まえましたよ」

手の中ではたばたと手足を動かす三毛猫は可愛い

「わー 可愛いー！」

泉さんがお腹の辺りをさわさわしている

「ホント…。雑種…。ですかねー」

マリアさんも興味深そうにその三毛猫を見る

「シラヌイに似た可愛さがあるな」

何時の間にか戻ってきたお嬢さまもその三毛猫を見ていた

「はあ…。はあ…。ありがとうございます、スフィンクスを捕まえてくれて…」

息を切らした修道服の…

「…シスター？」

頭に被ってるフードからはみ出ている銀髪に瞳は碧眼

どう見ても外国のお方だ

「はあ…はあ…。すみません、ご迷惑かけて！」

シスターの後ろを追ってきたツンツン頭の人が頭を下げる

「迷惑だなんてそんな…」

言葉を返しながらしスターに三毛猫を返す

「全く。勝手に行っちゃダメだよスフィンクス」

頬摺りしながら三毛猫スフィンクスを撫でる

「当麻」

ツンツン頭の人の更に後ろの方から歩いてくる二人連れ

一人は白い帽子に白スーツを着込んだ一見紳士みたいに見える男性、その隣には薄茶色の髪に肩辺りまで切り揃えられた髪に制服のブレザーを着てスカートを履いていた女性の姿があった

「スフィンクスは？」

「この人が捕まえてくれたんだよ」

そう言ってシスターさんが僕に顔を向けた

「他の皆は？」

「先に宿泊先に行ってもらった。おつきい荷物も建宮さんと伊達さんに持ってもらったよ」

ツンツン頭の人はそれを聞くと安堵の息を洩らした

「あ…、なんか色々世話になって悪かったな。…俺は上条当麻、んでこいつはインデックス」

上条さんは紹介しながらシスターさんの頭をポンと叩く

「よろしくね、ネコのお兄さん」

「ど、どついつ覚えられ方ですか…」

それにインデックスって…

ものすごく気になったけど追求は止めておいた

第六感がそう言っている

「ふふふ。…自己紹介するならば、我々もしなくてはなるまい！」

朝風さんがそう言つと

「ニコニコ笑顔の、いいんちよさんレッド、瀬川泉！」

「クラスの叡智！ 副委員長ブルー、花菱美希！」

「そして敵か味方か！？ 風紀委員ブラック、朝風理沙！」

『三人揃って！！ ザ・生徒会役員！！』

ドオオン！ と背後で爆発音がした（気がした）

「個性的な面子だな」

苦笑いしながら白い紳士さんが呟いた

「御坂美琴、よろしく」

「三千院ナギだ」

ああ！ お嬢さまが交友を深めてらっしゃる…！ これはおめでたい事だ

「鏡祢アラタ。好きなよう呼んでくれ」

「綾崎ハヤテです。よろしくお願いしますね、鏡祢さん」

言って僕らは握手を交わす

「ここで会ったのも何かの縁ですし、良かったら途中まで一緒にどうですか？」

「良いんですか？ どうする？ 当麻」

「せっかくの好意だし…、受け取るうぜ」

「おっけー。…じゃあよろしくお願いします」

鏡祢さんが頭を下げた

「いえいえ…、ナギの友達を増やしやすい機会ですわ」

そういう事ですか！ さ、流石マリアさん…

比較的友好的な鏡祢さんたちと行けば、お嬢さまの友人も増えるかもしれない

「では、我々は先に行くぞ。さらばだ、ハヤ太くんたちっ」

泉さんたちがとて、と空港から走っていった

「…ではハヤテ、私たちも行くぞ」

「はい、お嬢さま」

道中

先ほど綾崎ハヤテと名乗った人物の口から意外な単語を聞いた

それとなく落ち着いた物腰の女性に近づいて聞こうとした

「あ、そういえば名乗っていませんでしたね。私はマリア、三千院ナギお嬢さまの世話係をしています」

「世話係？ それって、メイドって事？」

「そう受け取ってもらって構わないですわ」

「え、となるとお嬢さまは…」

美琴と割と楽しく会話してる金髪ツインテールを見る

「…これは凄い方と出会ってしまいましたねー…」

俺は苦笑いする

「毎日が苦労の連続ですけど、それでも楽しいんですよ、ナギお嬢さまといると」

言いながらマリアさんは純粋な笑みを浮かべた

「…となると、彼も？」

「ええ、ハヤテくんは執事です。…最初はガン ムみたいな印象が強かったですね…」

どんな印象だろう

ものすごく気になったが、聞くと長くなりそうなので止めておいた

「上条さん」

前方から人影が見えた

ふわふわした羊みみたいなトレーナーの上からピンクのタンクトップを着込み、濃い色のズボンを履いた女性、五和だ

「やっと見つけましたよ…」

近くまで走ってくると疲れたのか肩で息をする

「五和が近くにいてるって事は、宿泊先は近くにあるのか？」

当麻が聞くと五和は頷いて

「はい、この道を真っ直ぐに数キロ行くと旅館みたいな建物があります。そこが宿泊先です」

「わかった。…綾崎、俺たち一旦ホテル…かどうかわかんないけど、

一度宿泊先に行くぜ」

「わかりました。お互いに楽しい旅行を過ごしましょう」

当麻と綾崎が軽く握手すると

「じゃあアラタ、行こうぜ。ほらインデックスも」

「うん。またね、なぎ、ネコのお兄さん」

先に当麻とインデックスが五和の後を走っていく

「じゃ俺たちも。行くよ美琴」

「うん。それじゃあね、三千院さん」

「うむ。またな」

軽く別れを告げて俺たちは宿泊先へと急ぐ

…だが、後ろで手を振っている綾崎たちとはまた会う気がしてならなかった

なんだろう

予感なのだろうか

これが、長い旅行の始まりだった

アラタたちとハヤテたちから遅れる事数十分

千桜と海音が到着した

「…これが、海外」

空港のガラスに手をつけてその景色に見とれる千桜

「千桜さん、まず宿泊先を確保しますから、一旦移動しましょう」

「あ、うん。わかった」

千桜がたたた、と荷物を持って走ってくる

「海音くん」

「ん？ なに？ 千桜さん」

「楽しい旅になるといいなっ」

純粹な笑顔に一瞬ドキツとする

「そ、そうですね…」

赤い頬を隠すため俯きながら海音は歩く

他とは違い彼らは二人きりでの旅行だ

これからの旅に、二人は想いを馳せる

三組がどう交わり、物語を紡ぐのか

絆の石を中心にゆっくりと、しかし確実に回り始める

チャプター3 (前書き)

リアルサイド 〱 鷺ノ宮のお嬢さま

チャプター3

三千院家の別荘

綾崎ハヤテはベランダに降り景色を眺めていた

「これがエーゲ海ですかー!!」

十七歳で凄まじい体験をしてきた彼にとって、このエーゲ海というものは一生に一度見れるか見れないか、いや下手すりゃ絶対見れない絶景だったろう

「ほらお嬢さまも早く早く!! 海がすごく綺麗ですよ」

そのお嬢さまは現在パソコンに夢中だ

「私のノートパソコンのクリアブラック液晶も綺麗だからいい」

その引きこもりを体現するような発言にハヤテは苦笑いを浮かべるばかり

「せ、せっかくの旅行なのにテンション低いですねー…」

「高くなる理由がないからな」

「先ほど上条さんや鏡祢さんたちと一緒にいた時は楽しそうでしたのよ…」

「それはそれ、これはこれだ」

しかし三千院ナギお嬢さまのテンションが上がらないのには明確な理由があるのだ

（狭いミコノスの中学校の連中がいて、夜にはハムスターやヒナギクが来るというのに、一体何が嬉しいのだ…）

三千院ナギは綾崎ハヤテに好意を抱いている

いや、本人は恋人同士と「思い込んで」いる

なぜナギはハヤテと恋人同士だと信じて疑わないのか

それはハヤテがナギを誘拐しようとした所まで遡る

その時ナギに対して「僕は君が欲しいんだ（人質として）」なんて事をナギに向かって言い放ったのだ

それを「愛の告白」と見事勘違いした三千院ナギは、自分とハヤテは相思相愛と信じている

一方ハヤテは子供には全くもって興味ないため、綺麗にすれ違っているのだ

ちなみにこの誤解、現在進行中

まだ解けてはいない

この真実を知るのはメイドであるマリアだけ

「じゃあ外に行きましよう外！！ 青空の下ならテンションも上がりますって！！」

確かにこの青天の下なら子供ならテンションがあがるかもしれない

しかし

「暑いじゃん」

一蹴されました

「せ、瀬川さんたちや鏡祢さんもいるんですから、一緒に遊ぶと楽しいと思いますよ」

「だったらハヤテ一人で行ってくればいいじゃないか」

ナギはカタカタとノートパソコンのキーを叩きながら

「私はこう見えてもプロ、プロの引きこもり。リゾートに来たからといって引きこもりを怠る訳にはいかないのだ」

それはどんなプロなんだろうと考えずにはられない

てゆうかなんだよプロの引きこもりって

「じゃあ外に行かず、ずっと引きこもってるんですか？」

「ああ」

ナギが素っ気なく答えると

「…そうですか」

明らかにテンションがガタ落ちしたハヤテの声色

「…お嬢さまと一緒に、楽しくリゾートを満喫したかったなあ…」
そんなテンションにちょっと罪悪感を感じるナギ

最後にハヤテは部屋の隅で体育座りをしてしまった

「ずーん」という表現がピッタリな状態だ

「ああ…、ハヤテくんとってもかわいそう…」

マリアにまで言われる始末

流石にナギも折れた

「ああもうわかったよ！！ ちょっとだけだぞ！！」

まったくといった感じでナギはノートパソコンをシャットダウンし
帽子を取る

(…まあいい、バカンスになんか頼らずとも、ハヤテはいつも私と
一緒なのだ)

唐突にナギは思い出す

遠い昔、マフィアから命がけで守ってくれた男の言葉を

『過去でも未来でも、僕が君を守るから…』

その男は自分を守った後煙みたいになくなってしまった

(そうさ。ハヤテはあんなウソツキとは違うのだ)

「言ったそばからどこ行つたのだハヤテは!!」

「ヘンですねー、さっきまで一緒にいたのに…」

「一体どこまで飛ばされた帽子を拾いに行つたのだ!」

風に流された帽子を取ろうと跳躍したら忽然と姿を消してしまった
綾崎ハヤテ

ちなみにハヤテはこのとき摩訶不思議パワーでタイムスリップし、
過去のナギの所にいるのだが

「まあバカンスだから好きにしていとも言いましたし、ハヤテく
んのことだから心配ないと思います…」

「それでも急にいなくなるなんて…」

「私たちと一緒にいるのがよっぽどイヤだったんですかね」

「へ?」

マリアの口からそんな言葉が放たれた

「それとも他に一緒にいたい誰かが…」

「な！ 何を言ってるのだ！！ ハヤテは私の事が大好きなのだ！
！ そんな大好きな私と一緒にいたくないなどと…」

嫌われてたりして

「！！」

そう意識してしまうとどうもその不安は拭えない

(いやいや、何を言ってる。そんな、嫌われるだなんてそんな原因
…)

みりんと間違えて洗剤を鍋にぶっこんでしまったり

割と痛いツツコミをハヤテに放ってしまったたり

思い出せばありすぎて困る

「まあ、私たちと遊ぶより瀬川さんたちや同年代の上条さんや鏡祢
さんたちと一緒にの方が楽しいかもしれないけど…」

「！？」

その言葉にナギはハツとする

(…確かに、私のようなわがままな女と一緒にいるより、他の女や
同年代と一緒にの方が楽しいのかも…)

そう考えてしまうと目尻に何か熱いものがジワリとくる

「もしかしたら、瀬川さんたちとビーチに行ったのかもしれない
ね」

「ビーチ？」

「ほら、ミコノスにはあるじゃないですか。パラダイスビーチって
いう、ヌーディストビーチが」

ピキ！！ と何かがナギの背筋を走った

「それはいかん！！ いかんぞハヤテえー！！」

「ちょ、ナギ！！ あなたまでどこへ！？」

「ちょっとハヤテを捜してくるのだー！！」

「いやー、到着早々仲良くなったなー」

宿泊先の各部屋にて

「全くだなー。…本当にこれは普通な旅行になりそうだよ」

軽い荷物を部屋の隅にまとめて、当麻と頷き合う

部屋には現在友人の当麻のみ

部屋割りでこうなった

美琴とインデックス、五和と神裂、ステイルと齊堵、伊達と建宮、
神那賀と紅司、咲良といった部屋当てがなされた

「さて…、当麻。俺は少し散歩に行つて来るな」

「ん？ おー、俺はちょっとこら辺り写メっとくな」
いかにも普通な行動を取る当麻を尻目に、アラタは部屋を後にした

「…王玉かー」

何となく呟いてみる

橙子から言われて来たのだがよく考えれば実物を見た事がなかった
見た事もないものをどう見つけよう

「無理だな、うん」

諦めが早かった

アラタは白い帽子を軽く握り頭から取る

そして満天に広がる青空を見上げてみた

「…青いなー」

白い雲がまばらに散らばりまっさらな空を彩る

学園都市、つまり日本でもなかなかこんな空は見ないだろう

そんなどうでもいい事を考えていると背中に軽い衝撃があった

「ん…？」

後ろを向くと和服を来た黒髪の女の子（バニー耳付き）がなんだかおろおろしてたのだ

「ご、ごめんなさい…、ちょっと、前を見てなくて…」

「あ、いやいいんだ別に。怪我とかないか、嬢ちゃん」

「は、はい…。五体満足です」

「そ、そりゃ良かった」

五体満足じゃなかったら俺は一体どうすればいいんだ

とりあえず橙子に義手義足を頼もう

アラタはそう考えてると

「あの…、もしかして私がぶつかった場所が腫れ上がったとか…」

よよよ、と言った感じで（それと一緒にバニー耳もしおれてる）し
おしおとなっていた

「いやいや、そんな柔じゃないし、大丈夫だよ。めっちゃ元気だよ」

それを聞くと女の子は笑顔を浮かべ

「良かった…」

ホッと一息ついた

因みにアラタは内心ハア、っしていたのは内緒である

女の子は鷺ノ宮伊澄と名乗った

「となると、三千院さんのお友達？」

「はい。…あれ？ ナギをご存知なんですか？」

「ああ。空港で会って、ちょっとしたキツカケで仲良くなったんだ」

「まあ…。これからもナギの友達でいてくださいね」

「もちろん」

とそんな他愛ない会話を伊澄と交わしていると

「あら…？」

伊澄が誰かを発見した

「ナギ…？」

「え？」

アラタも伊澄と同じ場所に視線を向ける

そこには扉に座り込んだ三千院ナギがいた

「…そういえば、ここで命を狙われたとき助けしてくれたアイツも、突然いなくなっただな…」

ふと公衆電話を見る

それは以前アイツが私に警察に電話をかけさせようとした電話

そして近くには海があった

自分を助けてくれたアイツと一緒に眺めた場所

『一緒に星を見に行きましょう』

自分を助けた男はそう言った

「たしかここだったな。…アイツがいなくなったの…」

一緒にここで海を見て、唐突にいなくなった

「…あんな事言っておきながらあいつも…、本当は私と一緒になんかいたくなかったのかもしれない…」

その辺に落ちていた木の枝を拾い上げ、砂浜に「ウソツキ」と書いてみた

波にとらわれいずれ消えるが特に意味はない

書きたくなったのだ

(きつとハヤテも…私みたいなヤツと一緒になんか…)

「ハヤテ…」

空が紅に染まっていく

「ハヤテ…」

静かな波の音が聞こえる

うつすら涙が零れてくる

「ハヤテえー！　　ー！！！」

その叫びも波の音にかき消されていく

「…、」

虚しくなったのかなぎは塀に座りポツリと呟く

「ふんだ。ハヤテのバーカ…」

そう呟くとまた無性に苛立ったナギはまた叫んだ

「バカバカバー…」

すると突然自分の隣に気配があった

叫ぶのを止め隣を見るといなくなった綾崎ハヤテが呆然と帽子を持って立っていたのだ

「は、ハヤテ！」

「！　お嬢さま…？」

「どこ行ってたのだ、マリアも私もずっと心配したのだぞ」

「お嬢さまこそ、こんなところで何を？」

「へ！？ や！ な、なんでもいいではないか！！」

先ほどまでちょっと涙目だったので慌てて空元気しごまかす

「ところでお嬢さま。僕さっき不思議な体験をしたんですよ」

「不思議な体験？」

「ええ、白昼夢かもしれないですけど」

ハヤテは遠い海を見ながら

「けど、なんでそんな体験したかはよくわかりません…」

「それはきつと、誰かが星の力を使ったのかもしれない」

二人の背後からまた別の声が聞こえた

「伊澄さん」

伊澄の後ろにはアラタも立っている

「何です？ 星の力って」

伊澄はゆっくりとした足取りでハヤテとナギの付近に立ち

「流れ星に三度願えば願いが叶う。…そんな魔法を、どこかの誰かが使ったんですね」

ハヤテは思い出す

かつて下田に旅行に行った時

夢の中に出て来て

『呼べばどんなところにも来てくれるのね』と言ってきた一人の女性

「そっか、じゃあいつも星空を眺めていた人が、祈るように願ったんだな」

ナギが言う

そんな事を行う人物を知っているように

「時間を飛び越えてでも守ってやれってですか？」

「へ？ 何のことだそれは」

ハヤテは笑顔で首を振り

「いえ、ただの独り言です。けど…」

ハヤテはその笑みをナギに向けて

「何も言わなくても、お嬢さまには全部伝わっている気がします」

真っ直ぐに言われ、そして先ほど思った事をナギは反省し

「そっだな」

赤い頬を隠しながらナギは言う

「これからの未来もよろしくな！」

「はい、よろしく願いしますね、お嬢さま」

そんな二人をアラタと伊澄は後ろの方で見守っていた

「やっぱりあの二人はお似合いだと思いませんか？ 鏡祢さん」

「そうだね、パツと見、兄と妹みたいな感じだけど」

そうですね、と伊澄は苦笑を浮かべながら再びナギらに視線を戻す

「私は昔、彼女を傷つけてしまったことがあるんです」

唐突に彼女は語り出す

「彼女のお母さんが亡くなって、悲しむナギは見たくなかった。…声くらいは聞かせてあげられる事は出来るかと思っただのですが、ただ彼女の心を傷つけただけ…」

「…なるほど。まだ十三歳くらいなのに、強いんだな、君は」

「いえ…。まだまだです。私は未だ未熟、もっと精進しないといいけません」

「なれるさ。君なら」

アラタは伊澄の力を見ていない

だが彼女の漂うオーラを感じ取ったのだろう

「おーい、そろそろ戻るぞー」

気付くとナギとハヤテは移動していた

「…じゃあこっちも戻るかな、当麻や美琴が心配だ」

「途中までは一緒ですから、良かったら動向しましょうか？」

「お、じゃあ動向されましょう」

前を歩くハヤテとナギを追って、伊澄とアラタも歩いていった

チャプター4 (前書き)

集まる人たち　　く類は友を呼ぶ？く

チャプター4

「なに考えてたの？ ヒナさん」

「ここは海上に行く船の上」

その船に乗っているのは白皇学院現生徒会長「桂ヒナギク」と潮見高校に通う何かと「フツー」な女子高生「西沢歩」だ

どれくらいフツーかと言うと「豆腐にはしょうゆ」みたいなフツーなのだ

「わかりにくいと思うけどな…」

「歩？」

どこか遠い目をして何かを呟く西沢にヒナギクは問いかける

「なんでもないです。…改めて、なに考えてたの？ ヒナさん」

「んー？ ナギたちも、この星空を眺めているのかなって」

「あたしも」

言って二人はクスリと笑い合う

「ハヤテくんにも、早く会いたいね」

「へ！？」

そんな不意打ちをくらってヒナギクは赤面する

「え、あ、うん…」

すっかりゆでだこみたいに真っ赤になったヒナギク

「そ、そうね…」

そんなヒナギクに向かって西沢は笑顔を浮かべる

「けどこの旅行にきて初めてじゃないかな、こうして二人きりでゆつくり話すの」

「ああ…、そういえばそうね。…ごめんね、せっかくの旅行なのにいろいろ騒がしくして…」

ヒナギクが謝っているのは彼女の同級生である「生徒会三人娘」の事だ

泉、理沙、美希はたいへんイタズラ好きで、いつもヒナギクは迷惑されている

三人がイタズラし、ヒナギクが怒鳴るといっつのはもう日常風景といつても過言ではない

「いやー、仲良くなれてとっても楽しいよー。昨日の夜なんか衝撃の事実を知ってもモードッキドキだったし…」

「衝撃の事実？」

何だろうそれは

「あ、そっかヒナさんその時もう寝てたから知らないのかー、理沙さんのこと」

「理沙がどうかしたの？」

「んとなー…」

話は昨日にさかのぼる

昨日の夜、ヒナギクは疲れからか少し早めに寝てしまったのだ

その数分後

「ま、キスくらい私もしたことあるんだけどな」

突如理沙の口から語られた衝撃の事実

『…』

黙る三人

ちなみにその三人は泉と美希、歩だ

「なにいいいいい!? ちょよ! 理沙お前!？」

「えー!? ホントなの理沙ちゃん!？」

その大声でちよっぴり目が覚めたヒナギクは夕食かなにかだと勘違いした

「あ、ハンバーグなら私もたべる…!」

「ヒナさんは黙ってて!!」

「ハンバーグはあとにしなさい!!」

そう一喝されたヒナギク（寝ぼけまなこ）は「なによもー」と言いながらまた深い眠りにしてしまったのだが

「け、けど!! それって要するにあれだな!？」

「わっ! 私みたいに小さい頃の話っていつか…!？」

「いや? ここの二ヶ月くらいの出来事だけど」

言って悠然とズズーと紅茶をすすする

『…』

三人は再度黙った

否、黙るしかなかった

「ほ、ホントなのそれ？」

ボー、と汽笛みたいな音を出す船の上でヒナギクは聞く

「みたいよ」

「そっか…、身近にいても意外と知らないことってあるのね…」

「ですね…」

意外はおろかまるつきり予想の斜め上をブツ飛んだ真実を知ったヒナギクはまた遠い夜空をなんとなく眺めてみる

「けどヒナさんはハヤテくんとキスしたいのかな？」

「!!!!?????」

またブツ飛んだ質問をされた

いや、そもそもどうしてこう恥ずかしい質問をサラッとと言えるのかこの娘は!!!

「な、何をいきなり…!!!」

「いやー、ていうか前から聞きたかったんだけど。ヒナさんって、なんでハヤテくんの事が好きなのかな？」

「はあ!？」

更にまたブツ飛んだ質問

「な、なんでって…!？」

顔を真っ赤にしてあたふたするヒナギクを見ながら流石に先の質問は少々恥ずかしかったのか軽く頬を赤くさせて西沢は続ける

「まあ二人つきりじゃないと聞けないし、あと正直その、私が言うのもなんだけど…」

いったん言葉を区切って西沢は言う

「あの白皇生徒会長とハヤテくんでは、その…、バランス悪いって
いうか…」

「貴女がそう言つとホントハヤテくん立つ瀬ないわよ…」

今もありありと笑いながら『借金はあるけど、僕は元気です』と言
ってるハヤテの姿が想像できてしまった

ヒナギクは赤い顔のまま「…むう」と考える仕草をしてやがて

「絶対言わない？」

決心した

「言いませんよ、誰にも」

「私も、その…考えた事があって。後から思い直してみると…その、一つしか思い当たるフシがないっていうか…」

「はあ…」

「だからね…その」

ヒナギクはそこで一度言葉を区切りたつぷり数秒、間をあけてやがて言った

「…一目惚れよ」

「…、は…」

意外にも可愛らしい答えだったから西沢はそんな声を吐き出す

「いい！？ ぜぜ絶対誰にも言っちゃダメよ！！ 特にハヤテくんには絶対ぜえつたい知られたくないんだから！！」

「あはは。わかってるって…」

ものすごく真つ赤な顔でまくし立てるヒナギクを笑ってなだめる

やがて西沢は星空を見て手すりに身を預けて

「けどそっか。一目惚れか…」

呟いて軽くハア、と溜め息を吐く

「そりゃまあ、不幸にもなるわなあ、ハヤテくん」

「？」

突如として意味深な言葉を呟いた西沢にヒナギクは怪訝な顔をする

「けどそれなのに告白しないなんて。ヒナさんはホント負けず嫌いなんだね」

「そー！！ そんなことないわよ！！」

やがて船も港に付き到着

船から地上に降りる階段を歩きながら会話を続ける

「ただちよつと…。くやしっていつか…」

「…、」

西沢はそれを聞きながら本人には聞こえないように心の中で思う

(それを負けず嫌いっていうんじゃないかな?)

言つとまた怒りそうなので深い心の中に入れしつかりと鍵を閉める

「見てなさい！ 絶対にハヤテくんが好きだって言わせてみせるんだから！！」

「その前に私が、口説き落としちゃうもんね」

お互いに言つて軽く見合う

そこにはライバルだからこそ伝わる「何か」があった

「あれ、西沢さんじゃないですか」

心臓が飛び出るかと思った

二人が振り向くとそこにはなんとハヤテとその主ナギがいたのだ

ちなみにその後ろにいた伊澄と男性

二人とも白スーツの男性には見覚えがない

しかしそんなことには気が回らないヒナギクと西沢は

「は、ハヤテくん!？」

「なんでここに!？」

なんてアホな質問をしてしまった

「え? なんでって…、旅行で、ですけど」

「あ、や…。そうだったね…。ところでハヤテくん、今の話…聞いてた?」

顔を赤くし内心ドキドキしながら先の話が聞かれてないかハヤテに問う

「へ? 今の話って…何か面白い話でもしてたんですか?」

ハヤテが聞いてないとわかった二人はわたわたと手を振り乱し

「してない!!」

「面白い話なんて全然してない!!」

全力否定

（あ、危なかった…）

（危つく自爆しちゃうところだったね〜）

顔を赤くしながらひそひそ話を始める二人を見て疑問符を浮かべるハヤテだったが

「じゃ。まあそういうことで。旅行楽しみよ。行くぞハヤテ。アラ
タも伊澄の案内頼む」

「俺らについていただけだからなー…」

「!?!」

そんなナギの行動に逐一早く反応したのが西沢だ

「待ちたまえ!!!」

がっしとナギの肩を掴む西沢

内心ナギが（きたよ…）と思ったのは内緒だ

「えーと、あー。西沢さんでしたっけ。何か私にご用ですか？」

「急に他人の振りしないでくれるかな？」

面倒な事になると感じたナギが速攻で他人の振りをするが西沢は一
蹴する

「せっかくこう、はるか異国の地で再会したんじゃない。だからこ
う、なんかもっとお祝いの事を…」

「行くぞハヤテ」

ナギ一蹴

「て聞きなさいよ!！」

「なんでお前と異国で会った事を祝わなきゃならんだ!！」 どちらかといえばその不運を呪うわ!！」

「なんですつてー!！」

そうひと悶着あったが問題なくナギの別荘に到着した

「ふわー、別荘でこれはすごいねー」

西沢とヒナギクも込みで

また付近には伊澄とアラタもその別荘を眺めている

伊澄はあまり表情が変わってないがアラタは口をあんぐりあけてスケールの違いにただびっくりしていた

「だからなんでついてきてるのだ!！」

「いいじゃない!! 同じバイト仲間でしょ!？」

ナギはハヤテと早く二人きりになっていちゃラブな事したいわけなのだが

「…まあいい、じゃあお前たちだけだぞ!！」

で中に入ると

「あ、お帰り」

「遅かったな」

生徒会三人娘がくつろいでおられました

ずーん、と両膝について脱力するナギ

いや、三人娘だけならまだしも

「あ、お邪魔してまーす」

「あれ、当麻」

アラタの友人や

「おかえりー」

空港で会ったシスター

「マリアさん、クッキーが焼けましたー」

「こっちもー」

美琴と神那賀もいた

「なんでいるのさ、美琴と神那賀が」

「マリアさんに誘われたのよ。それにほら、料理とかも習いたかつ

たし…」

「マリアさんから学ぶ事ってスツゴいあるんですよー」

「五和もいたのか…」

こうなると軽いパーティーモードだ

しかしナギはそれが気に入らないらしく

「なーんでこんなに人がいっぱいいるのだー!!」

「ははは、テレるなテレるな。我々は同じ動画研究部の仲間じゃないか」

「仲間になった覚えはない!!」

「はっはっは。テレるなテレるな」

「テレてなどいないわ!!」

そんな光景を見てたハヤテをナギは見ながら

(ハヤテだって私と二人きりで…)

しかし予想に反して

「そうですね、せっかく皆さん集まったわけですから、お祝いでもするのがいいかも知れませんか」

「なあ！？」

「おー！ さすがハヤ太くん。わかってるじゃないか！..」

「構いませんよね、マリアさん」

「ええ。しかし、どうしたんですか？ ハヤテくん」

そう聞かれたハヤテは笑みを崩さず理由を述べる

「お嬢さまがすぐ引きこもろうとするのは、友達と遊ぶ楽しさがあまりわかっていないからだと思うんですよ」

彼は一度着替えるべく部屋に戻ろうと背を向けながら続きを語る

「ですからお嬢さまの執事として僕が、このリゾートでみんなと仲良くする事の楽しさを教えてあげないと。..そうじゃないと、あの星空から見ている人がまた心配してしまうから..」

それがハヤテの想い

それがナギと共に彼女の母の墓前で誓ったことだから

「じゃ僕ちよつと執事服に着替えてきますね」

「あ、ハヤテくん」

ハヤテは足早に部屋に戻っていった

「..みんなで仲良く、か..」

マリアは一人想う

(…まあハヤテくんが色々な人と仲良くすると、やっぱり事が増える気がするんですよ…)

メイドさんの心配は続く

「ふー…」

ドサツと床に荷物を置き息を吐く

「波乱な旅になりそうねー」

軽く額の汗を拭いながら春風千桜は呟いた

「そうですねえ…」

バサア、とベッドのシーツを整えながら同室にいる海音が返す

ここはミコノスにあるホテル

割と安い場所を探す内に一日が終わってしまったのだ

「しかし海外旅行というのも、案外疲れるのね…」

「そりゃそうですね。お金とかも両替しないとイケませんし…」

ぼむ、と枕を置きベッドメイキングを終える

「よし…、千桜さん、終わりましたー。先にシャワー浴びててくださいー」

「うん、じゃあお言葉に甘えるよ」

千桜が着替えを持ってシャワールームに入っていく千桜を見送り海音はひと息をつく

「…喜んでもらえるかな…」

言いようのない不安がこみ上げてくる

海外旅行なんてのは初めてだ

それも女の子と二人きりというシチュエーションなんてのも未開の地だ

首にかけてある四色のペンダントにはイマジンたちがいるのだが人間ではないから除外する

「…頑張らないと…」

人知れず海音は決心する

この旅行の間は千桜を笑顔にさせ続けてみせると

「あがったよ海音くん」

「あ、はい」

意外に早かった

今日いろいろと歩き回ったから早めに休みたいのだろうか

「気持ち良かったよー、海音くんも入ってきたら？」

「了解ですー」

千桜さんに促されて海音も着替えを持ちシャワールームに入る

(…：そういうえば、このシャワールーム千桜さんが使ってたんだっけ…。
…：は！ 何考えてんだ僕は！)

雑念を振り払い海音は体を洗う事に集中する

洗い終わって服を着てシャワールームから出た海音の目に入ってきたのは

「…すう」

椅子に座ったまんまで寝てしまった千桜の姿だった

「千桜さん…」

起きてください

そう言おうと思ったが気持ち良さそうに寝入るその顔は起こすのを躊躇わさせる

「…、」

海音はベッドの毛布を退けて、千桜を抱っこする

起こさないかな、と心配したが思ったより深く寝入っていたようで
起きる気配はなかった

「…よいしょ」

優しくベッドに寝かせて毛布をかける

毛布をかけた時ふと気づいた

千桜の手が自分の服の袖をきゅ、と握っていたことに

「…千桜さん…」

なんだか離れるのが忍びなくなってきた

自分を信じてくれる千桜の温もりを袖に感じながらその場に膝をついて
ベッドに顔をうずめて、就寝した

チャプター5

「ハヤ太くん。次はシーフードカレーが食べたい」

美希が言った

その数分後

「はい、独自ブレンドのスパイスで魚介類の香りが引き立ちますよ」
テーブルの上にハヤテがシーフードカレーを置く

「ハヤ太くん、ちょっとパスタを作ってくれないか？」

今度は理沙

また数分後

「はい、良いトマトと海老があったのでアラビアータで仕上げてみました」

またテーブルにパスタを置いた

かなりのスピードだ

「ハヤ太くん、美味しいケーキが食べたいな」

最後は泉

これもやはり数分後

「はい、ポイントは甘さを砂糖ではなく水飴で出しているところですよ」

海外でもその高性能ぶりを発揮する執事ハヤテ

そんなハヤテを見てげんなりするこちらの女性陣

「…格が違いすぎる…」

「レベルが、高い…」

「完敗です…」

上から美琴、神那賀、五和だ

「まあ年齢の近い男にあんだけレベルの違い見せられちゃあね…」

人数分の麦茶をお盆に乗せた上条当麻が呟いた

「手伝いか？」

「ああ。ただ遊ぶのも悪いと思ってさ」

ことり、とテーブルに麦茶を置く

「では次はこのケーキに合うコーヒーを…」

「もー…、あなた方いくらなんでも頼りすぎよ」

一方でまたハヤテに何か注文しようとしていた三人娘を制止する

「いいじゃないか。なー、ハヤ太くん」

「ハヤ太くんの作る料理美味しいよー」

無邪気に答える理沙と泉

「僕は喜んでいただけありがたいです」

当のハヤテは執事という立場だからか、奉仕という行動を楽しんでいるようだ

「全く…ハヤテくとすぐ甘やかすんだから…」

流石にハヤテにばかり働かせるのは悪いと感じたヒナギクはハヤテを手伝おうと歩を進める

「コーヒーくらいは私が入れるわ、ハヤテくんは待ってて」

すると先ほどまで黙っていた三人娘が

「おお！ 気がきくなヒナ！！」

「私カフェオレ！ カフェオレがいいぞヒナ！！」

「ああもう！！ わかったわよ！！」

今日も大変な生徒会長だ

注文を終えた理沙がソファに体重を預けてふと呟く

「しかしこうして異国の地で、皆と会って夜を明かすのも楽しいな、ナギちゃん」

言われたナギ本人は

「ああ。ホントスマ ラは楽しいよ」

まさかの大ヒットパーティーゲームを一人で絶賛プレイ中

テンションだだ下がりだ

「い、いかん！ 古来京都ではぶぶ漬けを出されると帰れという合図だったそうだが…」

と理沙

その言葉の続きを美希が引き継ぐ

「現代では遊びに行った先でそいつが一人でマリカを始めたら帰れという合図…。ナギちゃんのテンションガタ落ちだ！！」

果たしてそんな合図があるのかはなはだ疑問があるが、ナギのテンションが低いのはよくわかる

ついでに美琴ら三人もテンション低い

「…皆と仲良く遊べばお嬢さまの引きこもりがちな性格も治るかと
思いましたが…」

「ちょっと逆効果でしたかねー…」

執事とメイドがそんなことを言った

…悪くはないと思うのだけれど

「よし！！ ならばナギちゃんのテンションを上げるために！」

「私たちがとっておきの花火セットを！！」

「持ってきてやろうじゃないか！！」

こんな時にはっちャけるのが三人娘だ

「待っているハヤ太くん！！ 今すぐ取ってきてやるからなー！！」

「あちよつと、皆さん…！！」

「…良い人たちだな」

アラタが言った

「…はい。本当に」

それにハヤテも笑顔で返答する

直後にマリアが

「ですけど取りにいつてこの夜中に戻ってこれるかしら」

不吉な一言

「うっ…」

流石にハヤテが呻く

夜といっても結構暗い

おまけに割と道は迷いやすいのだ

日光がある昼間などは安全だが、夜間は一気に不安になってくる

それくらい暗いのだ

「…私もちよっと一緒についていきますね」

不安になったマリアが道案内役を買って出た

「いいんですかマリアさん…すみません…」

申し訳なく思ったハヤテが謝罪する

「ふん、何が花火だ。そんなものくらいで私は…」

「あの、ところでナギちゃん」

つっけんどんなナギにおずおずと西沢が聞く

「このお屋敷のお手洗いつてどこかな？ ちょっと広くて迷子になりそうで…」

「あ、それ私も聞こうと思ってたんだー」

西沢に便乗して美琴が立ち上がって駆け寄ってくる

「言うておくが、ここからだ結構距離あるぞ」

「ホントに？」

美琴が聞き返す

「ああ、だったら僕と一緒に行って、トイレが済むまで待ってあげますよ」

そんなことを言ったハヤテの肩に西沢の手がすごい勢いで「ぐわし！！」と掴んだ

「デリカシー。この言葉の意味がわかるかなハヤテくん」

「…あ、はい。すみません…」

失言と気づいたハヤテが再び謝る

直球でああいった言葉を言う人物は流石にいないだろう、とアラタ

は苦笑いする

ちなみに先の発言を聞いた美琴がアラタを頬を赤くしながら睨んでいたが気にしないことにする

「まあしょうがない。案内してやるからついてこい」

ナギが（珍しく）承諾した

「あ、ありがとー」

「ごめんね、ナギちゃん」

素直に感謝を述べる二人だがハヤテは普段がアレなナギの行動に少々驚いた模様で

「お嬢さま！？ なぜそんなに素直な事を…」

「別にいいだろ！？ 詮索するなよ」

若干頬を染めているその表情でなんとなくわかってはいた、しかしハヤテは

「あ、そうか、お嬢さまもずっとトイレに行きたくて…」

無神経発言

「デリカシー。この言葉の意味を体で教えてやるつかハヤテ」

「あ、スミマセン…」

また怒られるハヤテ

「…綾崎って、鈍感なのか…？」

本人には聞こえないようにアラタはそんな事を呟いた

「…ん？」

ふとアラタは壁に掛けてあった一枚の絵に目がいった

「どうした、アラタ」

「いや…、この絵…」

言われた当麻も壁に掛けてある絵を見る

その絵は太陽のようなものを背景に、丘の上に一件のお屋敷が建っている

下方行には大小さまざまな柱があつてどこか神々しい

他にも羅針盤や、アラタにはよくわからない人物の絵画が飾つてある

「…お金持ちの絵ってやっぱり神秘的だよなー」

無邪気にそんな感想を漏らす当麻

「…ん？ 当麻、こつちには何か文字が書いてあるぞ」

「あ、ホントだ。…状況が全く読めねえなこの絵。昔の王と平民みたいな関係を表してる絵なのか？」

当麻が言ったように幾人の人たちが何かを引つ張り、王冠を被った人に膝をついて頭を垂れている

「何語だこれ。…英語もわかんねーのに、こんな文字…」

と、当麻と二人唸っていると

「それは…フリギア語です」

伊澄が二人に声をかけた

「フリギア語って…、昔ゴルディオンにあったという古代王国のヤツか」

「アラタわかんのか!？」

「いや、昔聞いたことがあるだけで…。てか鷲ノ宮さん読めるのか？」

聞かれた伊澄はその絵の前に立ち書かれている文字を読み始めた

「…アブラクサスの柱の森、剣を持って、正義をしめせ。さすれば道は、開かれる…」

とても意味ありげな文章だ

だがこの言葉が何を意味するのは全くわからない

「なあ、他には何が書かれてるんだ？」

「…いえ、あとはもうあまり良い事は、書かれてありません…」

険しい表情を作った伊澄が言う

その重苦しい雰囲気担当麻は押し黙って

「そ…、そうか…」

流石に聞く事が気まづくなつた担当麻はポカンとする

その後伊澄は落ち着いた動作で窓付近に歩いていき、空を見上げた

「…結局、この絵の事は謎のままか…」

「いいじゃんか。…いろいろと謎の方が、解く楽しみが増える」

言ってアラタは窓付近の伊澄を見る

ときどき見せるオーラは彼女のものか？

そんなどうでもいい事を考えた

ところ変わってここは学園都市

総人口二百三十万人の八割が学生というこの変わった都市で、今奇
怪な事件が起きている

それは人が金にされるという事件だ

人が金にされるといふなんともオカルトじみた事件なのだが、超能力が日常と化しているこの学園都市でそのような事件があってもおかしくない

その事件を調査している一七七支部に在籍する「風紀委員」の一人、シャッジメント白井黒子は唸っていた

「…人が金にされるなんて、どこの神話ですよ…」

もう考える気力もなくなっていた

金に変えるなんて能力見た事ないし、「書庫」バンクにアクセスして検索してもヒット数はゼロ

「白井さん、何か掴めましたー？」

部屋の奥からコーヒークップを持った花飾り少女、初春飾利が歩いてきていた

黒子の隣まで歩いてきた初春は黒子の近くにカップを置く

黒子は「ありがとう」と短くお礼を言ってコーヒークップに口をつける

「それで、何かわかったんですか？」

「全くこれっぽっちもわからないですよ…」

うだー、とカップを置いて机に体を伸ばして預ける黒子

「ただで聞いたことありませんよねえ…。人を金にするチカラなんて」

溜め息混じりに同意する初春

「…こんな時、アラタさんがいてくれたらなー…」

また奥からクッキーの小皿を持った少女、佐天涙子がそんな愚痴をこぼした

「泣き言言っても仕方ありませんわ。…また洗いざらい調べてみませんと…」

「そうですね…。根気良く頑張っていきましょう！」

「そうだね。私、何か買ってくるよ！」

と気合を入れた三人の元に来客が訪れる

「おい、いるかい嬢ちゃんたち！」

ばぁん、と勢いよく扉を開け放った一人の青年

「…左さん？」

この学園都市で探偵業をやっている、左翔太郎だ

「何ですか？ そんな勢いよく…」

「巷で噂の「人が金にされる」事件は知ってるよな？」

突如そんなことを聞いてきた

「そりゃあ、知ってますわよ。…まあ全く進展がありませんけど」

現在の状況を軽く説明する黒子

そんな黒子に翔太郎は告げる

「実は、犯人がわかったんだ」

衝撃が走った

「ホントですよ！？ 左さん！」

「ああ。犯人はドーパントだ。まあ、これはなんとなく予想はできただろう？」

「当然ですわ。学園都市であんな能力は確認されてない、となるともう怪人関係しか思い当たりませんもの…」

しかしそこから調査が進まず、困っていたのだ

「俺もその線で調べてて…、さつき相手の居場所を知る事が出来たんだ」

「居場所って、どこです？」

真剣な面持ちで初春が聞く

数秒、間を開けて翔太郎が答えた

「アテネだ」

メモリの名前は「ミダス」

ある神話に登場した触れたものを金に変える力を持った化け物だ

しかしその力は完全ではなく、まだ不完全だ

だから神話を調べ、ミダスに関わりがあるアテネにメモリ所有者が逃亡したと踏んだのだ

「翔太郎、照井から預かった例のモノ、忘れてないよね」

「ああ。ガイアメモリ強化アダプターだろ？ 忘れてないさ」

一緒に行けない照井から「アラタに渡してくれ」と預かったのがガイアメモリ強化アダプターだ

これはその名の通りガイアメモリを強化し、性能を高める力を持っている

「翔太郎さん」

名前を呼ばれる

振り向くと黒子、初春、佐天の三人が旅行カバンを持って歩いてきていた

「お待たせしました」

「いや、そんなに待っていない。目的はメモリ所有者の確保だけど、せつかくの海外だ。楽しんできてくれ」

「はい！ 思いっきり楽しみます！」

「初春…、あまり羽目を外さないでくださいまし」

黒子が釘を刺すがはつきり言って不安だ

初春の後ろでは佐天が苦笑を浮かべている

「さて…、それじゃ行くか」

談笑しているとフライトの時間が近づいていた

翔太郎はフィリップと三人を促すと受付へ歩いていく

この事件を解決するため、そしてちょっぴり楽しみな海外に思いを馳せて

とある飛行機内部

男は座席に座り俯いてジッと動かない

ただ、咳く

「…待っていてください、我が、王よ…」

男は両手で持っているメモリのスイッチを押す

>MIDASU<

それは、波乱を呼ぶ火種

チャプター6 (前書き)

変身 〱 その名はスカル 〱

チャプター6

「ふー…今日は一日でいろいろあったなー…」

現在三人娘が持ってきてくれた花火を遊ぶため全員外出している

無論ハヤテもその一人だ

「お嬢さまも御坂さんたちと楽しんでらっしゃるし…。一時はどうなるかと思っただけ…」

ふう、と壁に寄りかかりながらハヤテは呟く

「おい、ハヤ太くん」

遠くから泉が小走りで駆け寄ってくる

「瀬川さん」

「ハヤ太くん、花火ももう少し持ってこようと思うんだけど、良かったらついてきてくれるかな？」

「あ、別に構いませんよ」

確かに夜も深まってきていたから、一人で行っては迷ってしまうだろう

ハヤテは快く承諾した

「それにしても皆で花火するのは楽しいですね」

「そうだね、まさにバカンスって感じだね」

夜の街を二人で歩きながらそんな何気ない会話を交える

ハヤテにとってこういうった旅行はなにしろ初めての経験だ

「けどこの旅行はホント楽しいよ。皆といっぱいお話できて」

「そうですね」

「瀬川さんは皆さんとどんな話をしたんですか？」

「ふえ？」

不意に話題を投げかけられた

「えー、あ……どんな話かって言うと……」

キスである

「えつと……その……」

顔を赤くして頭を掻く泉

何だろう、とハヤテは頭に疑問符を浮かべたとき

「あ、あのさハヤ太くん……」

「はい？」

「ハヤ太くんは…、キスしたことある？」

「…は？」

またブツ飛んだことを問いかけられた

「ええ！？ そんなの、あ、あるわけないじゃないですか！！」

「あ、そうなんだ？ ハヤ太くんモテそうだからあるのかと思ったよー」

小さい頃には何度かしたことあるのだが…

「私ね、すごくちっちゃい頃に一度だけあるんだー」

そんなハヤテの内心を知ってか知らずか泉は話し続ける

「名前も知らない子なんだけど…、かつこよくて、やさしくて…一生懸命で。きつとその子の事私は応援したかったんだと思うんだ…」

その話を聞いてハヤテは素直にその人物に感心する

「へー、よっぽどかつこよかったんですねーその人」

「んー…顔はなんとなく覚えてるんだけど…」

言っただけでじーっとハヤテの顔を覗き込んだ

どこことなく、小さい頃キスした少年に似ていたからだ

「いやいや…まさかねえ」

「は？」

「にはははは。なんでもないよ！！ 早く花火とってこようよハヤ太くん！」

「は、はあ…」

元気な泉を追ってハヤテはその後ろを行く

まだ旅行は、終わらない

所変わって海岸

三人娘が持ってきた花火で遊ぶため皆で外にでていたのだ

「ト ンザム…ラ ザー！」

ナギが叫ぶ

そのセリフは大人気ガン ムシリーズのセリフだ

…しかし実際は花火を持って振り回し叫んでるだけなのだが

「それでも、守りたい世界があるんだー！！」

しぼぽぽ、とどことなくむなしく花火の音が響き渡る

「お嬢さま…、それはいい…」

ちょうど追加の花火を持ってきた泉と一緒にハヤテが帰ってきた

「むむ！」

気づいたナギが声を挙げて花火を一時中断しこちらを向いた

「おおハヤテか。すまんすまん、ちょっとア　ウズヤプロ　イデンスと戦うのに必死になりすぎた」

わかる人にはわかる単語が並んだ

それにハヤテは汗を浮かべながら「はあ…」と苦笑する

「でもかつこよかったわよ、ナギ」

ナギの理解者、鷺ノ宮伊澄（ズラウさ付き）が笑みを浮かべて呟く

ときおりぴこぴこと揺れるズラウさ

「いや、ナギちゃんの花火芸は最高だぞハヤ太くん」

「ハヤ太くんもなにかやってくれたまえよ」

理沙と美希がなにか言ってるがハヤテは気にしない事にした

「よし！ 泉、我々も負けてられん！！」

「早速追加の花火で遊ぶんだ！！」

さらにテンションが上がる二人

彼女たちに自重という単語はないのかな…ないんだろっな、と一人ハヤテは内心呟いた

「けどお嬢さま、あまり危険な遊び方はダメですよ」

「わかっているさ。…けどこうやって、皆で遊ぶのも楽しいな」

「とうまとうま！！ すごいよこれ！ 光がぶあーって！！」

「わかったからあんまはしゃぐなインデックス…熱いつ！？ ちょよ、インデックスこっちに花火向けぎゃあアあア！？」

「…本当に楽しそうだな」

「ええ、僕が言うのもなんですけど…不幸ですね、上条さんも」

「ハヤテには勝てんがな」

「ちょよ、どういふことですかお嬢さま！？」

皆から少し離れた場所にアラタと美琴はいる

ある程度皆で花火を楽しんだ後、隙を見てこっそり抜け出してきたのだ

「なかなか刺激的な旅になったわね…、出会った人たちも個性的で楽しいし」

美琴が背を伸ばしながら言う

「確かに、メイドとかは舞夏くらいしか見てないからなー」

「舞夏はちょっと飛んでるからなあ…、マリアさんはホント非の打ち所のないパーペキなメイドさんだしねー」

あれがメイドか…、と心底関心した

「明日も楽しみ、ううん、旅行中は毎日楽しみだわ」

言って夜空の星を見る美琴

星の光に照らされた彼女の横顔は幻想的で魅力的だ

「…、」

思わずアラタはその横顔に見とれてしまった

「…ん？ どーしたの？」

怪訝に思った美琴がずい、とアラタの顔を覗き込んでくる

「っ…、い、いや別に？ なんでもない」

薄く頬を赤くしながらぷいと顔を背ける

「こら、こつち向きなさいよ。ほ…ら！」

ぐい！ と半ば強引に向けさせられた

美琴の顔が数センチまで縮まる

お互いの息が確かに感じとれる距離

「…そういえば、あれ以来してないね」

「…告白の時、一度しただけだからな…」

するとスルリと美琴が両手を首にかけて

「…じゃあ、する？」

顔を赤く染めて美琴が言ってくる

「見られたら…、どうすんのさ」

「…触れるだけなら、きっと大丈夫…」

顔が近づいてくる

本当にゆっくりと

「…強引だな、相変わらず…」

月明かりが照らす下、二つの影が重なった

「…幸せ」

小さく呟いたその一言をアラタはしっかりと頭に刻む

アラタは美琴の体を優しく、それでいてしっかりと抱き締めた

「伊達ちゃん、どうなのよ一杯」

「お、悪いねえ」

こちらはオツサン二人組

伊達明は建宮齊字が持ってきたコップを受け取り、酒を注ぐ

「ほら、建宮ちゃん。どぞどぞ」

「こりゃこり寧に。…ととととと」

半分くらいまで酒を注ぎ、伊達と顔を見合わせて軽くコップをぶつける

そして一気にコップの中身を飲み干し

「ぷはあー!」「染みるのよな…!」

オッサンにしかわからない酒の旨味が口いっぱいに広がっていく

「いやー、海外で飲む酒は一味違うよなー」

「全くよ…。五臓六腑に染み渡るたあこの事だな」

再び互いが互いのコップに酒を注ぎまた飲み干す

「つまみが欲しいねえ…」

「そう言うと思って柿ピーを用意してきたのよ」

カバンをガサガサとあさり袋詰めになされた柿ピーを取り出した

「おっと…、建宮ちゃん、気が利くじゃないの」

「それほどでもないのよなー」

オッサン二人の酒飲みはまだまだ続く

少女は一枚の写真を見ている

それは三千院家の執事の写真だ

「…、」

少女はまだその写真を眺めている

その瞳に、どこことなく悲しみを潜ませながら

「その執事を倒せば、三千院家の遺産が手に入る…か」

少女…天王洲アテネは呟いた

「けどわかんないな」

白い髪の執事…マキナが言う

「何がです、マキナ」

「確かに三千院家の遺産はいっぱいだけど。アテネも十分お金持ちだろう？ それなのにまだ三千院家の遺産が欲しいって…そんなに金がいるのか？」

「……………、ああ。そういえば遺産というのは、そういうものも含まれるんですよね…」

「へ？」

その答えは全く予想していなかった

アテネの事だ

それなりに納得のいく、それでいてわかりやすい説明をしてくれる

とマキナは思っていたのだが…

「それよりマキナ。今客人はどちらに？」

「あ？ ああ…、客室に待たせてるけど…」

「そう。行くわよマキナ」

そう言ってツカツカと歩いていくアテネ

「あ、待ってくれよアテネー」

そのアテネにトコトコとついてくマキナ

それをわかりやすく絵で例えるなら、ご主人を追いかける犬だ、もしくは猫

120

「んー…、ファーストフードも結構美味なることね…。このピクルスがなんと…」

「普段はティーやケーキくらいしか食べないからな」

おまけにそれらはすべてクロスが作っている

そんなくだらない談笑をしていると扉が開く

そこには胸元が開いた黒いドレスを着た女性とその執事が歩いてきていた

「失礼。待たせたかしら」

「気にすることなし。はんばーがーなるものも頂けたことにつき満足の事よ」

「…、」

アテネは数分の黙った後

「…指摘していいかわからないけど、貴女の喋る日本語はずいぶん個性的ね」

「な！！こ、これは土御門がふざけりて教えたる事がそもその原因で…！！」

「ローラ、それ以上言うな。アホに見えるから」

むう、と呻きながらすごすごと椅子に座り直す「最大主教」ローラ

「それで、わざわざ貴女方がこんなところに来た目的ってなに？単なる暇つぶしかしら」

「んー、確かにそれもありけるけど…。天王洲のやりし事に興味が湧きけりたからかしら？」

「…、」

ピク、とわずかに眉を動かした

その言葉だけでアテネには伝わったようで

「ふふふ…、面白いじゃない。…いいわ、帰るまでここに居ても構わない。…ただし、邪魔したら貴女も叩き潰すわよ?」

「どうぞ構わぬわ。見さしてもらおうことよ、天王洲」

一口コーラを飲みながらアテネを見るローラ

「うぐ! しゅわしゅわしゅるのよくろすー」

「知るか、お前が頼んだんだろうが」
そんな二組が交差し、夜がふけてゆく…

「うわー…これがヌーディストビーチですかー!!」

翌日

ハヤテたちとアラタたちはナギらの案内でヌーディストビーチに来ていた

「けどヌーディストと言いながらヌードの人はいませんね」

「まあそうだな」

いたら大変である

「けどお嬢さまは、水着に着替えて泳がれたりはしないんですか?」

とハヤテは聞くが

「だからハヤテ。人は水に浮かない」

「あ、はい…そうでしたね…」

一蹴されました

「ふふ、しかし海というものには、なんかこうテンションが上がるな」

「ね」

「さて、早速泳ぐようではないか歩くん!!」

三人娘の一人、美希が西沢の手を掴み走り出す

「わわ!? ちょっと、まだ着替えてないよ〜!?!」

どたたたー!! と海に駆けて行ってしまった

「…元気ねー…」

「だなー…」

美琴と二人、そんな感想を漏らす

「あれ、そういえば桂さんは？」

「ん？ さっきあつちの林で見たけど…」

なんだかとぼとぼしていたが

「…綾崎、何かへましたのか？」

彼は何かと不幸です、とはマリアさん情報

流石に失礼と思いながらも直にハヤテに聞いてみたのだ

「そんなことないですよ。…。……………」

めっちゃくちゃありそうだ

「…あるのか綾崎」

当麻の一言にハヤテは顎に手を当てて真剣に考え始めた

やがてハツとした表情になるや否や

「鏡祢さん、ヒナギクさんはあちらの林にいるって言ってましたよね」

「あ？ ああ、言ったけど…」

「わかりました！ 僕少しヒナギクさんのところに行ってきます！」

！」

言ってハヤテは林の中に走っていった

「…上手く解決するといいな」

「本当にな」

当麻と二人、アラタは頷くのだった

「そついや今日インデックスどした？」

「はしやぎ疲れてまだ寝てる。…多分お昼過ぎまで起きないかもな」
確かに昨日ははしやいでいた

大好きな当麻と旅行、というのだからテンションも上がったのだろう

「私も水着持ってきてくりや良かったなあ」

「な。失敗したよ」

とりあえず皆で砂浜に出てみることにしました

しばらく経ってハヤテがとぼとぼ歩いてきた

「あ、戻ってきた」

「どうだったさ綾崎」

二人の問いかけにハヤテは浮かない顔をしながら

「…それが、その、なんて言うか…」

言いづらそうにハヤテは喋り始める

ヒナギクを見つけるまでは良かった

だがなんて声をかけよう…

そういえば最近の彼女はなんだかハヤテに何かを言いたげな…

(そうか!! …ヒナギクさんは、何か僕に告白したいことがあるのかも…!?)

空回りする借金執事

「どうしたの? ハヤテくん」

「…いえ、上手く言えないんですけど…ヒナギクさんは、ヒナギクさんは…」

拳をギュッと握り締めてハヤテは告げる

「…僕に、告白したいことがあるんじゃないんですか?」

「…は？」

最近なんでこうブツ飛んだことを聞いてくる人が多いのか

「こゝ告白したいこと？」

ヒナギクが顔を赤くしながら聞き返すがハヤテは

「そうです！！何か僕に、言いたいことがあるんですよー！！」

真顔で（しかも真剣に）聞くハヤテ

（ええええー！？ な、なにこれ！？なんでこんなことになってるのー！？）

テンパるのも当然だ

（えー！？まさか私の気持ちバレてる？けどならなんでこう変な聞き方！？バレてるなら自分から言ってくれたって…！！）

「ヒナギクさんー！！」

「はー！！はいー！！？」

混乱しているヒナギクの気も知らず、真剣な表情でハヤテはヒナギクを問い詰める

「言ってください!! 言ってくれないとわからないこともあるじゃないですか!!」

「ああ、けどそんな…」

「ヒナギクさん!!」

「そんなこと言われたって…言えるわけないでしょバカアああアアアアア!!」

叫びながら脱兎のごとく駆け抜けてしまった

「あ…。…ヒナギクさん…」

取り残されたハヤテはただ彼女の名前を呟くことしか出来なかった

「というやりとりがありました…、また何かヒナギクさんを怒らせるような事したんじゃないかと不安で…」

そう話すハヤテを見ながら若干冷や汗をかきつつ当麻とアラタは小さい声で会話する

「(な、なあアラタ。綾崎って、もしかして超鈍感なんじゃないか?)」

お前が言っな、という言葉をなんとか飲み込み言葉を返す

「(ああ。しかもハンパなく重度のな…)」

「…はあ…」

テンションの下がり具合が半端ではない

何か話題はないものか、と頭を回転させていると

「あ、そうだ綾崎。渡してくれって頼まれた奴があんだけど」

「？ はい、なんででしょう」

アラタはポケットから一枚の手紙を取り出し、それをハヤテに渡す

「手紙？ …帝おじいさまから…？ 鏡祢さん、この手紙を誰に…」

その質問には当麻が答えた

「んー…、たしか愛歌って人だよな」

「ああ、長くて綺麗な髪が印象に残ってるかな。…じゃあ綾崎、確かに渡したぜ」

軽く肩を叩いてアラタと当麻は戻っていった

と、入れ違いでナギが歩いてくる

後ろにはマリアも控えている

「どうしたハヤテ」

「いえ…三千院帝おじいさまから手紙をもらって」

直後ナギは目をパチクリさせて

「三千院帝？ いったい誰なのだそれは」

「いやいやお嬢さま…。読者の皆様がそう思ってるからって…。まあとりあえず、読んでみましょう」

ハヤテは手紙の封を開けて中身を取り出すとそれを読み始める

「ごめんなさい帝くん、遅くなっちゃって」

赤坂ブ ツツ

ライブが終わって小一時間

まだ火照った顔のめぐたんが裏口からかけてきた

「いや、全然待ってないよ」

そう答えたものの、待っている時間はまるで一生のように感じるほど長かった

「でも今からの時間はお客さんの天使じゃなくて、帝くんだけの天使になりたい」

「ああ、そうだね。僕が君のオンリーワンさ」

そう、今から二人だけのライブが始まるのだ

「捨ててしまえー!!」

「ダメですよお嬢さま!! ダメですって!!」

「なんなのだあのジジイ!! なに考えてこんな自分主演のドリム小説を人に送りつけてきているのだ!!」

「わかりませんよ! けどほら!! まだ続きますよ!?!」

マリアが手紙を受け取ってその手紙の続きを声に出して読み上げる

「えーと…。『遺産相続の条件がわかりにくいと苦情が寄せられました。なのでここで、もう少しわかりやすくするために、皆様に新しい条件をお伝えしようと思います。遺産相続の条件は、三千院ナギの執事、綾崎ハヤテを倒し彼の持つ「王玉」という石を奪うか破壊すること』」

王玉という単語が耳に入った時ハヤテはハツとした

「『その石は三千院家の遺産を継ぐために必要なものなので、無くせばゲームオーバーです。どうぞよろしく』…ですって」

「…「王玉」って、これのことですよね」

ハヤテが首からかけてある王玉を二人に見せる

何気なくハヤテが見せたその王玉に二人は一瞬息を潜ませた

「え…なんでハヤテがその石を?」

「ああ、これは」

その時だ

「クツクツク！！ その石を破壊すれば、遺産は私のものとなる！」

「っ！？」

突如として現れたその男

「この私！！ ギルバートのものにー！！」

また波乱の予感である

海

それは青く広く、そして口に含むとしょっぱいやつである

「そらー！」

ばしゃあ！ と飛沫が海音に向かって飛んできた

「わぷ！ 千桜さん止めてくださいよー！」

海に入るといふ事を完全に失念していた二人は水着を持ってきていなかったのだ

だが着替えはあった

結果

私服のままズボンの裾をまくり上げ、そのまま海に入るといふ強行に出たのだ

「私だつてびしょびしょだ、だからお互い様だよっ」

ばしゃあ、とまた喰らう海音

「あばっ、むー…僕だつて！ でやあ！」

裸足の足を蹴り上げて飛沫を飛ばす

「うわ！ ま、まさか足を使ってくるとは！」

ワイワイキャピキャピする二人

…なんだろうこのバカップル

普段の千桜ならば絶対にこんな姿は見せないだろう

だが相手が海音で、おまけに二人きりという条件が揃うと枷が外れ、純粹に楽しんでしまう

「てやつ！…と、わわわ！？」

と水をかけようとした時千桜の足が波に取られて転びそうになった

「危ないっ！」

バツと海音が背を支える、が逆に二人の足がもつれて千桜が海音を押し倒す形になってしまった

無論海音は千桜が濡れないように自分からびしょ濡れになる構図を自ら取ったのだが

その反動でお互いの顔の鼻と鼻がスレスレの距離まで近づいた時はどれだけビツクリしたか

「…えと、…その…」

「…かい…、とくん…」

互いの顔は茹でたタコのように真っ赤になってお互いの顔を見つめる

何も言えないのは何も考えられないから

否、全く考えがまとまらないのだ

何を言えばいいのか、どう気の効いたセリフを言えばいいかがわからない

「…じー」

三人娘が面白そうな顔して、瀬川が赤い顔してこちらを見ているのに気づくまでは

「…、」

海音と千桜の行動は早かった

びゅんっと離れて砂浜に座する二人

「ちーちゃんだったん…」

「ち、違っ！ あれは…、そう、波に足がとられて…！！」

「そ、そうですよ！ 決してやらしいとかそんな意味あいはなくって…！！」

二人の弁解は続く

ドカア！！

ビーチにそんな鈍い音が響き渡った

その数秒後ギルバートが砂浜にうつぶせでピクピク痙攣しながら倒れておりました

「それでお嬢さま、バイオらはクリアなさったんですか？」

「いやー結構ラストだと思っただけどさー」

流石にこれはみつともない

そう思ったギルバートが食い下がる

「ま、待ちなサーイ!!」

律儀に止まるお三方

「はあ…、それで。アナタ誰でしたっけ？」

やれやれといった様子を隠すまでもなくハヤテは聞いた

「クツクツク!! 我こそは三千院家の遺産を狙うラッキークロー
バーズの一人、ギルバートです!! 貴様の持つ石を破壊し三千
院家の

ドカア!!

本日二度目の鈍い音

「だけど最近の洋ゲーはすごいですよねー」

「まあ日本のゲームとは開発費がケタ違いだからなー…」

ここまで殴れば諦めるだろうと三人は思っていたのだ

だが

「ふ、ふふふ…。そうですか、わかってはいたんですよ。…だが今

回のギルバートは違アアう！」

やかましく叫ぶギルバートをうつとつしく思ったナギは振り向いて
「うるさいぞお前！ ハヤテにあれだけボコボコにされてまだ懲り
ないか！！」

「A〜H A〜…、確かに今までなら大人しく逃げ帰っていた…、だ
が今回は…。その憎きボケ執事をボコボコにする秘策があるので
す！！」

「…なんです？ その秘策って」

その質問を聞かれたギルバートは待つてましたと言わんばかりにポ
ケットから何かを取り出して見せつける

「これでーす！！」

どう見てもUSBメモリだ

一般と違うことはその表面に「U」というアルファベットが描かれ
ているだけだ

「なんだそのメモリは。私とゲームで戦おうというのか」

無論私が勝つに決まってるがな、とナギは自信満々に付け足す

「これは…、こう使うのでーす！！」

ギルバートがメモリについていたスイッチを押し、そのメモリを起

動させる

「UTOPIA」

「む？」

「…なんでしょう」

ハヤテは警戒し、ナギとマリアの前に立つ

何だろう、相手のあの自信には何かある…

「そいつ！」

言葉と共に掌にメモリを差し込んだ

直後信じられない事が起こった

ギルバートの姿が変わっていくのだ

左右非対称の金色のドーパント

「ユートピア」

「>はーははは！！ 怖じ気づきましたか！？ 過去に大敗した恨み、今ここで晴らさせていただきまーす！！<」

その怪人を見たナギは

「な、なんだあれは！？ 特撮とかでよく出てくるような…」

「離れてください!!　マリアさん!　お嬢さま!」

ハヤテが臨戦態勢を取りながらマリアに促す

「は、はい!　ナギ!」

マリアがナギの手を引いて離れていく

「>ふん!　今用があるのはお前でーす!　覚悟しなサーイ!<」

ユートピアが手に持ってロッドを構えてハヤテに接近する

「ふ…、はああ!」

勢いをつけた渾身の回し蹴り

人間のギルバートならこの一撃でとっくに倒されていただろう

人間体なら

「>A～HA～…、そんなもんですか?<」

全く効いていなかった

「な…!?!」

一気にハヤテの顔色が青ざめていく

「>本場のキックを見せてあげまーす!<」

シンプルな回し蹴りを腹部に喰らう

ギルバートとは全く違う、重い一撃

鈍器で殴られるよりはるかに強力だった

あまりの威力にハヤテは危機感を感じ直撃する瞬間後ろへ飛び軽減しようとしたが、風圧で後方に飛ばされてしまった

ハヤテたちから少し離れた所

「ふふふ…。皇くんもすみに置けないなあ」

「だ、だから…その…」

「ちーちゃんもスツゴいかわかったよー」

「だ、だから！」

そんな会話を交わす中に

バツシャアン！！ とハヤテが吹っ飛んできた事には驚いた

「うわあ！？ ハヤ太くん！？」

「せ、…瀬川さんたち…、逃げて…！！」

「え…？」

ハヤテの視線の先を見る

そこに金色の異形の化け物がいたのだ

「な！ なにあれ！？」

「んー…、特撮の着ぐるみとかかな」

「いや、きつと特殊メイクだな」

呑気にそんな推測を始める理沙と美希を尻目に

「海音くん、あれって…！？」

「いや、イメージとは違う…！？ なんだあれは…！？」

身構える海音は電王ベルトを取り出そうとし

(！？ しまった！！ ベルトは部屋だ！！)

痛恨のミスを犯してしまった

「ハヤテー！！！！」

聞き慣れた声が聞こえた

見ると先ほどマリアと一緒に逃げたナギが走ってきていたのだ

「お嬢さま！？ なぜ来たんです！！！！」

「執事が危ない目にあっているのに、呑気に逃げてなどおれん！」

ナギは勇敢にハヤテを守るように立ち、バツと両手を広げる

「…え、これってマジなのか？」

「…そ、そのようだ…」

状況を完全に把握した美希と理沙もただ呆然と立ち尽くすばかりだ

「これ以上！！ ハヤテには指一本触れさせん！！」

「>ふ…、美しき主従愛というヤツですか。泣けてきますねー。なら一緒に、始末してやりまーす！<」

ロツドを振り上げる

その光景を遅れて離れた場所に到着したマリアが目撃する

瞬間、青ざめた

「ナギ！？ ハヤテくん！？」

悲鳴がビーチに響き渡る

「>死になさーい！！<」

誰もが目をつむりかけたその時

「でえりゃあああああ!!」

突如として現れた白い人影がユートピアを蹴り飛ばした

「>ぐあ!?!<」

突然の出来事に危機感を覚えたユートピアは後方にステップし距離を取る

その白い人影とは

「か、がみね、さん…?」

「>貴様…何者です!?!<」

「私の友達が、世話になったわね」

「ひ、ヒナギク!?!」

アラタとは別にヒナギクも騒ぎを聞きつけ駆けつけてくれたのだ

「桂さん、皆を離れさせてください。多少離れば大丈夫なはずですよ」

「わかったわ。皆、急いで!」

ヒナギクがハヤテやナギたちに避難を促す

ダメージを負っているハヤテはヒナギクが肩を貸して移動させた

「…、さて…覚悟はいいかな、お前」

「>それはこちらの台詞です！！ 貴様こそ、覚悟はできてますかー！？<」

あくまで余裕を崩さずユートピアはアラタを睨む

「>そもそも貴様はなんですかー！！ あともう少しだったものを！ー！<」

その問いにアラタは口元に笑みを浮かべて

「ほら、ヒーロー物には付き物だろ。悪をやっつける正義の味方ってやつが」

言いながらアラタは腰にロストドライバーを巻きつけた

そしてスーツの内ポケットから右手でスカルメモリを取り出し

「>！？ 私と同じ…！？<」

「一緒にするな。…行くぜ」

スイッチを押してスカルメモリを起動させ左手で帽子を外す

>SKULL<

そして

「変身」

ロストドライバーにセットし、一気に開く

風が吹き荒れる

砂浜さえ巻き込みかねない強風が

離れた場所であったヒナギクたちでさえその風の強さに手で顔を庇ったほどだ

そして再びその場を見ると

「ナギ…、なに、あれ？」

「…あ、れは…!?!?」

驚愕

その単語しか頭に浮かばない

先ほどまでアラタがいたその場所に

白いマフラーをたなびかせ

黒いボディを基調とし、頭にはSのアルファベットが刻まれている

その者こそ

「さあ」

左手に持った白い帽子を再び頭にかぶり直し、右手をユートピアに突きつける

そして軽く右手を回して

「…お前の罪を数えろ」

仮面ライダースカルが堂々と君臨する

チャプター6 (後書き)

お気づきの方もいるかと思いますが、いくつかのイベントはカット
しています

あしからず…

チャプター7（前書き）

廻る歯車

カット部分が多いです
ご了承ください

チャプター7

「はああああ!!」

スカルは一気にユートピアに接近しその顔面に蹴りを放つ

「>あばああああ!?!<」

盛大に吹っ飛んで転がっていく

そこでスカルは一つ疑問が浮かび上がった

(∴手応えがない∴?)

以前左翔太郎からユートピアドーパントの話聞いた事がある

簡単にまとめると手にしたロッドで、天変地異を巻き起こし、相手の希望を吸い取り自身の力にする、という話だ

(∴なのにその力を使ってこない。∴あれは、見かけだけのレプリカか? ∴どっちにしろ、倒す事に変わりはない!)

スカルはドライバー左側のホルスターからスカルマグナムを取り出してユートピアに突きつけた

因みにドライバー左側のホルスターはアラタが自作して取りつけたものである

スカルマグナムの引き金を引く

ドドド！！ とマグナムが火を噴きユートピアの身体に直撃した

「>あだだだだ！？<」

声をあげながらそのまま膝をつくユートピア

「っし…、このまま終わりにしてやるぜ」

「>ぐ…、やります…ねー！！<」

突発的に動いたユートピアのロッドにスカルは反応出来なかった

「なに！？ ぐあ！」

ガキン！ 胸部に痛みが疾る

それが致命的な隙となったスカルは立て続けにユートピアの攻撃を受けてしまう

「>A〜HA〜、先ほどまでの勢いはどうしましたー？<」

「ち…、調子に乗りやがって…！！」

完全に防戦一方になってしまったスカル

どう切り抜ける？

スカルは攻撃を耐えながら頭の中でただそれだけを考える

「ちょ、ちょっと…、あれ何かマズくない？」

泉が慌てた様子で周囲に告げた

「た、確かに…、ピンチだな…これは」

美希が冷や汗を額から流しながら戦いを見守る

そしてどこか手に汗握る戦いを少年のような気持ちで、美希は眺めていた

一方ヒナギク

「ハヤテくん、大丈夫？」

「ええ…、なんとか…」

ある程度呼吸が落ち着いたら、しかし息は荒いままだ

「本当か？ どこか痛いところはないか？ ハヤテ…」

「ありがとうございます。お嬢さま…、けど、本当に大丈夫です…」

笑顔を交えて答えるハヤテにそれ以上の追求はできなかったナギは「そうか…ならいいが」と返す

「だけど、このままじゃ…」

ヒナギクは再度戦いに目をやる

そこには金色の化け物の攻撃に耐える白帽子の戦士

「…、私が、いくしか」

呼べば正宗は来てくれる

しかしハヤテがかなわない相手に自分が戦えるのか

(うつん！ そんな問題じゃない！！ 今ここで戦わないと…、また皆が…！)

「正む」

『正宗！』と叫ぼうとした瞬間人影が隣を突き抜けた

「え、ちよつと！？ 貴方たち！？」

そこにいたのは

「悪い桂さん。後は俺たちに任せておきな」

「ええ、プロフェッショナルに任せなさい」

人影の正体は上条当麻と神那賀雫だ

「さ、始めましょうか上条先輩」

「わあってるよ、アラタを助けないと」

当麻はロストドライバー、神那賀はバーストドライバーを巻きつける

まず当麻

ズボンのポケットからアラタやギルバートと似たメモリを取りスィッチを押す

> JOKER <

そしてメモリをロストドライバーにセットし一つ深呼吸

そして

「変身！」

ドライバーを開く

> JOKER <

電子音が鳴り響き、そして軽快な音楽が耳に届く

そこに上条当麻の姿はなく、真っ黒なボディをした人物がいた

それが

「仮面ライダージョーカー」

当麻、もといジョーカーは右拳を握り締める

次は神那賀

神那賀はスカートから変身するためのセルメダルを取り出して右手でメダルを弾いて左手でキャッチする

「変身」

バースドライブ前面左側のメダル挿入口にメダルを入れてカプセルレバーを一気に回す

直後神那賀の身体を、リセクタプルオーブが包み込み、神那賀の姿を変えていく

「仮面ライダーバース」

神那賀ことバースはスカルマグナムと同型のバースマグナムを取り出してユートピアを狙い撃った

「>これで…、あばばば!?!<」

突如として別方向からの援護攻撃

「! 今だ!」

スカルはすかさず腹部に蹴りを入れ距離を取る

「はあああああ!?!」

スカルが離れたタイミングを見計らってジョーカーが全力で右拳で殴りつける

「>ぐううう!?!<」

ゴロゴロと砂浜を転がるユートピア

「>ちっ…また邪魔が入りましたネー…、ここは戦略的撤退です
!?!<」

ユートピアは背中を向けながら一気に逃亡した

「ああ!?! あの野郎逃げやがった!?!」

ジョーカーが怒りを露わにして叫ぶ

「安心しろ。…美琴がいる」

ユートピアの目の前に短髪の女の子が立っている

「>そこをどきなサーイ! さもないと、痛い目を見ることに
<」

「痛い目見るのは…」

バチ!! と女の子の周辺から雷が迸った

「>な、なんですかこれは!?!<」

「お前だあああああ！！！」

女の子の掌から雷が繰り出されユートピアを縛り付けた

雷だ、めちゃくちやバチバチ鳴っている上、身体がとてつもなく痺れる

「>ぐ、おおお！?<」

「アラタあああああ！！！」

名前を叫びながら三人がいる方向にユートピアを投げつける

「決めるぞ、二人共」

「ああ」

「任せなさい」

バースはメダル挿入口に一枚メダルを入れてカプセルレバーを回す

>クレーンアーム<

>ドリルアーム<

神那賀バースが良く使う組み合わせだ

「せりゃあああああ！！！」

クレンドリルアームを伸ばし宙を舞うユートピアに当てていく
四回ほど攻撃を当て、五回目はドリルアームを解除し、クレーン単
体にして巻き付けて

「上条先輩!!」

「よし来た!!」

ジョーカーは一気に駆ける

走りながらジョーカーメモリを抜き取り、右側のマキシマムスロッ
トに差し込んで軽くポンと叩く

> J O K E R M A X I M A M D R I V E <

右手に紫色のオーラが浮き出て力が溜まっていく

「そりゃああああ!!」

バースがジョーカーのところにユートピアを落とす

ジョーカーはタイミングを計って

「はああああああ!!」

ライダーアッパーカットをブチ当てる

「アラタ!!」

「おっちゃん」

答えるや否やスカルは跳躍する

跳躍しながらジョーカーと同じようにメモリをマキシマムスロットにセットしてポンと叩く

>SKULL MAXIMUM DRIVE<

そして離れたところにいる美琴に目をやる

頷くのが見えた

二人の間に見えない絆が引かれた瞬間

「ライダーキック……」

身体から溢れ出す紫色の波動を、蹴って撃ち出す

アラタからサインがあった

美琴はポケットからゲームセンターで良く使われるコインを取り出した

美琴の周りからまた雷が迸る

「見せてあげるわ……、超電磁砲を」

美琴は右手に乗せたコインを親指で弾く

コインがくるくると回り上がっていく

「くらええええええ！！」

周囲全体に雷が轟く

地力を操って、コインを撃ち出した

三倍の速度で放つ「レールガン超電磁砲」を

紫色の波動と超電磁砲

二方向から迫り来るその合体攻撃は

ユートピアに直撃した

「>のわあああああああ！！<

空中で激しく爆発するドーパント

少し待つとべちゃ、と砂浜にギルバートが落ちてきた

その近くに碎かれたユートピアメモリが落ちていた

スカルは着地した後ギルバートに歩み寄ってギルバートの胸ぐらを

掴みあげる

「おい、このメモリをどこで手に入れた」

「わ、わかりませーん…、朝起きたらこのメモリが…」

(…起きたら？ 自然にあっただってのか？)

いろいろと思うところはあるが

「まあとりあえず…、今後綾崎らに手え出すもんなら、ツブすぜ？」

もはや軽い脅しである

「で、ですが…」

「ん？ 聞こえないな」

余談だがスカルマグナムを顎に突きつけています

「わかったな」

「…わ、わかりました…」

ギルバートがガタガタ震えていたのは言うまでもない

「綾崎、大丈夫か」

変身を解除し三人は皆のところへ駆け寄る

「はい…、ありがとうございます…」

だいぶハヤテも回復したようだ

「そうか。なら良かった…」

「な、なあ」

ハヤテの無事を確認したとき不意に美希がアラタに声をかけた

「ん？ なに？」

「さ、サインくれないか」

軽く頬を赤くしながら言われました

「え？ いい、けど…」

その後色紙を渡されたアラタは三人娘の分のサインを書いてあげました

「さっきは本当にありがとうございます」

改めてハヤテから礼を言われる

「気にするな。礼を言われるようなことはしていないさ」

柔らかな微笑みを浮かべて返す

「そんな。鏡祢さんのおかげでお嬢さまの遺産を守ることができました」

遺産？

気になる単語を聞いたが色々と深そうなので、聞くのは止めておいた

「そついや、桂さんとは話したのか？」

「あ、はい…。その、結論から言つと、ヒナギクさんを食事にお連れすることになりました」

「話が全く見えねえよ」

突発的すぎて何にも情報が掴めませんでした

「いえ、日頃を込めてですね…」

まあなんとなくわかった

わからないけど

「まあだいたいわかった。つまり綾崎は、常日頃お世話になってるから、そのお礼を込めて食事にお連れしようって事だよな」

「はい、掻い摘んで言つと」

ハヤテは苦笑いする

…なんなんだこの会話は

「僕…、ヒナギクさんには毎日迷惑ばかりかけていて…、すごい嫌われてるかもしれないけど…、せめてお食事のときだけは喜んでいただくと思うんです」

空を見上げながらハヤテは呟いた

「…、」

その発言を聞いたアラタは

(何なんだこの超鈍感男はアアアアア！！)

心の中で大絶叫

(なんでだよなんでこんな純粹で純朴で人畜無害そつな人間がなんでこんな勘違いしてるの！？ むしろなんで気付かないのよ！！)

思わずオネエになってしまっうほどに心中は大混乱するアラタ

(端から見てもわかるじゃない！！ 会ったばかりの俺が言つのもなんだけどモツテモテじゃないモツテモテ！！ 不運すぎるわ悲しすぎるわ世知辛すぎ切なすぎイイイ！！)

「鏡祢さん？」

「はい！？ 何かしら!？」

「かしら！？ 鏡祿さん何かおかしいですよ、なんで急にオネエになってるんですか！！」

「お。…おう、悪い、取り乱した」

一通り落ち着いたアラタ

「まあ俺は何とも言えないけど…、頑張れよ」

「はい！ ありがとうございます！」

そう言っつてハヤテを応援し、アラタは一度宿へと戻っていった

「うー…、飲みすぎた…」

「気持ち悪いのよな…」

宿に帰ると伊達さんと建宮さんがグロッキーになっておられました

「あ、アラタさん。お帰りなさい」

紅司さんと咲良ちゃんが出迎える

「ああ、ただいま。…何やってんの？」

「いえ…、あの…。二人とも飲みすぎてしまいました…」

ハメを外しすぎたのか

アラタは苦笑を浮かべて伊達さんと建宮さんを見る

…こっちはなるまい

アラタは心の中でそう誓った

とりあえず自分たちの部屋に戻り、荷作りをする

遅れて当麻や美琴、神那賀も戻ってきて、同じように荷を作る

「明日からどこ行くんだっけ？」

「んつと…、アテネってところらしいよ、わかっているのは地名くらいで…」

神那賀、美琴のガールズトーク

それを耳に入れながらアラタと当麻もトークを交わす

「いやー…、一時はどうなるかと思ったけど、無事に過ごせて良かったなー…」

「全くだ…。やっぱり海外旅行ってのはこうあるべきなんだよ…」

一通り荷を作り終えた四人は荷物を部屋に隅にやる

「ねーねー、そっちはなんか見つけたー？」

「トークしましょうよトーク」

夜がある程度明けるときまでは、四人はガッツリトークをしてました…

…歯車が、まわる。また一つ、音を立てて

「…鷺ノ宮家のご令嬢と出会うとは。…何とも偶然とは思えませんね」

神袿火織

「…?」

鷺ノ宮伊澄

なぜこの二人が会合したかと言うと少々長くなるかもしれない

簡単に言うとステイル、齊堵、神袿の三人でウォーキングしているとタバコが切れた、とステイルが行った

しかしステイルは未成年なので一人ではタバコは買えないから、齊堵について行ってもらっている

二人を待つ間何をするでもなく、ただ立って待っていたのだが

ふと自分の前を蝶々を追っかけていた鷺ノ宮伊澄と遭遇したのだった

「貴女は…?」

「失礼。申し遅れました、伊澄嬢。私は神袈火織と申します」

「神袈さん、ですか…。とつてもカツコイい名前ですね」

「そ、そうですね。ありがとうございます」

そんな偶然で、二人は出会った

「で、なんなんだ。あの子は」

齊堵と二人前を歩く伊澄を見ながらスタイルは神袈に聞いた

「知りませんか? 僅か齡十三歳のゴーストスイーパーの話を」

「ゴーストスイーパー?」

「天草式でたまにその話題が挙がるんですが、なかなかの腕らしいですよ」

そのまま話を続けてく

「なんでも鷺ノ宮家の女性に代々伝わる秘術、「術式・八葉」を受け継いだ光の巫女です。…ただ、恐ろしいほど迷子になる確率が高くて、ふと目を離すと北海道にいるという噂も…」

「…彼女はマジックの天才なのか。テレポート能力なのか？「術式・八葉」とは」

「…それはないと思いますけど…」

しかし断言もできない

神袈は苦笑いを浮かべるしかなかった

「しかし実力は相当のものだと思いますよ。あの年齢で、あれほどの力を継承しているのですから…」

齊堵と世間話をしている伊澄を見て

どことなくインデックスを思い浮かべてしまった

「…やれやれだな。全く」

「ええ。…あんな女の子が、陰で戦っているのは…、胸が痛んできますね…」

一足はやくアテネ市

ここに一組の男女が練り歩いている

「アंकちゃんアंकちゃん、ここもキレイだよー」

「姉貴…、お願いだからハシヤくな。…無理だな」

男の名は、アंक

金髪で軽く前髪を跳ねており、白を基調とし、右手側は若干赤が入ったジャケットを着用、ズボンはシンプルでどこにでもある布のズボンを着た一見不良のような姿だ

一方姉貴と呼ばれた女性も名をアंकという

下着に白いワンピースを一枚着たその姿は見るものを全て魅力する美しさを兼ね備えている

おまけにスタイルも抜群だ

「たまには海外もいいよねえー」

「いや、俺たちが住んでる場所は海外なんだが…」

「とにかく色々見て回ろうアंकちゃん!! それ行けー!」

どたたたた!! とアंकレディは走って行ってしまった

「…手間のかかる姉貴だ。…む?」

視線を感じた

姉であるアンクレディはすぐ見つかるだろうから放置、その視線の元を探しにかかる

「…、」

後ろの建物の曲がり角

確実にそこにいる

「…、」

ニイ、と口元に笑みを浮かべゆっくりと近づいていきそして

「なにコソコソしてやがる!！」

バツ、と曲がり角を曲がって怒鳴り散らした

「!！」

見ていたのは男だ

無精ひげを生やし、薄汚れたトレンチコートを着ている

「なんで俺たちを見てたのか、訳を聞かせて貰おうか」

右手を赤い籠手へと変化させゆっくりと歩み寄っていく

「…く!！」

> MIDASU <

男は手に持っていたメモリを作動させて手の甲に差し込んだ

「なに!？」

男は姿を変えていく

顔は骸骨、首から下は昔の貴族のような服を着た、しかし手や足など見えているところは全て骨だ

「ち…、面倒なヤツだ」

アंकは愚痴りながらも腰にオーズドライバーレプリカを腰に巻きつけた

レプリカと言えどアंकが改良を施してあるので性能は本物と大差はない

すでに三枚、メダルは入っている

アंकはだるそうに右手でオースキャナーを持つと

「変身…」

一気にスキャン

> TAKA! KUJAKU! CONDOR! <

> T A a a a J A a a a D O R U u u u ! ! ! <

オーケストラのコーラスのような声が響きわたった

紅蓮の炎が辺りを包み込み、その灼熱の中から

「そおらあああああー!!」

アंकタジャドルが現れ、謎のドーパントに殴りつけた

これがアंकの変身体

アंकタジャドルだ

見た目ははつきり言ってタジャドルコンボと大差はない

しかし右腕がアंकのものとなってることが最大の相違点だろう

「一気に叩き潰してやる…!!」

アंकタジャドルは一気に走り寄って謎のドーパントの腹部を蹴りつけた

のけぞる相手に対し、追い討ちとして両手を組んでハンマーパンチを与えダウンを奪う

「なんだ、こんなもんか？」

頭を掴み上げ、そのまま右腕で殴り、吹き飛ばす

「さあファイナーレだ…!!」

アंकタジャドルは左手にあるタジャスピナーを展開し、そこにセルメダルを三枚セットして閉じる

そしてオースキャナーでスキャン

>GIN! GIN! GIN!<

>GIGASCAN!<

「そおらああああ!!」

左手から銀色のエネルギー弾を炎を交えて撃ち出した

「!!」

謎のドーパントはバツ!! と両手を突き出し

ドオオン!! と直撃した

「…はん、案外呆気ないな」

変身を解除したアंकは爆発した場所に歩いて壊れたメモリを探してみた

現物を見るのは初めてだが倒されたメモリは人間から摘出され、砕けるという知識はあった

だから砕けたメモリを捜したのだが…

「…ないな」

数分地面を見続け捜したが欠片すら見つからない

と、足に何かがぶつかった

目をやると何か金色の物体が転がっている

「…金？」

手に取って吟味する

手触り、重さ、輝かしさ

どれを取っても確実に金だ

「バカな、この周辺に金なんて…、ん？」

その金の形に違和感を感じた

この形は…

「…アイツ、俺が撃った弾を金にしやがったのか!？」

しかし爆発までは金には出来なかったようで、その隙に逃げたようだ

「…ち…!! 厄介な力だ…!!」

アंकは憎々しげに舌を打ちながら姉を搜索しに歩き出した

また歯車が回る。一つ一つ、確実に、しっかりと

チャプター 8 (前書き)

神の名を持つ運命の島

チャプター 8

「海音くんもうすっかりミスはするんだね」

苦笑いしながら千桜に告げられる

「…すみません、浮かれてました」

完璧に失態だった

千桜とのこの旅行が純粹に楽しくて完全にうつつを抜かしていた

「…気を落とさないでくれ海音くん、その、私じゃ何とも言えないけれど…」

「はい…、大丈夫です」

キリッ、と気を取り直して

「ところで、あのライダーはなんなんだろうね…」

千桜が呟いた

「うん。僕も見たことないです…、あんなライダー…」

海音は全く見覚えのない仮面ライダーに動揺を隠せない

「…だけど、今回はあの人たちがいてくれたから助かったけれど…
またあんなミスしたら…」

「こら、またマイナスに考えないの」
ポカリ、と頭を叩かれる

「あう。…なにするんですか千桜さん…」

「すぐマイナスな方向に考えるから。…旅行はまだあるんだからね」
そう言っ**て**ぶくー、と頬を膨らます千桜

その様子が可愛くて思わず笑ってしまった

「ちょ！なんで笑うの！」

「ごめんなさい…、その、可愛くて…」

「にゃ!?!」

不意打ち気味に、というか完全に不意打ちだ

「か、かかかか可愛い…、て…へへ…」

一人自分の世界に浸る千桜を微笑んで見守りながら海音は荷を作り始める

「…しばらくは帰ってこないかも。あ、デンライナーも用意しないと…」

今日も賑やか(?)なお二人だった

ヒナギクは船の上で思い出す

先ほどの砂浜での事だ

ハヤテの傷も癒えてアラタが三人娘にサインをせがまれてる中ハヤテがふと呟いた

「そういえばヒナギクさん、さっきの件なんです…」

「さっきのって……あ……」

思い出した

自分は数分前この人になんか凄まじい話をしたではないか

具体的には告白がどうか

「そー！！ それはダメエエー！！」

言うや否やヒナギクは脱兎はおるか加速装置を発動した島 ジョー並のスピードで逃げ出してしまった

「ヒナギクさんっ！！」

また出遅れてしまった

どうしようか、と唸っていると

「追いかけてこい」

ナギの許可が降りた

「ヒナギクにはいつも助けられているしな。こういつ時にお礼してやらないと」

「…はい！ わかりました！！」

(…：そういえば、まだ何も解決してなかったわね…)
とぼとぼと歩く

どうしたものかと悩んでいると

「ヒナギクさん！」

ハヤテが追いついてきていた

「は、ハヤテくん…」

「はは。そんなに逃げないでくださいよ」

彼がそばにいただけで体温が上昇する

頬が熱くなってしまう

「それで…さっきの件なんです…」

「待って!!!」

顔が更に赤くなる

確かにハヤテに告白させるとは言ったが…

「私、自分から言っなんて事…!!」

「わかってますよ…。だから前々から思っていた事を、僕に言わせてください!」

「ええ!?!」

そんな…まさか…

「ヒナギクさんは、もっと羞恥心を持つべきです!」

予想の百八十度違った告白でした

「…は?」

「初めて会った時のスパッツの件とか。いくらなんでもヒナギクさんは無防備すぎます、ですからもっと女の子としての自覚を…」

「ねっ」なんて言葉を言いながら肩を叩かれる

イライライライライライライライライライ

ぷちっ

とりあえずハヤテをとっちめてやりました

「それ、で。なんでわざわざこんな所でハヤテくんの説教聞かなきゃいけないわけ？」

「い、いえ、別に説教だなんて……」

「全く……余計なお世話よ……」

なんだか期待してしまつて損した

「まあ確かに余計なお世話なのかもしれないけど……ヒナギクさん、自覚ないから心配なんですよ……」

自覚？

「自覚ないって、なんの自覚よ」

「ですから、その……、自分が

「可愛い女の子」
だっていう自覚が……」

「……………。え？」

可愛い…女の子

「ヒナギクさんにとっては可愛くて魅力的なんですよ。なのにそんなに無防備なのは、やっぱり周りの男の子はよくないっていうか…、
て聞いてます？」

「へ！？ な！ 何よ！！ それこそ余計なお世話よ！！」

「す、すみません……」

（ダメだ…また怒らせてしまった…。ちゃんとお礼しないとイケないのに…困った…）

とハヤテが肩を落としている時ヒナギクは

（ど、どうしよう…！！？ う、嬉しくて、顔元に戻らない…！！）

ニヤける顔を抑えるのに必死だった

そりゃあそつだろう

好きな人に『可愛い』と言われて嬉しくない人がいないわけがない

（だ、ダメよヒナギク！ こんなニヤけた顔ハヤテくんに見られた

ら、それこそ恥ずかしくて死んでしまう…、だけど嬉しくて顔が…)
口元を押さえてふるふる震えるヒナギク

(うう、何だろう…この長い沈黙は…。これは相当怒ってらっしゃ
るのか…?)

しかし、お礼はしなくてはいけない

ハヤテは意を決して声をかける

「あの、ヒナギクさん？」

(と！ とにかくここは、頑張つて表情を作らないと…！)

と、頑張つて表情を作った結果

「あ？」

めちやくちゃ険しい顔になってしまった

「！…！」

これはかなり怒ってる！？

そう感じたハヤテは即座に謝罪

「すみませんすみません！！ まさかそんなに怒っていたなんて！
！」

「べ、別に怒ってないわよ!！」

「け、けどだったらなんでそんな険しい顔を…!！」

「そ、それは…!！」
ぎゅるるるる…

何とも間の悪いタイミングでヒナギクのお腹が鳴った

『…』

長い沈黙

やがてハヤテが言った

「…あ、お腹が空いているからそんなに怒っているんですか？」

「!！」

凡ミスする執事（鈍感）

「私は小学生かバカー!！」

絶叫しながら、しかも恥ずかしさもあいまってまた高速でヒナギクが逃げ出した

（く…いつも肝心な所で逃げられてばかり…!! だけど、今度こそ…!!）

「待ってください、ヒナギクさん!！」

ハヤテは駆け出した

桂ヒナギクは全力でその森林を駆け抜けた

理由は一つ、好きな人にお腹の音を聞かれたからだ

(こんなんじゃないかもうカツコ悪くて…ハヤテくんに合わせてる顔が…!!)

「ヒナギクさん!!」

執事は早かった

ヒナギクの思考の際に差を詰めてきたのだ

「なあ!? なんで追いかけてくるのよ!」

「ヒナギクさんが逃げるから!」

「子犬かー!」

そんな問答を繰り返すがスピードは全く変わらない

だが顔をハヤテの方向に向けながら走っていたために前方を見ていなかった

「ヒナギクさん!! 前!!」

だから

「え？」

崖の存在に全く気づくことができなかった

「あ…！！！」

頭が真っ白になる

高所恐怖症ということもあってか怖さが尋常ではない

真下は海

しかしその周囲にはまばらな岩

打ち所が悪ければ…

マイナスな面しか考えられない

そのまま身体が落下する

「ヒナギクさん！！！」

ザーン、と波が打つ音がする

「ふうー…」

聞こえたのは安堵の溜め息

間一髪ヒナギクを救出したのだ

見た目的にはハヤテがヒナギクを押し倒したみたいだが

「大丈夫ですか？ ヒナギクさん…」

頬が熱くなる

心臓がバクバクと鼓動が早くなる

ハヤテの顔が目の前に…

「危機一髪だったわね」

聞き慣れたその声に超覚醒

バツ！！ と二人は背中合わせに正座した

「あー！！ 愛歌さん！！ なんてこんなところに！？」

「そりゃ眺めが良いからティータイム中よ」

まさかの偶然である

「というかあなたたちこそ何してるの？」

最もな疑問である

「や、これは…!! その…、日頃ヒナギクさんに助けられてばかりなのでそのお礼に…」

「後ろから抱き締めて愛を囁いてやるごと…」

『ちがいます!!』

全力の否定

パツと見で勘違いしそうな体制ではあったのだが

「だけど、どういうお礼をしたら喜んでいただけるか、わからなくて…」

ハヤテの言葉を聞いた愛歌はティーカップをお皿の上に起きながら

「…。綾崎くん、ギリシヤには女の子を喜ばせる鉄板のデートコースがあるのをご存知？」

「え？」

「ギリシヤのアテネ市には丘の上から市街を一望できる「サンライズ」という高級地中海料理店があるの。そこは眺めは最高、料理も最高というまさに女の子を喜ばせるためにあるような理想のレストラン…」

再び愛歌はカップを持ち

「そのディナーに招待すれば…！ たいていの女の子は喜ぶ仕組みになってるわ！」

「ほ、ホントですか！？」

「もちろん、そこのおむずがりの生徒会長も例外ではなくってよ」

「誰がおむずがりよ…！」

しかしその会話に希望を見いだしたハヤテはまた愛歌に何かを言うとする

「じ、じゃあ……！」

「だけど、その店。高いわよ」

地上に叩き落とされました

ていうか絶対そうだろうとハヤテは内心予想してたほどだ

「私の名刺を使えば普通は予約すら困難なその店の、最も眺めが良いVIPルームが無条件で使えるけど…」

愛歌は名刺を取り出しながら

「貴方にこれを受け取って、心からの感謝を示す事が出来て？
自腹」で」

愛歌がハヤテを見る

ハヤテはやがて、静かに愛歌の名刺を受け取った

その表情は決意を纏った戦士の顔

「先日入った喫茶店のバイト代…、あれをすべて使って…ヒナギク
さんへの感謝の気持ちを表したいと思います」

そう凛々しい声色で告げた

「…ハヤテくん」

ほんのり赤くしながらハヤテを見るヒナギク

その様子を見た愛歌は「ふ…」と軽い笑みを浮かべて

「それでこそジェントルマン…」

健闘を祈るわ…

ありがとうございます、愛歌さん…

いえ、ラブ師匠…！！

なんだかよくわからないやり取りだった

「…ちゃんと、美味しいものを食べさせてよね！」

空気を変えるためにヒナギクは言う

「へ？」

「ちゃんとエスコートしてよね！！！」

「ヒナギクさん……」

「た、楽しみにしてるんだから！！！」

青空が映える中、赤い頬のままヒナギクが言った

ハヤテはその言葉に微笑みかけて

「はい！ おまかせください！！！」

とても、頼りになる声色だった

と、まあこんな事があったのだ

「…むー」

唸ってみる

何も浮かばない

「…ディナーかー…」

ちょっと顔がニヤける

好きな人と二人っきりで食事

これをワクワクしないというのも無理な話だ

と、完全に上の空だったのでほっぺに冷たい感触が来た時はビツクリした

「わひゃあ!？」

「なに黄昏てるのよ、桂さん」

振り向くとオレンジジュースのコップを両手に持った御坂美琴が立っていた

「考え事？」

はい、と言った様子でオレンジジュースを渡してくる

ヒナギクはありがとう、と応えながらオレンジジュースを受け取った

ひんやりしていて気持ちがいい

「…ま、まあ…考え事かなー…」

手にしたオレンジジュースをちびちび飲んで言う

そしてふと思う

(…御坂さんに恋人っているのかしら)

幸いこの場所には美琴とヒナギクしかいない

他のメンバーは広めの甲板でパーティー中だ

ヒナギクは思い切って聞いてみる事にする

「ね、ねえ御坂さん」

「ん？ なに？」

隣で同じようにオレンジジュースを飲む美琴に意を決して

「み、御坂さんは、その…、好きな人って…、いるの？」

軽く頬を赤らめながら美琴に聞いた

すると

「いふよ」

ものすごく普通に返ってきた

「は、早いわね…」

「桂さんだっているんでしょ？ 綾崎さん」

「!?!?」

バレてる!?!?

会ってまだ間もないというのに

「な、なんでわかったの!?!?」

「いやいや…。バレバレよー」

ふふふ、と笑いながら美琴は言った

「む、むー…」

唸るしかできなかった

やがて落ち着きを取り戻したヒナギクは気になった事を美琴に聞いてみる事にする

「…御坂さんは、告白とかしたことがあるの?」

「あるよ」

「そう…、あるんだ…。…ええ!？」

予想の斜め上に行く答えだった

「…、」

「…あれ、桂さん？」

なんだかずーん、とヒナギクが落ち込んでいた

「…御坂さんは、どうして告白しようと思ったの？」

純粹に、そんな言葉がヒナギクの口から御坂に届いた

「…。私ね、最初はその人の事、意識なんてしてなかった。単なる仲が良い男友達だってそう思ってた。自分に言い聞かせてた」

やがて遠い何かを見る美琴

ヒナギクは静かにその話を聞く事に集中する

「…だけどいつしか気づいたの。私は、あの人の事が好きなんだって…。だから告白しようと思ったんだけど…。ある事件で、その人と離ればなれになっちゃって」

「離れ、ばなれ？」

「うん。…泣いたわ、なんでもっと早く言わなかったんだろって。後悔したわ。…本当に」

「…、」

彼女はこの年齢で凄まじい出来事を経験している

その人に、告白するまでが、どれだけ長い道のりだったのかヒナギクにはわからない

「まあ、その人はだいたい二ヶ月後に戻ってきたんだけど」

意外に早かった

「だけどね、それでやっとわかったんだ。想いって、言葉にしないと伝わらないんだって」

「…そうね…。…うん」

どことなく、ヒナギクは御坂美琴という少女の強さを知った気がした

「…なんか、長々話してごめんね…。えへへ」

「そんなことないわ。…すごく、タメになった」

ヒナギクは笑顔で美琴を見た

「そう？　なら、良かった」

同じように笑顔で返す

「さ、パーティーに行きましょ、瀬川さん達が王様ゲームするって言うってたから」

「…それはまた、騒がしくなりそうね…。…」

また楽しいパーティーが始まる…

デンライナー内部

進路はアテネ市だ

割と自動操縦に対応してるあたりデンライナーは割とハイテクだ

本来ならイマジン四人が色々な所に座っているのだが、今回は気を遣って海音のペンダントにこもっているのだ

「どうぞ、千桜さん」

ことり、とテーブルにチャーハンを置く

「…海音くんって、割と何でも出来るよな」

レンゲを持ちチャーハンを崩しながら千桜が言った

海音は結構料理が出来る

時たま世話になってばかりじゃいけないと海音が料理を作ってくれた事があった

そのときはシンプルな料理　白米に味噌汁、サバの味噌煮と和テイストだったが…

絶品に美味しかった

白米のちょうど良い硬さ、お味噌汁の絶妙な塩加減、味噌煮の美しいフォルム(?)

今まで食べたもので最高に美味しかった

「そんな。ちよっとかじった程度ですよ」

>かじった程度、ねえ。どう思う？ ハルちゃん<

エコーがかったその声は海音の契約イメージの一人、「ウラタロス」だ

「同年代の女性が聞いたら卒倒するな」

>ねえ<

「ええ！？ ちょっと二人共!？」

たまにいじられる

それがいつもの日常

アテネ市

「すげー!!! ここがアテネかー!!!」

上条当麻のテンション最高潮

「申し訳ありません。我々の宿泊も認めてくださって……」

「いえいえ、お気になさらないでくださいな、神袋さん」

近くでは神袋とマリアが話し合っていた

さすがに夜も遅いしどうせなら皆泊まってけとナギが言ったのだ

断る理由はないので遠慮なくあやかろうということになったのだ

とりあえず本当に夜が深いので、部屋へと案内されて、軽くシャワーを浴び、床についた

夢を見た

それは過去に出会った最愛の女性

十年前に出会い、心を交わした、その女の子

あの日から十年

綾崎ハヤテは寝付けずにベッドから起きて部屋から出た

夜空が見える大きめのベランダ

そこに綾崎ハヤテは立っていた

あの日、止まったままの時間は

再び動くときは来るのだろうか

「なに一人でたそがれてんのよ」

声が聞こえた

後ろを向くとそこにはヒナギクが立っていたのだ

「ヒナギクさん……」

「どうしたの？ 一人で夜空なんか見上げて」

「い、いえ……、ヒナギクさんこそ、なんで……」

「私は船で居眠りしちゃったから、そのせいで、眠れなくなっちゃつて……。ハヤテくんも眠れないの？」

「ええ……ちよつと考え事を……」

ハヤテは応える

「考え事って？」

ヒナギクが聞く

ハヤテは軽く夜空を見上げて、呟いた

「「アテネ」っていう名前について……」

やけに落ち着いて

「この星で、最も偉大な女神の名前だなぁって…」

ただそれとなく、ハヤテは言った

そこに数瞬の間が入りそして…

「くす、っはは」

ヒナギクの笑い声がハヤテの耳に入ってきた

「はは、真顔で何言うかと思ったら。やーねーもう…」

「…え？ な、なんで笑ってるんですか？ ヒナギクさん」

「だってハヤテくんだったら…急にそんなこと笑っちゃうに決まってるじゃない」

言っている意味がいまいち理解できなかった

だからハヤテは聞いた

「…なんですか？」

「なんでって、そりゃあそつよ」

ようやく笑いが引いてきたヒナギクがハヤテに向き直って言葉を紡ぐ

「だってそれ、天王洲さんの口癖でしょ？」

ハッキリと自分の心臓の鼓動が聞こえたような錯覚を覚える

止まったままだった時間が、また動き出す音が聞こえた気がした

神の名を持つ、運命の島で、繰り広げられる、一つの物語が始まる

チャプター9 (前書き)

再会する運命の二人

チャプター9

「天王洲、さん…?」

その名前を聞いて聞かない訳にはいかなかった

「そうよ、ハヤテくんだって知ってるでしょ?」

笑みのまま彼女は告げる

「天王洲アテネさん。我が白皇学院の、若き理事長さまよ」

鏡祢アラタはふと目が覚めた

「…ん」

理由は特にない

強いて挙げるなら何か不穏な空気を感じたからだ

というかそれが理由か、と一人納得する

「…外の空気でも吸いにいくか」

とりあえず部屋の扉を開けて廊下に出る

「…さすが夜。寒いな」

眠気が飛んでしまった

どうせならガッツリ着替えて行こう

ピツとスーツを整えて白いソフト帽をかぶる

最初は着るのに時間がかかってしまったが、すっかり手慣れた今となつては文字を書くようにスムーズに着こなせる

自分で言うのもなんだが、割とカッコイイと思うのだ

「ハヤテくん？」

桂さんの声だ

船の上で居眠りをしていたから、眠れずに起きてしまったのだろう

「桂さん？」

「あら、鏡祢くん…。貴方も起きちゃったの？」

歩き回っていたのか若干額に汗が見える（本当に注意して見ないとわからないが）

「そんなところですよ。桂さんは？」

「私もそんな感じ。ほら、私船で居眠りしちゃったから」

予想の大半が当たってしまった

「それで、綾崎を捜してるみたいですけど」

「ああ、そうなのよ。…少し天王洲さんの話をしたら急にいなくなっちゃって…」

「天王洲さん？」

聞き慣れない名前だ

「うん。白皇には飛び級で卒業した人がいてね、その一人が天王洲アテネさんっていう人で…」

どんだけレベル高いんだ

アラタは心にダメージを負いました

「その人の話をしたら、ハヤテくんどこか行っちゃって…」

「どこか、ですか。…むー、とりあえず俺外回ってみます。桂さんは入り口辺りで待っていてください」

アラタは言つと廊下を小走りで駆け始めた

「あ、鏡祢くん!？」

ヒナギクの声が聞こえたが、あえてアラタは無視した

…なにか嫌な予感がするのだ

少し昔の話をしよう

ハヤテがまだ小さかった頃の話だ

学校の給食費が盗まれたと噂がたった

クラスメイトはハヤテを当然疑った

しかしハヤテにはそんな覚えはない

放課後、その事を父に話すと

「盗んだのは父さんだ」

軽い調子でそんな事を言う父親がどこにいるのか

そのとき、初めて自分の心がガラガラと音を立てて碎けるのを知った

ハヤテは走った

ただただ走った

車道に出たかもしれないし信号も無視しただろう

ふと気がついて倒れこむと、そこはどこかの花園だった

天国？ 一瞬思ったがすぐに否定する

行く場所も帰る場所もないハヤテにはもう立ち上がる気力もなかった

そこで思った

「僕なんか、いつそのまま死んでしまえばいいんだ」

「ダメよ。そんな悲しいことを言うては」

否定する声があった

その声色は暖かくて、優しくて…

そして何よりも嬉しかった

「一人じゃ無理なら…左手くらいなら、私が貸してあげますから…」

それが彼女…天王洲アテネとの出会いだった

それからの日々は純粹に、楽しかった

そこでハヤテは執事スキルを身につけたのだ

たくさん遊び、たくさん学び、たくさんキスもした

幸せだった

ただ隣にいただけで幸せだった

だが、終わりは無情にもやってきた

ハヤテは自身の親と決別すべく一度アテネの城の外へと歩を進めた

そして知り合った女の子から福引き券をもらった

しかし運のない自分では数回の挑戦で当たらないことなどわかりきっている

だからハヤテは様々な人のお手伝いをして福引き券を分けてもらうことにしたのだ

当時の大人からは、他愛のないお使いに見えていただろう

だが当時のハヤテは本当に真剣だった

ただ信じた未来の為に

そしてハヤテは見事福引きで、指輪を当ててすることに成功した

ハヤテは喜びアテネの待つ城へと戻り、指輪を渡した

それがただ純粹な、愛の証

だがその指輪はまだ子供だったハヤテとアテネには大きすぎた

おまけに愛の証なら二つ必要とダメ出しも受けた

それを見かねたアテネは受け取った指輪を大切に仕舞い、宝石が埋め込まれた指輪を差し出した

「いつかこれを二人ではめられる大人に、一緒になりましょうね」

その言葉がただ嬉しかった

そして自分が変わったように、あの親も変えられるハズだ、と感じたハヤテは両親にその事を話すべく、また城を出た

振り返った彼女の顔が、どこか不安そうなのを見ながら

また外に出た

今度はあっさり両親を見つけた

そして変えようと言葉をぶつける

「あんなことは泥棒だ、ダメに決まっている」

その言葉に返ってきた返答は

「そっかー、あれは泥棒だったか。父さんすっかりしてたよー」

今考えればなんだそれは、と思う

そんなのは一般常識だ

知らない訳がない…！

だが当時のハヤテはなんの疑問を抱かなかつた

ふと唐突に

「ハヤテくん、その高そうな指輪はなんだい？」

父が聞く

ハヤテは大切な人にもらつた大事な指輪だと返答した

それがいけなかつたかもしれない

「お父さんが特別な場所で預かつてあげるよ」

そんな言葉を信じ切つたハヤテはなんのためらいなく指輪を預けてしまつた

それが引き金

喜び勇んで戻つたハヤテはアテネに言つた

一緒に住もう、と

だが返つてきた言葉は一言

「行きませんわ」

その一言

…そして、決別の一言

それからはただ罵られ、罵倒しての喧嘩だ

ただおかしいと感じたのは、アテネの背後に『何かいる』という声とだけで…

夜の街の中

綾崎ハヤテは一人歩く

（彼女は、僕のことを覚えてくれているのだろうか）

あんなひどいことを言って

ひどい別れ方をした

（仮に覚えていたとして、何を話せばいいのだろうか）

僕の事を覚えているのなら、彼女はきつと僕を恨んでいるだろう

正しかったのは彼女で、間違っていたのは僕だからだ

そう、僕が裏切って傷つけた

言わなくちゃいけないことがある

別れた日、伝えられなかった大切な言葉を

いつか本当に、彼女にもう一度会ったなら

考え事をしながら歩いていたハヤテはとある庭に足を踏み入れていたことに気づくことができなかった

草を踏みしめ歩を進める

(僕は…彼女に　　)

顔を上げた

瞬間、

心が大きく鼓動した

目の前に十年前別れた少女が佇んでいたから

身長も大きくなり、何よりも大人びて神秘的なその姿は…

天王洲：アテネ

チャプター10 (前書き)

Dear est 〽千年経っても覚えてる〽

チャプター10

一目見るだけでわかる

一目で、君だと

「あ……」

何かを言わなくてはと思った

何か……

『いつかこれをはめられる大人に……一緒になりましょうね』

何を……？

君に言えば……

「花畑に迷い込むクセでもあるのかしら」

アテネが言った

風も強く吹きすさぶ

三日月が映えるこの空の下

ハヤテが聞いたのはそんな一言だった

「…え？」

「ですが残念…。門が開いていたとはいえここは私の家の庭…」

アテネは首だけを軽くハヤテに向けて

「どこの誰かは存じませんが、早々に立ち去りなさい」

冷酷に言い放った

「あ…」

ハヤテの事がわかっていないのだろうか

だからハヤテは名乗り出る

「ち、違つよ、僕だよ！ 綾崎ハヤテだよ！」

「ですから」

バツ！ と扇子を開き

「どこの誰かは知らないと、言っているのが聞こえなかったのですか？」

あくまでも悠然に彼女は言う

かつての面影そのままに

その一言で、ハヤテは水に顔をつけられたような気分になった

そうだ、何を舞い上がっていたのだ

この人がアテネという保証などどこにもない

「アテネ！」

別の声が聞こえた

アテネの背後からハヤテと似たような執事服を身に包んだ男性が現れた

銀髪で短髪な男性だ

「夜中に出てったと思ったら…、庭先で何をしてるんだ」

「マキナ…」

しかしハヤテは男性が言った名前を聞き逃さなかった

（アテネ…？ 今、この人アテネって…！）

つまり目の前にいる彼女は

「あ、あのだから僕は」

その台詞は最後まで続かなかった

何故ならば

マキナの放った駿足の蹴りがハヤテに直撃したからだ

ドガア！！ と鈍い音が庭に響く

「がは！」とハヤテは息を吐き出しながらゴロゴロと地面を転がる

「な…！？」

「なんだお前は。アテネに何か用か！？」

マキナと呼ばれた男性がハヤテを睨む

刃のような鋭い視線がハヤテを写す

その視線に悪寒を感じた

マズい、これは…！！

そう考え身構えかけた時

「お止めなさいマキナ。それではその子が死んでしまうわ」

アテネの声が制止した

有無を言わさぬ絶対的な力を纏った言葉だった

「まあそういう訳だから、貴方も勝手に人の家に入ってきてはダメよ。次に来たら…この程度ではすみませんよ」

そう告げたあと閉め出された

ガシャン！ と無情にも門も閉められた

「…僕のこと、覚えていない…」

そう言い聞かせる

よく考えればわかることだ

あれから十年も経っているのだ

思い返せば、あれはほんの短い出来事

ハヤテにとっては大きな出来事だったかもしれない

だが彼女にとってあの日々は、とるに足らない日々なんだ

もし忘れてるなら、あんな辛い出来事を思い出してもらおう必要なかないではないか

ずっとしまっておけばいい

ずっと、自分の中に…

「綾崎！」

そう悲観している時、一人の少年の声が耳に聞こえた

同城内

執事マキナが写真を見ながらアテネに言う

「なあ、さっきのヤツコイツだろ？ 王玉を持ってるっていう執事」

マキナはアテネがあ執事を逃がした事に不満のようだ

「なんで素直に帰しちゃったんだよ。あのまま奪っちゃえば……」

「少し黙りなさいマキナ」

アテネが言葉を止める

反論を許さないといった感じの声色で

「その話はもういいから……」

そしてボタン！ と扉が閉じられた

「…、」

マキナはただポカンとその様子を見守る事しかできなかった

「綾崎！」

声が聞こえた

「かがみね、さん……」

軽く息を切らした、白スーツに白いソフト帽を被った鏡祿アラタがそこにいた

「はあ……はあ……、やっと見つけたぞ綾崎。桂さんが心配してたぜ」

額に汗をかいている姿を見ると結構な距離を走り回って捜してくれたのかもしれない

「……すみません、ご迷惑をおかけして……」

「迷惑なもんか。友達だからな」

言って屈託のない笑みを浮かべた

本当にまどろみや穢れていない、純粋な笑顔

「……ありがとうございます」

ハヤテもそれに対して笑みで返す

だが先ほどの出来事もあったためか、どこかその表情は暗かった

「……綾崎？」

その表情を読み取ったのかアラタが聞いてくる

「どうした？ 何か悩み事とかあるなら聞くぜ」

「あ、いえそんな…。大丈夫です」

ハヤテは即座に返す

この方は何の関係もない

そんな方にご迷惑をかける訳にはいかない

「そか？ まあとりあえず桂さんとこ戻ろつぜ。待ってると思うから」

「そう、ですね…はい」

多少落ち着きを取り戻したハヤテはアラタと共に来た道に戻っていく

ハヤテは一人、今日の出来事を心に仕舞い込みながら

「あ、ようやく帰ってきた！」

入り口付近まで歩いてくるとヒナギクの声が聞こえてきた

恐らくずっと外で待っていたのだろう

幸いにこの夜は寒いというより心地良い風が吹いていたからか風邪はひかなそうだ

…アラタが部屋から出た時は死ぬほど寒かったが

「全く…。急にいなくなったら心配するじゃない」

ぷんぷんとヒナギクがハヤテに怒っていた

「す、すみません…」

とハヤテは素直に謝る

なんだかよくいそうな二人だな、とアラタは考え、そしてふと疑問に思った事を聞いてみることにする

「そっぴや桂さん、さっき天王洲さんがどうとか言ってたけど、天王洲さんとはどういった関係なのさ」

「！」

ハヤテが目を見開いた

ただそんなハヤテに気づいてない二人は会話を続ける

「んー、そうね…。私は高校から白皇に入ったから、その時は天王洲さんのこと知らなかったのよ。白皇の理事長だって」

「理事長！？ と、なるとめちやくちや頭良いんすか!？」

「ええそうよ。財産だつてもものすごいって聞いてたし」

…レベルが違いすぎる

アラタは苦笑いを浮かべるしかできなかった

「んで、入学して間もない頃、校内を散策してて…」

ヒナギクの回想が始まる

旧校舎のあたりかしら、

ふと視線をあげるともービックリするくらいキレイな人がいて、思わず見とれちゃって…

白皇つてすごいなー、こんなお人形みたいな子がいるんだー…て感心してたら…

視線が合ったの

そして

「新入生が私に何かご用？」

「へ！？ いや、あの、えっと…そのー…」

突然過ぎたから、私そのときスッゴクテンパっちゃって…思わず

「め、メアド交換しない？」

「桂さん失礼すぎない？」

率直に思った事をぶちまけた

「し！ 仕方ないじゃない！ 知らなかったんだから！」

そんなやりとりの中、ただ一人真剣な表情でハヤテは話を聞いている
そしてまたヒナギクが語り出す

けどそれが良かったのか、天王洲さんが微笑んで

「貴女、面白い方ね。だけどあいにく、そういうものは持っていないの。…それと初対面の人に何かお願いする時は、まず自分の名を名乗る方が良いのではなくて？」

普通に指摘されたから私は素直に謝って

「うう…ごめんなさい、私は一年の桂ヒナギク。えと、あなたは…？」

って聞くと静かにこう言ったの

「アテネ。天王洲アテネ」

「アテネ？」

「この星で、最も偉大な女神の名前よ」

それでそこから少しずつ話すようになって、仲良くなって…
家庭環境とか、共感する事も多くて…

それで打ち解けていって…

「なかなかいい出会いだっただんな」

「ええ、仲良くなってみると知的な雰囲気が出ててね。…それで、
会ってから半年以上経って、互いによく話すようになって、天王洲
さんって呼ぶのもなんだか他人行儀だなんて思ったのよ」

「だからお互いに、なんていうか、フレンドリーな名前で呼び合っ
とかどうかしら？」

「フレンドリーな名前？ …ふうん、どんな可愛い名前でももらえるのかしら？」

「んー…可愛い名前、か…。あ、だったらアテネを略して

アーたん

て呼ぶのはどうかしら？」

「！」

「そしたら『もうその名前で呼んでいい人はいないんだ』って怒られて…」

「…アーたんて…」

そんな世間話みたいに話を交わす二人を尻目にハヤテは一人考え、そして一つの結論に達した

彼女は、天王洲アテネは、アーたんは

（覚えてる…！ 彼女は、僕を…！）

ヒナギクの話から推測するなら、彼女は十年前の出来事を覚えている
ならなげさつき知らないと言われたのだろう

ハヤテの名前を忘れている？

いや、とハヤテはその考えを打ち消した

あれだけ頭が良いんだ、忘れるなんて有り得ない

つまり彼女はハヤテのことを覚えているにも関わらず

『どこの誰かは知らないと、そう言っているのが聞こえなかったの
ですか？』

ハヤテのことを知らないと

「…、」

つまり

(…僕の事が、本当に嫌いになったという事で…)

アーたん…

ハヤテはただ、その名前を想うだけ

……
意外と大きくなってましたわね…

やはり写真と実際会ってみるのでは違いますわね

なんというか、成長したというか、たくましくなったというか

…あの日から十年、もう会う事はないと思っていました

ねえ、ハヤテ

あんなひどい別れ方をしなかったら、あなたはずっと、あのまま私
といっしょにいてくれたかしら

だけど、今あなたは…

私じゃない人と、いっしょに…

……

いや、今は後悔より、石を…！

翌日

「ふぁ…、おはよう、千桜ちゃん」

朝、千桜が起きると舌っ足らずな海音の声が耳に入ってきた

ちなみに今いる場所はデンライナーの内部

ホテルなどの寢床が確保できなかったから、内部で寝るといふ手法を取ったのだ

運が悪いと、寝違える可能性が高いのだが

「おはよう、かいとくん。…早いねー」

「千桜さんに、朝ご飯作らないといけないですしね」

「自分の分は？」

「ちゃんと作るよ、同時製作」

トントンと小刻みな音が聞こえる

朝食を作る海音を見て笑みを作りながら、時間を潰すために読者を始める

何気ないこの朝というのも嫌いではない

かはわからないが
台所から聞こえてくる包丁やガスの音

それを耳に入れながらまたページをめくる

（なんて、優雅…）

ああ、なんだかお嬢さまみたいだ

ナギのところの綾崎くんもこんな感じなのだろうか

「僕は執事じゃないですから、流石に…」

「！」

なんとという絶妙なタイミングだ

「はい、スクランブルエッグと、焼いた食パン。…あともう少しで野菜スープができますから、待っていてください」

ことり、と朝食を乗せたお盆をテーブルに置いて、気づいた

「…海音くん、その指どうしたんだ？」

乱暴に包帯が巻かれた指が気になった

「あ、これですか。…寝ぼけて包丁で野菜を切ってたら、うっかり切ってしまった…」

てへへ、とはにかんで笑顔を見せてくる

それを聞いた千桜はむっ、とした様子で

「ダメじゃないか、ちゃんと消毒しないと」

「え？ わわっ」

どっか、と座らせて包帯が巻かれた手を取る

部位は左手の人差し指だ

その包帯を解き、荷物に入っていた消毒液をティッシュに軽くつけて傷口に軽く当てる

「痛っ…!!」

「我慢して。もうちょっとだから」

一通り消毒を終えて今度はキレイな包帯を取り、海音の人差し指に巻いていく

先のところをハサミでちょきん、と切って二本のヒモを作りそれを結んで固定する

「はい、終わり」

チヨンと人差し指を突つつく

「あう…。…あ、ありがとうございます」

どことなく顔が赤い

お互いにこんな経験はないから、また会話が止まる

と

「あ、海音くんスープ!」

「へ？ … ああ！？ 忘れてた！！」

また一日が、始まる

同時刻

「今晚だっけ。ハヤテくんとディナー」

洗面所の会話にて

西沢が歯を磨こうとしてたヒナギクに言った

「……………、う、うん」

ヒナギクは軽く頬を赤らめ歯ブラシを口に入れシャコシャコと磨き始めた

「いいなー、私もハヤテくと素敵なディナーを試してみたいよー」

「けど一緒にご飯食べるだけよ。それ以上は、何も」

磨き終わってコップを手に取り水道に近づける

と

「これを機に告白とかはしないのかな」

ガラガラガッシャン！！ とヒナギクは盛大にコップを落としてし

まった

なんだか最近よくブツ飛んだ質問を受けるのは気のせいか

「…、あ…あのね」

「ん？」

躊躇いがちにヒナギクが問いかけた

「私が本当にそういうことを伝えたとしたら、どう思う？」

「…どう思っつて。むー…、まあいろいろ考えちゃうけど、わかんないや」

返ってきたのはそんな言葉だった

「聖人君子ってワケじゃないからさ。嫉妬するかもしれないし、祝福できるかもしれない。けど、二人が付き合いたしたら、やっぱり泣いちゃうかも」

ヒナギクは無言で西沢の言葉を聞いていた

語り出す彼女はさばさばとして、どこことなく、笑顔が綺麗だ

「…けどさ、傷つけて、傷ついて…、誰かを好きになるって事は、そういう事なんじゃないかな」

ここはパルテノン神殿

パルテノン神殿はギリシャ古代建築を現代に伝える最も重要な、ドーリア式建造物の最高峰と見なされる。

装飾彫刻もギリシャ美術の傑作で、この神殿は古代ギリシャそして民主政アテナイの象徴であり、世界的な文化遺産として世界遺産に認定されているのだ

「同行しても本当に良かったんですか？」

躊躇いがちにアラタがマリアに聞いた

「大丈夫ですよ。こういうのは賑やかだと楽しいですし、ナギも割と…」

言ってマリアはナギを見る

そこには西沢と美琴と談笑しているナギがいた

ちなみに生徒会三人娘は夜更かししてたらしく、ホテルで現在爆睡中

ヒナギクは高所恐怖症のため、柱に手をついて一心不乱に神殿を絶賛見学中

ここにいるのはナギと西沢、ハヤテ、ヒナギクにマリア

それとアラタ、当麻、美琴と神那賀、紅司に咲良の二人組

伊達さんや他のメンバーは自由に観光中だ

お金持ちはスゴいなー、とアラタは感心していると、どんよりとしているハヤテが目に入った

これは朝からそうだった

やはり何か悩み事があるのだろうか

友達としては助けてやりたいが、自分が行動した事で悪化する可能性もなくはない

ここはしばらくは静観が正解か、と結論づけて

「綾崎、どうしたよ」

「ハヤテ、朝から調子でも悪そうだけど、大丈夫か？」

タイミング良くナギもハヤテに聞いた

「い、いえ！ 心配には及びませんよ！ 世界遺産とか見たの初めてでしたから、ビックリし過ぎてボーっとしちゃいましたよー」

そう笑顔を作るが、どこか無理をしてるように見えたのは気のせいか

「けどそれだとこの先驚きすぎて気絶しちゃうかもだぞ」

「へ？」

言うつや否やバラバラバラバラ！ と中空に現れしはヘリコプター

割と大きく、この人数でも難なく乗り込めるだろう

ただ何人かは呆然としていた

代表として西沢が思う

(あ、侮っていた!! お金の量がケタ違いすぎる!!)

まさしく月とすっぽん

天と地だ

「あれ、けどこれ…桂さんは大丈夫なの?」

ふと思った疑問を美琴が言った

「もう固まってるけど…」

神那賀が指差すとそこには作り笑顔で額に脂汗を浮かべたヒナギクが石みたいに固まっていた

メドゥーサに睨まれたみたいに

「…んー」

ナギはちょっと考えたが

「ビックリし過ぎると気絶するから問題ない」

「…!」

固まったヒナギクを乗せてヘリコプターは発射しました

まだまだ受難は続く

男はドアを開いた

差し込んでくるのは太陽の光

男は首にかけられたトイカメラで適当に街を撮った

「…世界ってのは、まだまだあるな。ここ景色は、どこか悲しい」

男は再びカメラをぶら下げ直す

そして男は誰にともなく呟いた

「神の名を持つ島、か。…ま、なんとかなるだろう」

呟いた後、男

門矢士^{かどやつかさ}は歩き始めた

チャプター10（後書き）

アラタ「アラタと！」

ハヤテ「ハヤテの！」

『執事通信』！！』

アラタ「てか俺執事じゃないんだけど、このコーナー来ていいのかな」

ハヤテ「いえいえ、大歓迎ですよ！ 鏡祢さん！」

アラタ「つーかあとがきコーナーなんてやらないのに、なにさ今更この作者は」

ハヤテ「何でも、他の作者さまを見習おうって事になって…」

アラタ「ホント今更だなオイ」

ハヤテ「そんな事仰らないでくださいよ、めったにない二人でのコーナーですよ？」

アラタ「まあ」とある」と「ハヤテ」だからね…。さて綾崎、次回
は？」

ハヤテ「はい！ 次回は主に、ヒナギクさんが気絶しそうですね…」

アラタ「最後に出てきた男や、綾崎と桂さんのディナーと気になる
ところ満載、かな。…まあいいや」

ハヤテ「いいんですか!？ あ、えと、次回も、この番組(?)に
」

アラタ「スイッチ、オン!!」

チャプター11 (前書き)

そして彼女は決意する

チャプター 11

「うおー!!! ここがデルフィ遺跡かー!!!」

現在我々がいる場所はデルフィ遺跡と呼ばれる世界遺産だ

因みに叫んでいるのはテンションが上がっている西沢歩

「さすが太陽神アポロンの神域!!! 空も晴れ渡るブルースカイ!!!」

大空を仰ぎ見ながら高らかに叫ぶ

「ねえねえ見てよヒナさん!!! ここがかつて大地のへソと呼ばれた、世界の中心だった場所だよー!!!」

と、言われたヒナギクは

「へりなんかなくなっちゃえばいいんだへりなんかなくなっちゃえ
ばいいんだへりなんかなくなっちゃえばいいんだへりなんかなくな
っちゃえばいいんだ...」

「世界の中心でへりを呪った会長!?!」

恐らく地球上で初だろう

「ちよ、大丈夫かなヒナさん!!!」

「あの...、サンドイッチ食べます?」

思わずあたふたし、気を使う西沢

美琴もサンドイッチを手に持ってヒナギクに促してみる

「ええ、とりあえずへりが落ちなかったから大丈夫よ」

若干顔が青いままヒナギクが応えた

「だ、大丈夫だよ桂さん。落ちる確率は天文学的だからさ」

アラタ必死のフォロー

「へりが地面を走ってくれたら信用してあげるわ」

「そんなへり、逆に信用できねーよ」

どこまで嫌いなんだ高いところが

と、へりの値段が気になったようで、西沢がマリアに問いかけてみた

値段は無論気になる

アラタや当麻はガツツリ聞く気満々で言葉を待つ

「改良費も含めて、ざっと三十億円ですわ」

啞然としたのは言うまでもない

「…やー、すごいな綾崎」

逃避するべく当麻と二人してハヤテに話を振る

「…、」

「綾崎？」

本当に様子がおかしい

何か、思い詰めた表情だった

「お嬢様はいつだってすごいですよ…」

その様子を主であるナギは見つめていた

何かを感じていたような視線をおくりながら

「けど私！！ もうへりなんか乗りませんからねっ！！」

さて次の場所へ行こうかなんて時にヒナギクがキツと睨んだ

「じゃあどうやって行くんですか」

当麻が代表して何故かを問うた

「走っていく」

「…えー」

もう何も言えなかった

するとナギが軽く息を吐きながら

「心配しなくてもへりにはもう帰ってもらったよ」

と言った

「え？」

へりには帰ってもらった？

「いくら速いとはいえ、ローター音が耳障りで仕方がない。それに…」

とヒナギクに顔を向けて軽く笑みを浮かべながら

「それに、乗り慣れていないとやはり怖いのは確かだと思うんだ。私は」

「…。ナギ…」

ここまで考えていてくれたなんて

生まれて初めてこの友人が天使に見えた

「だからここから先は、ジェット機でいく」

「……」

天使の顔した悪魔だった

ヒナギク本日二度目の気絶

アテネ市

市街を歩く二人組の男性と三人の女子中学生

「佐天さん佐天さん！ これ見てください！」

「お、なになに！？ ……うわぁ…、可愛いネックレス…」

お店のガラスに手をつけて瞳をキラキラさせているのは初春飾利と
佐天涙子

二人とも学園都市の中学校に通う女の子だ

「…貴女たち、遊びに来たのではないんですわよ」

その二人をジト目で見る女の子は白井黒子

「まあ今日くらい多めに見てあげてよ。せつかくの海外なんだから」

「ああそうだぜ。ピリピリしてるのも疲れるしな」

そう言って宥めるのは二人組の探偵コンビ、左翔太郎とフィリップ

現在は学園都市に場所を移し、第二左探偵事務所を開業している

「にしても、全然いねーな。結構歩いたと思っただけど…」

「確かにね。流石に、居場所は検索できないからね…」

言っただけでフィリップはクロワツサンに噛みついた

「ておいフィリップ、お前までなに食ってたんだ」

「いや、ちょっとお腹が減って。だけど翔太郎、クロワツサンってなかなかだね。ここがリボルギャリー内なら検索してしまえばいいぞ」

「…外に出てて助かったぜ…」

フィリップは疑問に思った事を気の済むまで徹底的に調べ上げる「クセ」がある

一度こうなってしまうと調べ尽くすまで止まらない

翔太郎も何度手を焼かされたか

「ほら貴女たち、そろそろ行きますわよ!」

「あ、待ってくださいよ白井さん」

「あ、初春、私を置いてくなっ」

「おい！ 勝手に前に行くな！ 迷子になっちまう」

「ふむ…、実に興味深い。帰国したら早速検索だ」

「ああくそ！ フィリップお前もか！」

なんで偶然クロワッサンなんか購入したのだろう

翔太郎の不運は続く

綾崎ハヤテの元気がない

断崖の修道院「メテオラ」についたところで西沢が心配そうな表情で言った

「…ハヤテくん、ちょっと元気ないかも」

「そうですねー…」

西沢の横で同じように心配そうな顔でマリアが続く

「けど昨日は普通だったよな」

「ああ。全くだ」

少し離れた所でアラタと当麻が言葉を挟む

「だったら、私の飛行機みたいにこのあと憂鬱になるような事があ

るんじゃない？」

それは貴女だけだよ、という言葉のアラタは飲み込んで

「流石にそんな…」

「じゃあこのあとになにかあるの？」

「んー、強いてあげるなら…桂さんとディナーとか」

沈黙する一同

「…あれ」

ヤバい、変なこと言った

アラタは頭の中で整理する

しかしそんなアラタとは裏腹に割と本気で受け取ったヒナギクは

「え、ま、まさか…、私のせい？」

めちゃくちゃショックを受けておられました

「いやいや！ そんなことないよ桂さん！」

「そつだよ！ 流石にそれはないよ！」

神那賀と美琴が必死にフォロー

「仮にそれが原因だとしても、そこまで憂鬱に…」

当麻も当麻なりにフォローするのだが

「そこまで憂鬱になるほどイヤとか…」

通じず

「わかりました！ では私が、詳しくハヤテくん理由を聞いてきますわー！」

メイドさん出陣

「ハヤテくん！」

不意に声をかけられた

マリアの声だ

「あ、はい…。なんですかマリアさん」

「ハヤテくん、さっきから何をそんなに憂鬱そうな顔しているんですか？」

「え？ や、やだなあ。そんな顔してませんよ」

「もしかして、その…」

と言った時流石に『ヒナギクさんとのディナーが憂鬱なんですか？』
なんて聞ける訳がないので

「あの、マリアさん？」

「で、ですからその…！」

だからマリアはこう聞いた

「そのくもった表情は…、「夜の出来事」と関係があるんですか？」

なんかこう聞くとどこことなく卑猥に聞こえるが、マリアは今晚のディナーの件を言っているのだが

「夜の、出来事…？」

この時ハヤテと周囲にある勘違いが生まれた

マリアは夜の出来事をヒナギクとのディナーと捉えて言ってるのだが、ハヤテには昨晚アテネと会話した事と捉えた

早い話、マリアは「今晚」の夜の出来事。ハヤテは「昨晚」の夜の出来事と綺麗にすれ違いができてしまった

そんなこととはつゆ知らず

「…まあ確かにそうですね…」

どこかから「ピキィー！！」とひび割れるような擬音が聞こえたが無

視する

「た、確かにつて…?」

「…詳しくはお話しできませんけど、明らかに自分の事が嫌いだとわかれば、どうしていいかわかんなくなるっていつか…」

「明らかに、嫌い…?」

キューピン！ とマリアがひらめく

(はっはーん。これはまたいつもの、ハヤテくんお得意の勘違いってヤツですわね)

余談だがマリアさんも勘違いしています

(仕方ないですねー…ではここは私が、やっぱり大人のアドバイスをしてあげますわ)

そうと決まれば

「ハヤテくん」

「あ、はい」

「とりあえずいい機会ですし、今晚ヒナギクさんとじっくり話をしてみてくださいですか?」

「え…? ヒナギクさんと?」

ハヤテは頭に何個かハテナマークを浮かべた

「なにかあったかわかりませんが、言葉にしてみないとわからないじゃないですか。人と人との関係は、何かと誤解はつきもの…」

言ってマリアは笑みを浮かべて続きを言う

「でも誤解を恐れているのは、人と人との関係は永久に何も変わりませんわ」

「…、」

勘違いから生まれた会話だがなんかしらハヤテには伝わったらしい

「それに大事なものは、ハヤテくんがどうしたいかですよ。ハヤテくんはどうしたいですか？」

「僕が、どうしたいか…」

数瞬の間のアトハヤテは言った

「わかりました。じゃあ少しヒナギクさんと話してみます」

「ええ、きっとそんな深刻な問題ではないと思いますわ」

直後のマリアさんの心境

（決まったー！！ どうですかこの大人の対応！！ さすがですわ私！！）

さすがです

「…私との食事がそんなに憂鬱だったなんて…」

桂ヒナギクは岩に手をつけてずーんと落ち込んでいた

全て勘違いだが

「いやいやそんな。ハヤテくんお得意の勘違いなんじゃないかな」

汗を浮かべながら西沢が必死にフォローする

「綾崎さんいつもあんななの…?」

怪訝に思った美琴が西沢に聞いてみた

「うん、割と…」

苦笑いで西沢は答える

勘違いで空回り、最後に真相を知り苦笑い

似たようなのが何個もあった

「御坂、さん」

「は、はい」

不意に呼ばれてちょっとびくつとした

「想いつて、言葉にしないと伝わらないって、言ってたよね」

「う、うん」

「…なら、言っておけるわ…。あの人に!!」

バツ！ と顔を上げて宣言する

「はつきり!! 気持ちを…!!」

そして彼女は決意する

鈍感なあの人に、自分の気持ちを言葉にしようと

「…、」

ただ一人、アラタはどこか考えるような表情で

「アラタさん？ どうしたんです？」

ふと隣に歩いてきた紅司と咲良が聞いてきた

「どこか調子が悪いんですか…？」

「あ、いや…そんなじゃないよ。…何でもないんだ」

そう言つて二人の頭を撫でるアラタ

(…、)

アラタは昨日の夜を思い出す

思えば昨日はどこか大きめの門の前でハヤテと合流した

先ほどマリアが「夜の出来事」と遠回しにハヤテに聞いていたが…

もしもその出来事が昨晚の事だとしたら？

確かにハヤテは（自分が言うのも何だが）他人の好意には鈍そうだ

いや、実際西沢やヒナギクの意見からまとめるに鈍いのだろう

だからといってハヤテがヒナギクを憂鬱に思つたりするだろうか

つまりハヤテのあの憂鬱の原因は今晚ではなくて昨晚から引きずっていたのか

(…割と苦勞人だな、綾崎は)

おそらくハヤテはえらくモテているだろう

しかし本人は女の子たちの好意に気づいていない

それになぜだかタイミングが悪い（色々）

そして三千院家の執事をやって…

（なんだろう、早死にしそうだ綾崎）

負の想像

…大丈夫だろうか綾崎

そう思いながら今日は過ぎていく

チャプター11（後書き）

美琴「美琴と!!」

ナギ「ナギの!!」

『執事通信』!!』

美琴「執事通信も二回目。てことで今回は原作と、作者の作品と口イン、御坂美琴と」

ナギ「三千院ナギがお送りするぞ!」

美琴「まあ二回目といっても特にテーマはないのだけど」

ナギ「それは番組としてどうなのだ…。それにテーマならあるではないか」

美琴「? なによテーマって」

ナギ「それは…」

美琴「それは?」

ナギ「お前の彼氏、アラタだアアあ!」

美琴「にゃ!?! にゃに言うのよナギさん!?! / / /」

ナギ「気にもなるわ！ 見えない所でイチャイチャしおって！！
私、だって…」

美琴「え、えと…、あのアラタとは確かに恋人、だけど…え、と。
あの…／／／」

……

アラタ「もう收拾つかん。綾崎、次回予告」

ハヤテ「はい。次回は、僕とヒナギクさんがついにディナーをします…」

アラタ「門矢士も動くらしいな…。…黒子たちも…」

ハヤテ「なんで露骨に嫌そうな顔なんですか？」

アラタ「いや、別に…」

ハヤテ「と、とにかく次回もこの番組に！！」

アラタ「シンメトリカル！ ドッキングッ！」

ハヤテ「何人に伝わりますかね、そのネタ…」

チャプター12 (前書き)

S i l k y h e a r t 言葉にならない

チャプター12

「千桜さん？」

ここは千桜と海音が宿泊しているホテル

時刻は夜、だいたいディナー時といった時間帯か

ちなみになぜ最初の言葉が疑問系だったのは千桜が携帯の画面を凝視していたからだ

「どうしたの？」

「あ、いや…。三人娘、いるだろ？」

三人娘とは、瀬川泉、花菱美希、朝風理沙の三人だ

「はい。その三人がどうしました？」

「いや…。瀬川さんからメールきてさ。まあ純粹に明日皆でショッピングに行こうってメールなんだけど」

皆でショッピング…

「いいじゃないですか！ 皆でショッピング！ なんだかんだで八ヤテくん達とあんまり絡んでないし！」

「その発言はどうかと思うぞ海音くん。…それにショッピングといつても…」

むう、と千桜は考え込む仕草を見せて

「…ほとんど今日の午前中に済ませちゃったんだけど…」

そうなのだ

本日の午前

朝起きてご飯を食べて、両親へのお土産や欲しいアクセなどはほぼ購入してしまった

お互いのネックレスを交換した時は頬が紅潮したほどだ…

「それでも友達と一緒に買い物って、楽しいと思いますよ。もう日にちもないですし、…ね？」

言われてみるともうゴールデンウィークも残り少ない

恐らく明日が最後、明後日には帰国といった感じだ

「…そうだね。行こうか。買い物に」

千桜が言うとはあ、と海音が笑顔になる

その笑顔にちょっとだけ千桜がときめいたのは言うまでもない

と、幸せムードな二人にコンコン、とノックの音が耳に入ってきた

「入るぞー」

そして有無を言わず乗り込んできた一人の男性

黒めの上着に黒ズボン、内側に赤いＴシャツを着て首には縦長に二つレンズがついたトイカメラ

門矢士だ

「やっと見つけたと思ったら。何イチャついてんだお前」

「べ！ 別にイチャついていたわけじゃ…！」

「真つ赤な顔で言われても説得力ねーよ。ま、いいけどな」

言いながらあくまで自然な動作で部屋の椅子をひき、どつかと腰を下ろした

「ていうか。貴方は誰ですか。いきなり入ってきたと思ったら普通に座って…」

いきなり来訪してきた士にちよっぴり怒りを現す千桜

まあ当然だ

「待つて千桜さん。あの人は僕の知り合いだよ…」

「あんな礼儀知らずな方が？」

「う…。確かに礼儀知らずだけど…」

「そこ！ ちょっとは否定してくれ！」

椅子の上で声を荒げる

「だってそうじゃないですか。いつも自信満々だし偉そうだし」

まるでギルガ ッシュだ

「そこまでええるか。「我」と書いて「オレ」みたいな慢心王と一緒にするな」

下手をすればその慢心王さえぶっ飛ばしそうだ

まあそんなワケで

「どんなワケですか」

メンバーが一人増えました

「今頃桂さんは、綾崎さんとディナーかー」

アテネ市市街の夜道を美琴と歩く

ナギの別荘には当麻と神那賀、紅司くん、咲良ちゃんがお留守番している

なぜ留守番しているかと言うと、ナギとマリアが西沢を連れてギリシャ最大の博物館、国立考古学博物館に行ったからだ

ナギ曰わくお礼らしいが

「デイナーかー…」

なんだか美琴がジツとこちらの顔を伺っている

「…どうした美琴」

また俺はなにかやらかしてしまっただのか、とアラタが思考をフル回転し、様々な事象を想像していると

「デイナーに行きたいアラタ」

「…。晩御飯なら三千院の所で食べたじゃんか」

「学園都市に帰ったら、の話よ。…なんだかんだで邪魔や急な用事入ったりで…結局デイナーには行ってないじゃない」

言われてみるとそうだ

何度か夕食を約束したのだが、その度急用や邪魔が入るのだ

呪われてるのか、と考えたほどだ

「…そうだな。ちょうど行きたいと思ってたんだ。…二人つきりで

ソフト帽を右手人差し指で軽く上げながら美琴を見る

「…アラタ」

頬を赤くしながら期待の目線でアラタを見つめ返す

なんてイイ雰囲気

このままいけるか…、と思いかけた瞬間

「お姉様アア！！ お兄様アア！！」

「なあ美琴。…いまイヤな後輩の声が聞こえた気がするんだが」

こめかみをひくつかせ美琴が続ける

「き、聞き間違いじゃないかしら」

聞き間違いであって欲しいという願望も込めた一言でもあった

と次の瞬間美琴とアラタの間にツインテールの女子が突如として現れた

しかもそのツインテールは二人がよく知る人物で

『ふん』

息のあった張り手がツインテールの頭にクリーンヒットする

「なばっ」

妙な呻きをあげてツインテールが地面に突っ伏した

そのタイミングを見計らって美琴が叫ぶ

「黒子おー!!」

突っ伏したツインテールは美琴の後輩、「白井黒子」だ

「御坂さーん、アラタさーん」

また横合いから別の声が聞こえてきた

声が出た方を見ると頭に花飾りをした女の子と、黒髪ロングの女の子…、そしてその後ろに二人の保護者みたいな…

「初春に佐天…。左のダンナにフィリップまで…」

ほぼフルメンバーではないか

「よ、捜すのにちよつと手間取ったぜ」

なんて気楽に答えるのは黒いソフト帽に着くずしたスーツを着込んだ男性は左翔太郎

その隣にいるのが彼の相棒のフィリップだ

「なんで初春さんたちもここに？」

最もな疑問を美琴が投げかける

「僕たちは、ここに逃げ込んだドーパントを追ってきたんだ」

「ドーパント…!?!」

「ああ」とフィリップが頷いて翔太郎が言葉を続ける

「実はここ最近、学園都市で奇妙な事件が相次いで起こってるんだ」

「奇妙な事件？」

初耳だ

「それは、人が金にされるっていう事件だ」

「人が、金に？」

なんとオカルトじみた事件か

「メモリの名前は？」

「もう検索は終わっている。メモリの名前は、「ミダス」。かつてフリギアの王として君臨していた者だ。その力は、触れたモノをすべて金に変えるというものだ」

「触れたモノって、人間や、物さえ金にするってのか!?!」

それは恐ろしい力じゃないか

触れられるモノなんてたくさんある

もし攻撃さえも防がれるなら無敵だろう

「だが、攻撃関連は金にするのは難しいみたいだ。神経を集中するからね。だから波状ならなんとか倒せるかも。…協力してくれるかい、アラタ」

「たり前だろ。場所は？」

そう聞くと翔太郎が軽く額に汗を浮かべて

「…見つかんねーんだよ。だから、散歩がてらいろんな所搜したんだけど、収穫はナシ。今日は休もつって話になったんだが、いい宿がなくってな…」

うーん、と翔太郎が唸る

「あ、それだったら…」

アラタは一つ思い浮かんだ場所があった

そこに翔太郎たちを誘ってみよう

アラタは未だぶっ倒れてる黒子を担ぐとその場所へと案内すべく、歩きだした

まあその場所とは、いま自分たちが宿泊している三千院の別荘なのだが

私は、この人が

綾崎ハヤテという人が好きだ

だから気持ちを…伝えようと思ったんだ…

一通り食べ終えてレンゲをお皿の上に置く

「前菜の味はいかがでしたか？ ヒナギクさん」

カチャ、と皿とレンゲを回収しながらハヤテが問う

ヒナギクは先ほど食べた前菜の味を思い出すように、口元を拭いながら

「とってもおいしかったわ、ハヤテくん」

「それは良かったです」

言って柔和な笑顔を浮かべる

この人がヒナギクの好きな人、綾崎ハヤテ

「けど…、ディナーっていうから私でっきり、ハヤテくんと一緒に食事をするのかと思ったら…。ハヤテくんがずっと給仕をやるのね？」

「はは、そりゃ僕は執事ですから」

ハヤテは次の料理を用事しながら答える

そして軽くヒナギクの方を向きながら

「それにこれは、ヒナギクさんへのお礼のディナーなんですから」

ハヤテは何気なく普通に言っ たつもりだろう

純粹な微笑みがとてつもなく眩しく見えて…ヒナギクはきゅんっとなってしまうた

そう、確かに料理は美味しいのだ

「では次はスープですが…」

「あ、うん…」

だがヒナギクは、料理を食べるためにここに来た訳ではない

(私は…、このディナーをキツカケに好きという気持ちを伝えるために来たのだ！)

しかしいざ言つとなると…

「それで、このスープは地中海でとれた魚を…」

ハヤテの説明なんて耳に入っ てこなかった

なぜならいつ、いつたい、どんなタイミングで『好き』だと言え
ばいいのかわからないからだ

(ああもうどうしたらいいのよ!! このままじゃせつかくのデ
イナーがあつという間に終わっちゃう!)

おそらくこのタイミングを逃せば一生告白なんて不可能だ

ならばいつそのこと勢いで言ってしまう、と考えたヒナギクは

「は! ハヤテくん!!」

「はい? どうしましたヒナギクさん」

自然な笑みにヒナギクはまた顔が赤くなり…

「…お水、もらえるかしら…」

全く違う言葉を口走っていた

(もー! どうしたらいいのよー! バカああああアア!!)

結局、何も言えないままデイナーは終わってしまった

あとはこのまま、帰っておわり

だけどそれでいいのだろうか

いまヒナギクはハヤテの数歩後ろを歩いている

このまま終わったら、きっと必ず後悔する

だから聞こう

せめて、これだけは

「…ねえ、ハヤテくん」

「はい？」

ヒナギクは一度立ち止まって声をかける

ハヤテもあわせて立ち止まった

そしてヒナギクは意を決して、問いかけた

「今日ずっと、憂鬱そうな顔してたのは、どうして？」

その問いかけに、ハヤテは一瞬ドキリとした

「…え？」

「…その理由を全部、聞かせてくれない？」

「憂鬱そうな…顔？」

「ええ、理由…あるんでしょう？」

上手く隠したつもりだったのだが、やはり顔にはでていたようだ

自分が、天王洲アテネの事を気にしていた事が

「…すみません。出来るだけ表情には出ないように努力はしていたのですが…」

「…そう。じゃあ…、やっぱり…」

「昨日、天王洲さんと久しぶりに会ったんですよ」

「え…？ 天王洲さん？」

ハヤテの口から意外な人の名前を聞いた

「会ったのは偶然なんですけど…。僕は彼女に言わなくちゃならぬ事がたくさんあって、少し話そうと思ったんですが…、無視、されてしまった」

つまり…ハヤテの憂鬱そうな表情はそれが原因なのか

となると決してヒナギクとのディナーが憂鬱だった訳ではないのだ

(…良かった。少し安心したじゃない…)

心から安堵した

そして別の疑問が浮かび上がってくる

「けど、ハヤテくん天王洲さんと何があったの？」

好奇心から出た質問だ

おそらくは昔なにかの縁で知り合ったとか、他愛ない関係かな、と思っただ

「その…、ハヤテさんと天王洲さんっていったいどういう関係なの？」

「…どういう関係…って…」

そう聞かれると返答に困る

ハヤテとアテネ

いったいどういう関係だろう

幼なじみ…いや違う

友達…無視されたのに

考えてみると上手い説明が見つからない

せっかくマリアが『ヒナギクに相談してみては』とアドバイスをくれたのに

「あの人は…」

自分を助けてくれて

たくさんのことを教えてくれて

傷つけてしまった人

再会するのに十年流れて

再び会ったら嫌われて

もう自分なんか忘れてしまおうとしている人…

『大事なのはハヤテくんがどうしたいかですよ』

…何かしら、この沈黙

私になにか変なこと聞いちゃったかしら…

いや、けどこれはいいタイミングじゃないかしら

そうだ、このまま終わったら何のために決心したのかわからない！

ハヤテくんの曇った顔だけ見て勝手に自分で勘違いして

落ち込んだりへこんだり、もうそんなのイヤなのよ！！

だから言うんだ！ この人に、好きだって！！

僕がどうしたいのか

僕にとって、自分にとって天王洲アテネはいつたいどんな存在だ

ハヤテはずっと彼女の影を追いかけていた

それは何故？

贖罪？ 謝罪？

アテネを傷つけた事をハヤテはずっと気にしていた

だけどそれだけか？

だから気になつてた？

だから会いたかった？

いた違う、そんなのじゃない

ハヤテと、アテネは

(僕と、彼女の関係は…)

『いつか、これを二人ではめられる大人に、一緒になりましょうね』

他の人とは、違う

綾崎ハヤテにとって

(僕にとって…)

天王洲アテネは…

(彼女は…)

「左手くらいなら、私が貸してあげますから」

たった、今

綾崎ハヤテは理解した

自分にとって、彼女はどんな存在かを

「あ！ あのねハヤテくん！！」

「彼女は……」

「ずっと、言わなかったけど、私……！！」

「あの人は……」

「ハヤテくんのごとが……！！」

「あの人は僕の……好きな人です」

世界が止まった

風が吹き荒れた

彼女は、ヒナギクはなんて言おうとしたのだろう

それがどんな言葉だったのか

もう、思い出せなかった

チャプター12（後書き）

ハヤテ「ハヤテと！」

アラタ「アラタの！」

『執事通信』！！』

アラタ「なんてやってる場合じゃねえだろコラ」

ハヤテ「いえいえ、このコーナーも三回目なんですから、明るくいきましようよ明るく」

アラタ「明るく行けるかアアア！！ 今回の終わりが終わりだから明るくなんて出来ねエンだよオ！！」

ハヤテ「キャラが変わってます鏡祢さん！！」

アラタ「キャラが変わっちゃうくらい気が動転してるのさしてるんですしてるんだよ三段活用！！ 次回どうなんだよこれ！！」

ハヤテ「で、ではまた次回」

アラタ「流したなハヤテエエ！！」

チャプター13 (前書き)

Love me Tender
　　～夜に想つて～

チャプター13

綾崎ハヤテは門の前に立っていた

自分の何倍もの高さを誇るその門の前に

理由は一つ

天王洲アテネに会うためだ

(…ア…たん…)

ここに来る事になったのはある経緯がある

「天王洲、さんが、ハヤテくんの好きな人…?」

ヒナギクは躊躇いがちに聞き返す

「はい。えっと…その、どこから話していいかわかりませんが…」

「ちょよ! ちょっと待って!!」

ハヤテの言葉をヒナギクが遮った

胸の内から込み上げる感情に抗うことが出来なかったからだ

「? どうしました?」

そんなヒナギクの気知らないハヤテはごく自然に聞き返した

「い、いや！　ちゃんと聞くからちよつと待って！！」

ヒナギクはクルリと踵を返しそのまま待機

涙なんて見せたくなかったから

いつも強気みたいなキャラが定着してるヒナギクが涙なんか見せたら必ず気を遣われてしまう

悲しむような事じゃない

ハヤテは十六歳だ

好きな人がいたっておかしくないんだ

ヒナギクはそう自分に言い聞かせてヒナギクはまた話の続きを促した

「…それで、二人はどういう関係なの？」

「え？　あ、えつと…、一言で表すなら、古い知り合い、ですね…」

「古い知り合い？」

「十年前に、僕と彼女はいろいろあって…、一緒に住んでいたんです」

一緒に、住んでた

サラツとこの人は凄まじいことを言わなかっただろうか

「一緒に、って…、天王洲さんの家に…？」

「ええ、まあそんなようなものです」

ハヤテは節目がちに視線を落としながら続ける

「…その頃、僕は親にヒドい目に遭わされていて、兄がいる時は兄がなんとかしてくれていたんですが…僕の兄は…」

「その」とハヤテは付け足し

「街で困ってる人を見つけては、その人を助けることに熱中し、フラフラとどっか行ってしまいう人でしたので…」

「…、」

若干汗をかきながらヒナギクはその話を聞いていた

尊敬はできるが…、なんとも言えないお兄さんだ

「十年前のその日も両親にヒドい目に遭わされて、もう限界だと思
い初めて家出をして…。彼女に、会いました」

ハヤテはどこか遠い目をしながら空を見た

過ぎた思いを馳せるようどこか夢かった

「詳しくは聞いてませんが、彼女も当時両親がいなくて、僕たちはすぐに仲良くなって…それで…」

「それからずっと、彼女の事が好きって事…?」

「はい。多分そうだと思います」

多分…とは一体どういうことだろうか

「多分って…?」

「…十年前、酷い別れ方をしたんです。…本当に酷い別れ方を、僕のせいで…」

ハヤテは再び前を見る

「けど、十年前、彼女が僕を助けてくれなかったら、きっと僕はここにいません」

その表情は悲しそうで

「きっと両親と同じようになっていたか、もう死んでます。…それくらい彼女は、僕にとって大切な人で…」

次第にヒナギクは真剣にその話を聞いていた

「それで昨日久しぶりにあって、やっぱり好きだって思ったの?」

不意にそんなことを聞かれてハヤテは若干言いよどんだ

「…けど、彼女は僕を、嫌っていると思うから…、だから…」

「だったら…!!」

ヒナギクはいつの間にか声を張り上げていた

何故かは自分にもわからない

「確かめてくればいいじゃない!!」

「えっ…?」

「ホントに嫌われてるか確かめないで悩むより、まずちゃんと気持ちを確かめてくればいいじゃない!! 好きって気持ちだけでも相手に伝えて、その後どうするか考えたらいいじゃない!!」

何を言いに今日来たのだろうか

「そんな風にウジウジしてるハヤテくん、私は嫌いよ!!」

本当は彼に好きって伝えるはずだったのに

「ヒナギク、さん…」

「そんな風にいつまでも悩んでないで…」

こんな事を言う資格なんかないのはわかっているのに

「まずはちゃんと話して。相手の気持ちを確かめて…、ちゃんと自分の気持ちを伝えてきなさい」

言ってヒナギクはハヤテに軽く笑いかけた

それは彼女が出来る精一杯の『つよがり』だった

ハヤテはしばらく呆然としていたが、やがて決意するように目を閉じてまた開く

先ほどまでの陰りは見えない

決意の目だ

「わかりました！　ありがとうございます、ヒナギクさん！！」

それで今に至る

(門、やっぱり閉まってるけど…)

と、その時だ

ギギギ…、とその門が勝手に開いたのだ

まるで入れと言わんばかりに

「…これは、入って事だよな」

ハヤテはその誘いに乗る事にした

ゆっくりと歩を進める

ある程度歩くと昨日と同じ庭に行き着いた

いくつもの花に囲まれて、柱が何本も建っており、いくつかは壊れて地面に転がっていた

「へえ、ホントに来るんだ」

声がした

「!?!」

「こつちから出向かなくいいのかってアテネに聞いたら、『向こうから来るからいい』って言ってたけど…。本当に来るとは思わなかった」

その声の正体は先日ハヤテに蹴りを入れたアテネの執事、マキナだ

「えっと…夜分遅くに申し訳ないですが…天王洲さんは…」

「いるよ。お前が来たら通せとも言われた」

しかしマキナは警戒を全く解こうとしない

むしろ敵意がにじみ出ている気がする

「けど、お前は何者だ」

「え？」

マキナはじゃり、と地面を歩く

「昨日からアテネが悲しい顔をしている。…話も全然聞いてくれない」

言った瞬間

マキナが蹴りを放ってきた

「!!!」

ハヤテはなんとかその脚撃を回避して距離を取る

「な、何するんですか!？」

「お前が近づくとアテネは悲しい顔をする。それはきつとお前がアテネをいじめているからだ。だから…」

マキナは再び距離を詰め

「アテネをいじめるヤツは…! 絶対に許さない!!」

再度蹴りを打つ

先ほどや先日とはまた違うその蹴りは

ガシィ！！ という音に止められた

「なに！？」

その音はハヤテがマキナの蹴りを受け止めた音だ

「それでも僕は…彼女に話があるんです！！」

ギリギリと蹴りを止めながらハヤテは言った

その目にぶれなどなく、淀みもなかった

「ぐ…、離せっ！」

がっ、と強引にハヤテの手を払いのけ、距離を取りマキナは再びハヤテを睨む

タイミングを見計らってハヤテはアテネに会わせてくれるよう説得を試みる

「とにかく、こんな事不毛です。彼女に、会わせてくれませんか？」

しかし

「……。いやだー！」

返ってきたのはそんな拒絶の言葉

「な…！？　なんでですか…！」

「だって…、だってお前も、アテネをいじめる気だろ」

「…は？」

いじめるとはどういう事だろうか

ハヤテはただアテネと話し合うために来たつもりだった

そんなハヤテの胸中を知らずにマキナは続ける

「アテネはずっと戦ってきた。アテネのお父さんとお母さんのお金を狙う悪いヤツらと」

マキナは続ける

「アテネに近づいてくるヤツらは皆アテネをいじめる敵だ。アテネを殺してお金を奪おうとする悪いヤツらだ。誰もアテネを守ってくれない、だからアテネは誰にも頼らずただ強くなった。人を避け、信用せず、心も体も鋼みたいに固くして。お父さんとお母さんの残してくれたものを守るために…！」

なのに、と言葉を区切ってハヤテを睨む力をいっそう強くする

「そんなアテネがお前と会っただけで動揺してる。顔には出さないけど苦しんでいる。…だからお前は通さない。だからお前は」

目の前からマキナが消えた

「!？」

「ここで死ね!!」

背後

その声が聞こえたから避けられたようなものだろう

ハヤテが跳躍して回避した次の瞬間、先ほどまで普通に立っていた柱が二つに砕け散った

「なっ…!？」

先ほどとは桁違いの威力を誇るマキナの蹴り

あんなものを喰らったら命が危ない

しかし心配などしてる暇などない

崩れ行く柱をバックにマキナが近づいてくる

「今すぐここを立ち去って、二度とアテネに近づくな。そうすれば

命だけは助けてやる。しかし進むというなら仕方がない。ここで死ぬ」

「死ねって…、それじゃあ貴方、殺人犯になっちゃいますよ」

無論殺人犯にさせる気も、死ぬ気もなかった

これはなんとなく言った言葉だった

だがマキナの口から妙な言葉を聞いた

「ならないさ。「人が人を殺せば殺人」だが、「人じゃないモノが人を殺しても単なる事故」だ」

「…え？」

先の発言で完璧に油断した

気づいた時にはハヤテの腹部にマキナの強烈な膝蹴りが叩き込まれた

「がっ は…!？」

「アテネをいじめるヤツは」

右足に妙な光が見えた

そして本能で悟る

これは、マズい……!!

「全部いなくなればいいんだぁーっ!!」

連続蹴りがハヤテに炸裂する…

いや、だが衝撃が来ない

「…マキナ。アテネに言われたのは客人を殺せ、だったのか」

一人の青年がマキナの蹴りを片手で受け止めていたからだ

その青年は黒いコートに身を包んだ男だ

「お前は……!!」

「イギリス凄教「最大主教（アークビショップ）」が側近。クロスはアラストルだ。名前は忘れてても、この面は忘れまいよ？」

クロスと名乗った青年は手を離しながらニイ、と笑いマキナに告げる

「邪魔…、するなあ!!」

クロスの手が離れた瞬間マキナの蹴りがまた飛んだ

だがわかっていたのかクロスはハヤテの首根っこを掴んでマキナの背後に跳躍し、着地する

「…やれやれ。主に忠義を尽くすのはいいが…、やりすぎると嫌われるぜ」

「うるさいッ！！」

再びギョオオ！！ と風を巻き込みながらクロスに向かって蹴りを穿つ

それを悠然に回避しながら距離を取り何故か携帯を取り出した

(え、何故携帯!?)

ハヤテはそんな事を思ってるとはつゆ知らず

「仕方ない。ちょっと遊んでやるよ」

クロスは携帯に>555<と入力する

>Standing by<

そんな電子音声は携帯から聞こえる

そして携帯を折り畳み、胸の前に持ってくる

「変身」

そのままその携帯を縦にベルトにセットし左側に倒す

>Complete<

朱い光が一瞬この暗闇を照らし出す

「なに…!？」

「…えっ…?」

また、ライダー…?

ハヤテはもとより、マキナも驚きを隠せなかった

ファイズへと姿を変えたクロスは軽く右手をスナップさせる

「…っし。来いよ」

ファイズは指先でマキナを挑発する

「…後悔するなよ」

言ったのとマキナが消えるのは同時だった

「誰が」

その言葉を言った時にはマキナはファイズの背後にいた

「…じゃああああ…!」

ヒュン!! と風さえも裂くような蹴りがファイズに炸裂する

だがファイズは両手でその一撃を受け止め、マキナに蹴りを返す

「くっそ…！」

一撃貰ったマキナは一度体制を立て直し、また連続で蹴りを放っていく

もう目で追えない俊足の連撃

しかしファイズも負けてはいない

その全ての連撃を避けるか、あるいは捌くかして避けていくのだ

「さすが。やるじゃないか！」

そしてこれから面白くなるであろうという時に

「そこまで」

有無を言わさぬ絶対的重圧を纏ったその一言が全てを支配した

「全く…。貴方には彼を止めたる事を言うたのに、何故に熱くなるうとるのクロス」

日笠を指した金髪碧眼の女性が優雅に歩いて来ている

「クロス。貴方にしてみるならば、これは失態の事よ」

ファイズはベルト（ファイズギア」を腰から取り外した
すると変身が解除され軽い笑みを浮かべたクロスが現れる

「いや、悪かったローラ。珍しく熱くなっちゃったよ」

すぐに謝罪するクロスに「わかればよろしのよ」と言いながら今度
はマキナに向き直る

「はい、貴方も」

「…、」

マキナはムスツとした表情で黙ったままだ

「ああもう。仕方なし…。マキナとやら、アテネからこんな預か
りしにつきなのだけねど」

金髪碧眼の女性「ローラ＝スチュアート」は一枚の紙を取り出した

お札だ

「『これではんばーがーになるとやらを好きだけ買え』との事よ」

「え…?」

ぱし、と受け取ってジー…と眺めた

「行ってきます」

キラーンと擬音が出そうな感じでピューと走り去ってしまった

「…。素直なのかしら」

「…さあな。さて、綾崎ハヤテ」

「は、はい」

不意に呼ばれてびっくりした

「貴方の要求はもう理解しとるわ。クロス、案内を」

「了解。綾崎ハヤテ、こっちだ」

「わ、わかりました…」

ここまで来たらヤケだ

ハヤテは決意を決めてクロスの後をついていく

天王洲アテネに

アーたんに会う為に

ハヤテ…

やはり私が覚えてることに気づいていりのね

…私が隠れて姿を眩ませたら帰ってきてくれるかしら…

いや、だが石はどうする？

石は必ず必要だ、庭城への道を開くために…

だがそれを持つハヤテから奪ったらハヤテはどうなる？

簡単だ、三千院家にはいらなくなり、手に入れた平和な暮らしは消える

あの両親に一億五千万で売られそうになったことも人づてで耳に入ってきた

この十年あの両親のせいで苦しい生活を強いられてきた事も

あの時もっと冷静になってればと思うと胸が痛い

だからいつか私が捜しだして、今度こそハヤテを助けてみせると決めた

だがその願いも叶わなかった

理事長である私のところに送られてきた書類の写真に私が捜していたあの顔が写っていた

もう誰かが救っていた後だったのだ

それならそれで良かった

今の貴方が幸せなら、それで

だからずっと見ていた

私でない人らに救われて、私でない人らと笑う貴方を

ずっと遠くで

ひどい肉親の呪縛から放たれて、やっと手に入れたハヤテの平穩

私が石を奪えばまたその平穩を破壊してしまう

私のせいで

けど…もしそれでハヤテが路頭に迷えば、今度こそ私が…、

……………、

考えて自分がなんと醜いものかと罵倒する

ああ、なんと醜いのだ私は…!!

自分から追い出しておきながら！

十年放っておいておきながら！

それでもまだ好きでいて欲しいだなんて！

見られたくない

会いたくない

こんな、私は

貴方の平穩も奪いたくなんてない

だから会わずに帰って、ずっと他人でいさせて！

ハヤテ……！！

「アーたん？」

ああ…

出会って、しまった…

神はなんでこういう時だけ、非情なのだろう

「アーたん？」

やっと会えた

会ったら聞こうと思っていた質問をハヤテはぶつける

「…あの、僕のこと」

アテネを見上げ、言葉を紡ぐ

「覚えているよね？ アーたん…」

「…、」

ハヤテとアテネ

十年越しに出会った二人

今、ここに

チャプター13 (後書き)

アラタ「どうも。今回名前すら出てきてないアラタです」

当麻「ていうかもう蚊帳の外だよなオレたち」

アラタ「まあ大丈夫だよ。次回はやっとな俺も再び変身」

当麻「どんな感じになっていくんだろうな…てかこんな低いテンションで大丈夫か？」

アラタ「ちょっと綾崎がテンション低いからな。こっちも上げては
いれないよ。…ではまた次回っ！」

チャプター14 (前書き)

君に想う

チャプター14

>!!!<

夜寝てる時に、モモタロスがびくつとした

海音のペンダントからSD化のモモタロスが這い出て海音の頬をべちべち叩く

「（海音、起きろ。起きろって!）」

近くで千桜が寝ているのであまり大きな声が出せないため、小声だ

「…にゅ…、なあにモモタロス…」

目をこすりながら海音が起きる

「（イメージみてえな匂いだ!）」

イメージ「みたい」?

どういう事だそれは

「イメージみたいって…、モモタロスにしては珍しく曖昧だね。なんで?」

そう聞くとSDモモタロスは腕を組んで頭を掻く

「（それがよお…なんか断定できねえんだ）」

「断定できない?」

「(ああ、イマジンか、と思いきや匂いが変わるし、違うかと思ったらまたイマジンみてえな…。とにかく曖昧なんだよ)」

「…むう…そんなケースは珍しいな…。…よし、とにかく行ってみよう」

海音がそう言つとSDモモタロスは待つてましたと言わんばかりに顔をあげる

「そこなくつちな。行くぜ海音」

SDモモタロスが海音にダイブして憑依する

一度ガクつ、と頭をうなだれる

と、いきなりガバツと顔をあげる

海音の髪には赤いメツシュが入り、瞳の色はカラーコンタクトみたいに真っ赤になっている

「行くぜ、海音」

(うん。皆も大丈夫?)

>大丈夫。いつでもいけるよ<

>ワイもや!<

>ボクもー!!!<

海音の首にかけてある四色の宝石が光る

「っし、行くか」

(千桜さんが寝てるから、静かにね)

「わあってるよ」

モモタロスが憑依した海音はゆっくりと布団から這い出て、音を立てないようにその部屋を出た

それを椅子に座りながら薄目を開けて見ていたのは他でもない士だ

「...。やれやれ、俺も動いた方がいいかな」

ゆっくりと立ち上がった門矢士は軽く身嗜みを整えて、海音を追って部屋を出た

(ハヤテくんは、想いを告げる事ができたかしら...)

ヒナギクは浴槽に浸かりながら帰ってきた時の事を思い出していた

「ハヤテくんとのディナー、どうだった？」

部屋に戻る前、西沢がヒナギクにそう聞いた

「…え？」

言葉に詰まる

あんなことを素直に言うワケにもいかない、かといって話さないワケにもいかない

「えつと…その…」

その言葉に詰まった様子を見て、西沢は何か言いづらそうにしてるのを感じた西沢は

「えゝ！？ も、もしかして二人付き合うことになっちゃったのかな？」

「や！ 違う！ 違うの！」

ヒナギクは慌てて両手を振って否定する

やがてヒナギクは扉に手をかけて俯いて口を開く

「想いを伝える事は、できなかつたわ」

「…え？」

どこか暗いその雰囲気、西沢は動揺した

何か、あったのかと思わせるそんな空気に

「あ、そ…そうなんだ…」

なんて言葉をかけていいのかわからずに西沢はそんな言葉を使った

「ホント、ごめんなさい…、意気地がなくて…」

「そんな、私に謝るような事じゃないんじゃないかな？」

「…ねえ、歩」

「な、なにかな？ ヒナさん」

そしてヒナギクは西沢に顔を向けて言う

「何があったかは…、気持ちの整理がついてからで、いい？」

その表情は今にも泣いてしまいそうな、そんな顔だった

ハヤテの気持ちを後押ししたのは他でもない、自分自身だ

(けど、これで良かったのよね、これで…)

お風呂に浸かりながらヒナギクは思う

「十年よ、十年…。十年も想ってる人とようやく再会できたんですもの…」

だったら、その想いは報われなくちゃいけない

そう思うと、涙が徐々に滲み出てくる

「…っ…!!」

お湯を両手ですくい顔を洗う

これで涙はごまかせるハズだ

…これではいけない

早く体を洗って今日は休もう

そう考えたヒナギクは肩まで浴槽に浸かった

と、その時だ

「御坂さーん」

扉を開けて入ってきた一人の女性

神那賀雫だ

「神那賀、さん…なんでここに」

「…桂さんが戻ってきた時、なんだか元気なかったから…」

神那賀は体に巻いていたタオルは取る

「ちょ！？ 神那賀さん！？」

神那賀はヒナギクの静止を聞かずに浴槽に浸かる

そして

「スキンシップっ」

ヒナギクに抱きついた

「わわ！？ ちょっと、神那賀さん…！？」

「わー…桂さんって肌スベスベ…。羨ましいなあ…」

「ひゃあ！？ なぞらないでっ、あ、んっ…」

しばらくそんなやりとりの後

「…ちょっとは笑顔になったでしょ？」

「…え？」

神那賀がそんな事を言ってきた

「だって、もう最後なんですよ。…最後くらい、笑っていきましょ
う」

言って神那賀は笑顔を見せる

「ね」

その笑顔に、どことなく楽になったヒナギクだった

「僕のこと、覚えてるよね？ アーたん」

アテネは一度黙ったあとひらりとドレスを翻し

「もう、その名前で呼ぶなと言ったでしょう、ハヤテ」

天王洲アテネはハヤテに向き直った

「十年ぶりね。あれから貴方、色々苦労したみたいだけど」

アテネはいきなりそんな核心を突くような事を言ってきた

ハヤテは俯き

「……うん。結局あの時正しかったのは君で、間違ってたのは僕だ。君の言った通り、あの親はあっさり僕を捨てちゃったよ。一億五千万の借金を押し付けて……」

「……………、そう」

「で、でも今は平気なんだ！ どうしようもなかった去年のクリスマススイブの日に、借金を肩代わりしてくれた人がいてね」

そう話すハヤテの表情はとてもイキイキしている

…苛立たしいくらいに

「三千院ナギお嬢さま。今の僕の…ご主人さま」

ハヤテは続ける

「僕、執事をやってるんだよ？ 三千院家のお屋敷で」

ハヤテが満面の笑顔を浮かべる

かつて自分と一緒にいた時もあんな笑顔を見せた事があった

だが今あの笑顔は、自分ではない人物のおかげで浮かべている

「…ハヤテ」

「なに？」

「今の生活は…楽しい？」

そんな事をアテネは聞いた

「も、もちろん！ とつても楽しいよ！ 君と別れてからの十年は本当に辛くて、何度も何度も死にそうになったり死にたくなったりしたけれど…」

ハヤテ自身に悪意はなかったらう

だが無邪気ゆえのその言葉が心がズキリとした

「けどナギお嬢さまに助けをいただいたおかげで、今はホント幸せ。全部ナギお嬢さまのおかげだよ」

純真な笑顔

全部ナギお嬢さまのおかげ

ぜんぶ、ナギお嬢さまの、おかげ

ゼンプ、ナギオジョウサマノ、オカゲ…

ドクン!!

痛みが走る

「う…!!」

激痛にアテネは両手で頭を抑えてうずくまった

「ア―たん!？」

のっぴきならないその行動に危機感を感じたハヤテは駆け寄ろうとするが

「来るな!!」

アテネが一喝した

「!?!? アーたん…!?!?」

「来るな、ハヤテ…来るな…!?!?」

体は震え汗もかいている

その表情は苦しそうにしていた

「私は貴方を不幸にするしかできないから…! 今も昔も、貴方を助けてあげることができないから…!?!?」

ドクン! と痛みが強くなる

「そんな事ないよアーたん…、だって覚えてるでしょ? 僕は君にたくさん教えてもらって…助けてもらって…」

ドクンっ!?!

「そして今、お前から「王玉」を奪おうとしている」

「え?」

どついう事、と聞く暇もなかった

何もなかった中空からたくさんの剣が雨のごとく降り注いだからだ

「うわぁ!?!」

間一髪ハヤテは右に飛び退いてその剣を回避しアテネの名を叫ぶ

「あつ…ア…たん!?!」

「ほう…いい反応だ。…それと」

アテネは一つの柱に視線を向けると

「いい加減に…、出てきたらどうだ」

その一本に集中的に剣の雨を放つ

バガアン!! と柱は瓦解し周囲に崩れ落ちていく

「…隠れ蓑ごと攻撃するかよ」

その粉塵の中から歩いて来たのは白いスーツにソフト帽が特徴的な人物

「鏡祢さんっ!?!」

「よう綾崎。なんだかヤバい事になってんな」

帽子を右手で軽く抑えながらアラタが歩いてくる

「いえ…、そうではなく…!! なんで、鏡祢さんがここに…!?!」

最もらしい疑問をぶつける

「いや、昨日からお前の様子がおかしかったからさ。なんかヤバい事に巻き込まれてんのかなって深読みして、尾行してたらこれだ」

尾行…？

いつの間にそんな事しているのだろうか

ハヤテは三千院家の執事をしている

ゆえに常日頃ナギが狙われる可能性を考慮しなければならない

そのため気配には割と敏感なのだが…

(僕が全く、気配を感じなかった!?)

油断ならない

かなりの手練れなのだ

「もういいか」

そんな談笑が区切りをついた瞬間、再び剣の雨が降り注ぐ

アラタとハヤテは左右それぞれに移動して回避

「石がいる…。庭城への道を開くために、石が…!!」

アテネの様子がおかしい

「お前の持つその「王玉」が!!」

剣の雨は止まることなく降り注ぐ

そしてアラタは一つの単語に反応した

(王玉!?)

剣を回避しながらハヤテを見た

自分が依頼された仕事はそれの破壊だ

それが目の前にあつたなんて…

「やめてよアーたん!! なんてこんな事!!」

「なんで? なら石を渡せばいい。ただで渡すのがイヤならば、五億でも十億でも何億でも」

アテネはパシッと扇子を閉じてハヤテを睨む

「好きなだけくれてやる!!」

再び降り注ぐ剣の雨

ハヤテはその中から一本掴み取り残りの剣を弾き飛ばす

「お金の問題じゃなくて!! これはお嬢さまの大切な石なんだ!

「！」

ハヤテは持った剣を放り捨てアテネを見る

「どうしたのさアーたん！！ やめてよこんなの！！」

「綾崎！ 立ち止まるな、串刺されたいのか！」

アラタの叫びも聞かずハヤテは声をあげる

「僕の事、わかるんでしょ！？ 覚えてるんでしょ！？」

「ああ…、覚えているよ」

様子が違う

ハヤテの知ってるアテネの面影はもう、目の前の彼女にはなかった

「あの時、殺しそびれた私の執事だ！！」

言った直後

彼女から何倍もある大きさの骨の腕が具現化した

「な…！？」

アラタとハヤテは驚愕した

しかし言葉を出すより早くその骨腕が繰り出された

なんとか避けはしたものの、その一撃は凄まじく、付近にあった柱を粉々してしまった

あんなのをマトモに喰らったらひとたまりもない

「渡しは、しない」

ふとそんな声が耳に入ってきた

「石も、力も…!!」

石、とはハヤテが持つ王玉の事が、とアラタは推測する

だが力とはなんだ？

そればかりはどうもわからない

「城の全ては…、私のものだあアアアア!!」

力とは王玉がもたらしてくれる力だろうか

だが力の正体は、一体…

「鏡祢さん!!」

ハヤテの声でアラタは現実に戻された

戻った時には骨腕が眼前に迫ってきていた

(ヤッベ…!?)

完全に出遅れた

ダメージを覚悟し義手である「虚像幻想殺し(イメージブレイカーもどき)」を突き出す

その時だった

>FINALATTACKRIDE DA・DA・DA・DACA
DE<

>fullcharge<

一つのビームのような波動と、剣のような赤い刀身がその骨腕を攻撃し、数枚のお札がハヤテとアラタを守った

「な、なんだ…?」

アラタが戸惑いの声をあげるのもつかの間に、粉塵が収まっていく

「…一応、名前くらいは聞いておこうかしら」

アテネが問うた

「通りすがりの、ゴーストスイーパーです」

「覚えておきや?」

札を構えた鷺ノ宮伊澄と、短髪のショートカットの女の子がいた

「伊澄さん!? 咲夜さん!?!」

そしてその隣

「ふっふっくん…。俺、参上!!!」

「ま、こっちも通りすぎりだ。覚えなくていい」

桃が割れたような仮面のライダーと、バーコードみたいな仮面のライダー

それはディケイドと電王のタッグだ

二つの通りすがりが、アテネの前に立ちはだかった

チャプター14（後書き）

アラタ「アラタと!!！」

海音「か、海音の」

『執事通信』!!』

アラタ「今作品やっと変身したね、皇さん」

海音「うん。いやー…待ったかいました」

アラタ「けど変身までの過程は全カットされたね」

海音「…いいいやい、きつとラストバトルの時は変身させてもらえるわ…」

アラタ「…海音くんがいじけてしまったので、こんな中途半端な感じで予告いきましよう」

ハヤテ「次回は初っぱなバトルから始まります!」

アラタ「どんな展開になるか…」

ハヤテ「次回も、この番組につ!!！」

アラタ「コンバインっ!!！」

「ハヤテ」…もうわかんないです」

チャプター15 (前書き)

圧倒的な力の差

チャプター15

「海音さんに、咲夜さん！？ 伊澄さんも、どうしてここに！？」

ハヤテが当然の疑問を口にする

アラタは戸惑っていたのだが

「んー、それはな」

それに咲夜は軽い笑み交じりで答えようとするが

「おいおかつぱちゃん。そんな説明後にしな」

「なあ！？ 誰がおかつぱちゃんやあー！！」

言われた咲夜はぷりぷり怒るがデイケイドは無視し

「海音、ロングちゃん構えろ。アイツは手を引く気はないぜ」

「わあてるよ…！！」

「承知しています」

電王SFはデンガッシャーをソードモードにして突きつけて

伊澄は着物の袖から数枚のお札を取り出して身構える

「…どこの誰かは知らないけど、邪魔よ！！」

骨腕が手を振り上げる

すると

> ENERGY <

> HOPPER <

> MAGMA <

電子音声が鳴り響き、何も無い中空から三体のドーパントが現れる

「あれは、ドーパント!？」

アラタは驚きを隠せない

元来ドーパントとは人間にガイアメモリを差し込んで肉体を変えた者を指す

だが今回のケースは違う

何もない宙から突然ガイアメモリ特有の電子音声が鳴り、いきなり現れたのだ

「なんだかよくわかんねえけど…!」

アラタは左手で一度帽子を外し、ロストドライバーを腰に巻きつけて懐からスカルメモリを取り、スイッチを押す

> SKULL <

「変身！」

ドライバーに差し込んで手慣れた仕草で開く

>SKULL<

風が巻き起こりアラタの体を仮面ライダースカルへ変える

スカルは再び左手に持った帽子を被り直し、戦線に加わる

「鷲ノ宮は二人を守っててくれ。アイツらは俺たちが相手してやる」
デイケイドの言葉に伊澄は頷いて、ハヤテ、咲夜を守るように結界を張った

「さて、行くぞお前ら」

「仕切ってんなよ！」

何故かリーダー気取りのデイケイドに電王SFが文句を言いながら、怪人の群れに突入していく

「…、やれやれ」

苦笑するデイケイドにスカルがスカルマグナムを構えながら

「我々も行きますか」

顔を動かして促す

「そうだな…、行くか」

デイクイドはライドブッカーをソードモードに切り替えて一気に駆け出す

「っし…、俺も行くか!」

スカルもマグナムを乱射しながら突撃した

電王SFはデンガツシャー片手に突っ走る

「行くぜ行くぜ行くぜーっ!」

もはや口癖か、と思うくらいに普通な言葉を連呼し、相手、ホツパードーパントに斬りつけた

一撃目でホツパーが軽くのけぞった、と感じた途端に腹に蹴りを入れる

電王SF、つまりモモタロスの戦い方はデンガツシャーソードモードを用いての、ノーガード戦法

しかしアックスフォームより硬くはないので、危ない時は素直に避けるのがモモタロスだ

「オラッ!」

ガギン! という音が響く

これは楽勝か、と電王SFが考えたとき

「ハア！」

ホッパーがジャンプした

一飛び何メートルかわからない程の大跳躍

「跳んだあ!？」

電王SFがびっくりしていると、ホッパーが急降下して蹴りつけてきた

「いで!！」

蹴りは仮面、つまり顔面にクリーンヒットし、思わず後ろに下がって顔を押しさえる

「痛えな…、このやろ!！」

ブン! とデンガッシャーを振るうが空振り

先ほどまでホッパーがいた場所にホッパーがいない

「なに…、あんにやろ、どこいきやがった!？」

ホッパーメモリに宿された記憶は跳躍力と脚力

わかりやすく例えるならバツタだ

(モモタロス、後ろ！)

「なに！？ どわあ！！」

海音に指摘され、振り向いた時には遅かった

ホッパーの蹴りが電王SFに直撃したのだ

「アイツ、どこから攻撃してきやがった！」

(柱だよ、モモタロス)

「柱あ？」

(ほら、なんかあの敵、バツタに見えない？ 勘が当たってるなら、柱に飛び乗って、僕たちを見てたのかも)

「な、なるほど…！ て、ああ！？ 言ってる傍からまたいねえし！！」

ホッパーはまたその驚異的跳躍力でどこかの柱に隠れてしまった

これでは手の出しようがない

「…、いや、ものすごく集中すりやできっかも」

そう言うや否やライダーパスを取り出して

> fullicharge <

ベルトにセタタッチし、カッコ良く投げ捨てようとして

(待ってモモタロス、ちゃんと仕舞って)

「…やっぱりダメか」

(当たり前でしょ。それで痛い目見たの忘れたの?)

「わかったよお…、…」

軽い会話をするとう電王SFは集中する

(…モモタロス?)

デンガツシャーの刀身に、フリーエネルギーがチャージされていく

「…むむ…!」

場に静かな時が流れる

静寂

その単語が支配した

その時

「シヤアアアア!」

ホッパードーパントの鳴き声だ

電王SFが動かなくなったのを好機と見たのか、柱から跳躍し、再び蹴りつけようと身を晒したのだ

だがそれがホッパーの油断

「そこかああああ!!」

「!!」

電王SFがいきなりこちらを向いて手を風いだ

するとホッパーに衝撃が疾る

斬られた

相手との距離はまだある

斬られる要素などどこにもない

いや、よく見ると電王SFが持っているデンガツシャーソードモドの刀身がない

つまり自分は跳んできた刀身に斬られたのだ

「俺の必殺技あ!! 居合い斬りバージョンツ!!」

そのまま電王SFが縦に刀身のないデンガツシャーを振り抜いた

直後ザン!! と自分を斬る音が聞こえて、ホッパードーパントは

爆散した

(…どのへんが居合い斬り?)

「細かい事は気にすんなっ」

戻ってきた刀身が再びデンガツシャーにがしゃん、と連結する

「何はともあれ…、決まったぜ！」

スカルとマグマドーパントはお互い構えたまま睨み合う

一触即発

この二人にピッタリな言葉だ

「…、」

「」

先に動いたのは

「…!!」

痺れを切らしたマグマドーパントだ

体から炎をくすぶらせ、マグマの記憶を宿したドーパントがスカルに襲いかかる

対してスカルは

「ハッ！」

あくまで冷静に左側のホルスターから、スカルマグナムを抜き放ち、早撃ちのように射撃する

ドドド！ と音を吹きながら放たれた弾丸はマグマドーパントに連続でヒットし体力を奪う

そのままスカルは一気に距離を詰め寄ってロストドライバー背部にセットしてあるスカルエッジというナイフデバイスでマグマドーパントを斬りつける

ガキン！ と火花が飛び散りそのまま回し蹴りを繰り出してマグマドーパントを吹き飛ばして距離を離す

吹き飛んだマグマは地面を転がりながら体制を立て直し再び体から炎を立ちのぼらせる

(…炎の燃え方が違う、まるで体全体に纏うみたいに…)
と、次の瞬間超高熱のマグマ弾を放ってきたのだ

絶え間ない連弾にスカルは慌てて柱に隠れるが相手はそんなのお構いなしに撃ちまくってくる

はっきり言ってジリ貧だ、ナンセンスだ

これ以上戦いを先延ばす必要などない

一気に懐に潜り込んで

(ヤツを斬る！)

そう思考が固まった途端スカルの動きは早かった

崩壊する柱を転々とし、別の柱に移りある程度マグマ弾を耐え、隙をついて飛び出した

仮面の中の瞳を爛らんとさせながら

飛び出したのを好機とみたマグマドーナントはここぞと言わないばかりに灼熱のマグマ弾を連射する

だが

ザン！！ という羽音と共にマグマ弾が切り裂かれ弾け飛んだ

それがスカルの、アラタの能力、「イーウルアイズ直死魔眼」

その瞳で視えた「死の線」、「死の点」を突いたりなぞる事で、対象を犯こゝろす悪魔の眼

しかしアラタの魔眼は弱い上にアラタ自身が慣れていないため、余力は強くないが、弾や結界くらいなら問題なく犯こゝろせる

全神経を死の線等を見る事に集中すれば人間だつて犯せるが、やる
うとは思わない

「そこだ！」

一瞬途切れた隙を突きスカルマグナムを放つてマグマの動きを止める

「よっし、フィニッシュだ」

スカルはマグナムの銃身を一度傾けてマキシナムスロットを露出さ
せる

そしてドライバーからスカルメモリを一度取り外し、スカルマグナ
ムのマキシナムスロットにセットし、銃身を戻す

>SKULL MAXIMUM DRIVE<

電子音声が響き渡り、スカルはマグナムをマグマドーパントの方に
向けてスカルは呟く

「スカルパニツシャー……」

引き金を、引く

ドゥッ！！ という音が四度ほど聞こえ紫色の光弾がマグマドーパ
ントを捉え、直撃した

マグマドーパントは叫ぶ間もなく、爆散し、周囲には柱の瓦礫が残
っただけ

「…ふう」

スカルは軽く息を吐き、ホルスターへマグナムを戻した

ディケイドは軽く手をパンパンと払いながらエナジードーパントと組み合う

「おっと、なかなかパワーはあるじゃねえかつ、…のわ!？」

組み合いに負け投げ飛ばされたディケイドは地面を転がりながら、エナジーを見る

と、エナジーは左手に備えられたレールガンでディケイドに撃ち込まれた

「おわ!！」

間一髪ディケイドは体を転がってそのレールガンを回避する

「…とと…、仕方ねえ、ドーパントには、専門家だ!」

ディケイドは立ち上がりライドブッカーから一枚のカードを取り出して、ディケイドライバーを開き

「変身!」

ディケイドライバーにセットして、再度閉じる

> K A M E N R A I D W ! <

軽快な音楽と風が巻き起こりディケイドの姿を変える

ディケイドライバーはそのままに、姿形は仮面ライダーダブルとなっていたのだ

それが仮面ライダーディケイドの特性

他の仮面ライダーになれる事

「さあて、罪を数えてもらおうか」

ディケイドダブルはライドブッカーをソードモードに展開させて、その刃を左手で撫でる

ここからがディケイドの反撃だ

エナジーは左手のレールガンを放ちながらディケイドダブルへ接近し、格闘戦へと持ち込もうとする

だがそれはディケイドダブルも望む事だ

放たれるレールガンを回避しながら、同じように接近して、ライドブッカーソードで斬る

そのまま事態を優勢に持つていくため連続でとにかく斬る

一通り斬り捨てて、ディケイドダブルはまたディケイドへと戻り、またカードを取る

「決めるか…！」

再び開き、カードを入れてドライバーを閉じる

>FINALATTACKRAID DE・DE・DE・DECE
DE<

その電子音声が鳴り終わると同時にデイケイドの前に何枚ものデイケイドのマークが描かれたカードが現れる

デイケイドは手を軽くパンパンと再び叩いたあと

「はあ！」

跳躍

デイケイドに合わせてマークのカードも動きデイケイドの前に行き

「たあああああああ！！！」

デイケイドがライダーキックの姿勢を取りそのカードを突き抜ける

突き抜ける度に威力が上がり、渾身の蹴りをエナジーに解き放つ

それがデイケイドの必殺技「デイメンションキック」だ

デイメンションキックをもろに受け、エナジーは後方に吹っ飛んだ

そして、爆散した

「…まあこんなもんか」

デイケイドは爆発した所を一瞥すると、アテネに視線をやった

それらの戦いを伊澄の結界越しに眺めていたハヤテと咲夜

「はー…ライダーっちゆうんわすごいなあ…あっさり倒してもうた
で」

「ええ、間近で見るのは初めてだけど、あれほどとは思わなかった
わ」

「…伊澄さん、あれは、悪霊なんですか？」

節目がちにハヤテは聞いた

伊澄は一度結界を解き着物の袖からお札を数枚取り出しながら

「あれは悪霊ではありません、あれは英霊…」

「英霊…？」

英霊

神話を調べれば名前くらいは知ることが出来る神格を持つ太古の魂

「つまり、その辺の魑魅魍魎とは比較にならないヤツって訳だな」

いつの間にか隣に集まっていた三人のライダーの一人、電王SFがその言葉を補正する

「けどどうしてそんなものが彼女に!？」

ハヤテは信じられなかった

子供るときあれほど力を持っていたのに…

「理由はわかりません。ですが、本来あんなものに取り憑かれるような力の持ち主ではありません。…恐らくは、よほど悲しくて、深い絶望があったのでしょう」

「…、え？」

深い絶望

そんな言葉を聞いたハヤテは凍りついた

「そういうのは大抵心の「みぞ」に入り込むからな。…つまり死にたくなるような出来事があったんだな。力があっても耐えられない深い悲しみがよ」

伊澄の言葉を引き継いでデイケイドが言った

だがハヤテは一人黙考していた

耐えられない深い悲しみ

そして、絶望

じゃあ、あれは、僕の…

「人の家をあまり壊さないでくれる？」

そんなハヤテを知らずにアテネは鬱陶しそうに呟いた

「そっちから仕掛けてきたくせに、何様だアンタ」

その問いに敵意を微塵も隠さずにマグナムを突きつけるスカル

それを手で制止し伊澄が前に出る

「こちらとしても壊すのは不本意です。ですから、穏便に話し合いたいと考えているのですが」

「そうね、だけど一体なんのお話かしら？」

冷笑を隠さずにアテネが聞き返す

対して伊澄は着物の袖で口元を隠しながらアテネに問う

「神様が、棲むという城の話」

アテネが微笑う

「もしくは、神様になりそこねた王様の話」

「話し合う余地はないわね」

アテネの宣言は早かった

バツ！！ とアテネが左手をあげる

それに釣られるように権限された骨の腕も同じように腕をあげ伊澄たちに向けて襲いかかった

同様に伊澄の対応速度も早かった

もしくはもうこうなることはわかりきっていたのか伊澄は一気に数十枚のお札を取り出して骨の腕に投げつける

お札が骨の腕に着弾するとお札は爆発し、一瞬ではあるが動きが止まった

その隙を見逃さず、伊澄は自分の前方にお札を展開させて力を収束させる

「少々荒っぱいですが」

バリバリと雷のようなエネルギーが伊澄の頭上に集まっていく

「まずその英霊を鎮めてから話をさせていただきます！」

術式・八葉

伊澄はその収束された雷のエネルギーをその腕に一気にぶつけた

「
建御雷神タケミカヅチ！！
」

バズーカをぶち当てたような轟音とおびただしい雷が骨の腕に直撃する

骨の腕は少し動きが止まった、否、全く効いてはいなかった

ごおん！！ と辺りを凧ぎ払うように骨の腕が力を振るう

無傷

あれだけの力をぶつけてもかすり傷はおろか全くのノーリアクション

「いま、何かしたかしら」

あまつさえアテネは微笑ったまま悠然と呟く

「ちょっと伊澄さん！ あれ全然元気やないか！」

凧ぎ払った時に巻き起こった煙にむせながら咲夜が言った

「そんな手え抜かんと、もっと一発ガツーンとかましたれー！」

伊澄の除霊を間近で見ている咲夜はいつも悪霊を一撃で葬り去る伊澄の姿しか見ていなかった

つまりあの骨の腕がピンピンしているのも伊澄が手加減してると思っただ

だ

「いや…、鷲ノ宮さんは全力であの一撃を放ったよ」

スカルがその言葉を否定する

「え、け、けど…」

「こんな場面で手加減なんかしないよ。…つまり、アイツがハンパなく強いって事」

スカルの指摘は当たっていた

その証拠に

(…死の線が視えない)

ああいう霊の類でも神経を集中すれば力の弱いアラタ、つまりスカ

ルでも視える

だがあの骨の腕は本当に全神経を千切れるくらいに集中させて一点を凝視しなければその片鱗すら視えないのだ

「効いて、いない…？ 嘘…！？」

「意外そうね？ くす…もしかして貴女、今まで自分より強い力を持つ者に出会った事がないのかしら？」

アテネの微笑いが、ただ闇に映えるのみ

チャプター16 (前書き)

究極の選択 どちらを選び、どちらを捨てる

チャプター16

「きつと貴女は今まで、その生まれ持った圧倒的な力で相手をねじ伏せてきたのでしょうかけれど」

アテネの声が聞こえる

その冷笑で、変わりないその瞳で伊澄を捉えたままで

「けどその力が、通用しない敵がいるということをし、教えてあげる」
有り得ない

どうして…

こんな事が…

「来なさい、相手になってあげる」

アテネが悠然と言い放つ

『負けるなどある訳がない』

そう言わんばかりの態度で

その態度は鷲ノ宮伊澄のプライドに泥を投げつけるに等しいものだ

(こんな事が、あるわけない　　!!!)

先ほどの出来事を振り払うかのように、伊澄は再び自分の周囲に札を展開する

その枚数は倍以上

また伊澄の頭上に建御雷神タケミカヅチが繰り出される

こんどは、四連

「おお！？ さっきのヤツが四体！？」

ただ純粹に咲夜が驚きの声をあげる

「…ダメだ、数を増やした程度じゃあ」

だがスカルが痛切に呟いた

「なんでや！？ いくらあの骨の腕も、あれ喰らったら…！」

「技の大小じゃない。根本的に彼女では、力が足りないんだ」

「力…やて？」

放たれる轟雷撃を呆然と見守りながら咲夜はスカルを見る

「…確かに、俺から見ても彼女は実力はずば抜けている。けどずば抜けてるが故に、自分より強いものに会った時の対処方が思い付かないんだ」

バオオオ！！ と爆音が轟き渡り、辺りを揺らす

四連の建御雷神タケミカヅチを喰らっても、アテネの権限している骨の腕は傷一つなかった

全くと言っていいほどに

「ワンパターン。…頑固者なのね」

軽く嘆息しながらアテネはあくまで優雅に腕に命じる

グオオ！！ と骨の腕は風を切り、伊澄が立っていた地面を抉った

その衝撃に負け、伊澄の体は宙に舞う

「伊澄さん！！」

それを危険と判断したハヤテは即座に跳躍し、伊澄を受け止める

「は、ハヤテさま…」
受け止められた伊澄は軽く顔を赤くしてチラリとハヤテの顔を覗き見る

「もうやめてよアーたん！　なんでこんな事を…！？」

伊澄を抱えながら悲痛をまじえアテネが訴える

その問いにアテネは至極当たり前といった感じで

「…なんで…？」

当たり前前に答えようとして

「…ぐ…!？」

頭痛がした

そして疑問

「…なんで？」

石だ、石がいる…石が

確かめなくては。探しても見つからなかった

万が一ということもある

そんなのいらない

『いや必要だ　!!!』

もうあんな城にはいらない

『帰らなくては力を取り戻せない　!!!』

力はまだ足りない

『いやいるんだ!!　あれは私のモノだ　!!!』

「とにかく石だ…!　石がいるんだ…!」

ズキズキと痛む頭を抑えながらゆっくりとアテネは立ち上がった
その様子を伊澄は真剣な眼差しで見つめていた

「石がなくては、話にならない…!!」

再びアテネがギラついた目つきでこちらを睨む

「…なるほど、だいたい状況がわかってきました」

伊澄が落ち着いた様子で呟いた

「え…?」

まだわかってない、というかスカルや電王ははっきりいってわかってない

今の呟きはハヤテのものだ

「…一旦退くので、ハヤテさまは咲夜を、ライダーさま達は援護をお願いします」

「で、でも…」

と、ハヤテが訝しんだ時だ

「あらあら、逃げられると思ってるの?」

アテネの声が聞こえてきた

「貴女等程度」の、「実力」で

そんな言葉を投げかけてきた

それは挑発だ

勘に障るそのニュアンスは伊澄のプライドを傷つけるに十分なものだ

「…なら、その身で確かめてみますか…!?!」

伊澄は素早くその袖からお札を取り出し

「あんなわかりやすい挑発に乗るな」

「あうっ」

パソコン、とディケイドが軽く頭を叩いて止める

それから軽く声を抑えて

「（…ここから退くのに、なんか手はあるのか？）」

「（…鷲ノ宮の秘術、「強制転移の法」を使用すれば、ここから脱出するのは可能です。…ですが）」

「（…ですが？）」

「（…使用するには一瞬とはいえ隙ができます。その隙を逃す相手ではありませんから…）」

「（…だいたいわかった。ようは気を逸らせばいいんだな）」

とデイケイドは思い立ったものの

（…どっする）

どうすればこの状況を打破できる？

恐らくファイナルアタックライドはあの骨の腕には通用しないだろう

仮に通用してもすぐに再起動する可能性が高い

（仕方ない…、これを敵に知られるのはちったあ釈然としないが…）

と、デイケイドがケータッチを取り出そうとしたその時だ

> KAMENRAID <

「！！」

電子音声が鳴り響いた

デイケイドとはまた別の電子音声だ

> FAIZU KIBA BUREIDDO <

どこからともなく幾重の残像が重なり、その場に三人の仮面ライダーが現れた

キバ、ブレイド、ファイズだ

「また別のライダー!?!」

スカルは再び身構える

「待て! …こいつらは…」

ライダーを呼び出すなどという芸当ができるのはアイツしかいない

だが今はこのチャンスを生かす事にしよう

「ちょっとくすぐりたいぞ!」

ディケイドはすかさずライドブッカーから三枚のカードを取り出していつぺんにディケイドライダーにセットする>FINALATTACK KRIDE<

>K I · K I · K I · K I B A<

>B U · B U · B U · B U R E I D O<

>F A · F A · F A · F A I Z U<

その電子音が鳴り響き、直後待機していたファイズ、キバ、ブレイドが変形した

ファイズは両手で構えるファイズブラスターへ

キバはその変身する際に現れるキバットをモチーフにしたキバアローへ

ブレイドは自身の武器、ブレイラウザーを模したブレイドブレードへそれぞれ三人のライダーにその変形したライダーウエポンが手渡される

電王SFはキバアロー

ディケイドはファイズブラスター

スカルはブレイドブレード

「な、なんだこれ!？」

スカルは手にしたその巨大な剣に驚愕する

そもそもライダーが変形するなんて見た事がないのだ

「行くぞ二人とも!」

「おうよ!」

「わ、わかった!」

ディケイドは骨の腕に照準を合わせ、電王SFは狙って弓を引き絞る
スカルは力を入れながらブレイドブレードを槍投げのように構える

「俺たちの必殺技あ……！！ スペシャルバージョンッ……！」

電王SFの掛け声と共にその一撃が放たれた

スカルはブレイドブレイドを振り下ろすのではなく、投げつけた

思い切り使い方は間違っているが、何も言わないでおう

キバアローから放たれた矢と、ファイズブラスターの波動が絡み合い、融合し一つの攻撃となってアテネと骨の腕へと襲いかかる

マキナはハンバーガーを購入して帰ってきた

その数は百個だ

お腹いっぱいとはよく言うが破裂するのではなからうか

だが頑張りますと言った時のマツクの店員さんの顔は忘れない

「マキナ、食べるのは後にしなさい」

帰ってきた時マキナが最初に聞いた言葉がそれだ

ふと見ると一本の剣がこちらに迫って来ているではないか

「……じゃあ、奥の手使っていないんだな」

結末は一瞬だった

放たれたライダーの必殺技に蛇のようなものがまとわりついて、それをへし折ったからだ

ブレイドブレードは消滅し、いつの間にかあの六人も消え失せていた

「逃げられちゃったかな」

異形のモノが問いかける

アテネは全く動じず、むしろ笑みを浮かべて言葉を返す

「大丈夫よ。…すぐにまた会えるから」

ドッポーンっ！！

どこかの海に落ちた感覚がした

着水したショックでちよつと口に海水を飲んでしまった

そう、気がついたら海に落ちたのだ

「あばばば！！　ちよ、なんや、あぶ、なんで海やねん！！　あばばぶっ！！」

「とりあえず、脱出出来たわけだ…」

「危なかったね…」

いつの間にか他の二人も変身を解除し海に立っていた

割とこの海は浅く、ちゃんと起立すれば腰までくらいなのだ

ちなみに咲夜はまだ近くであっぱあっぱしているが

「はい…、さすがにこの人数は初めてだったので不安でしたが、上手くいって良かったです」

あぶっあぶっ

「…なるほど」

「感心しないで助けるー!!」

感心したところで咲夜に突っ込まれた

「す、すみません…、浅い海だったのでまさか溺れてるとは…」

「溺れてへんかったらあばあば言うかー!!」 それにいきなり夜の海に落とされても溺れるわあ!!」 ほんで

咲夜はパツと伊澄を見る

他の人が濡れて海の中に立っているのに何故か伊澄だけはイルカに乗っていたのだ

「なんで自分だけイルカに乗っ取んねん!!」

「だって濡れるの嫌なんだもん」

皆嫌だよ濡れるのは

そう言いたい気持ちをアラタは心の中に押し止めた

そしてふと伊澄の変化に気がついた

徐々に髪の色が抜け落ちていく

「て、あれ!?! 鷲ノ宮さん!?! 髪が…!?!」

先ほどまで黒かったその長い髪が真っ白に変色してしまったのだ

「す、すこし力を使いすぎました…、け、けど直に戻りますから!」

伊澄はパタパタと袖を振りながら抗議する

「けど、強敵だったからね。あの人」

「全くだ…、逃げられただけでも良かったと思わねえと」

海音と士も頷きあいながら先ほどの敵を評価する

アラタから見てもあの城内で戦ったアイツはかなり手ごわかった

今回は伊澄やハヤテ、他のライダーがいてくれたからなんとかあったものの…

「ま、じゃあとりあえず…」

と、思考に埋没しようとしていたところで咲夜が周囲に声をかけた

「フロにでも入るか…」

一つの区切りをつけた

アラタと海音、士はハヤテらと一足先にフロから上がった

ライダー同士で軽く話をするためだ

ここは鷲ノ宮家が所持する別荘で、屋敷だ

屋敷の縁側で士は庭に出て立ちながら

海音とアラタは縁側に腰掛けながら

「…あの城での相手、どう思う？」

ぶっきらぼうに士が聞いた

「強敵、ですね…」

何をするでなく、てわすらをして空を見上げながら海音がそれに答える

「…だけど、どこかに悲しみがあつた」

海音が続けてアラタが言った

白いソフト帽を縁側に置きながらただ地面を見下ろす

「何か、例えようのない悲しみが…」

「だけど、なんであんな…、その、歪んだ力を持ってしまったんだろっ」

「そればかりはわかんねえな…」

なんとなく夜空を見ながら土が投げやりに答える

「伊澄さんの話では、あの人はあの骨の英霊と繋がってる…て話…」

海音が躊躇いがちに呟いた

「確かに、あの強さは異常だ。はっきり言って強過ぎる」

「ええ。せめてあの英霊と理事長さんを分離しなくては、何度やっても勝ち目はないでしょう」

土が言い終わると同時にお風呂から上がった伊澄が言った

背後には咲夜とハヤテもいる

ハヤテは執事という職業柄か、お盆に人数分のお茶を乗せて持ってきていた

ていうかいつの間に用意してたんだ

「…白皇でなんとかお見かけした時は、あんな禍々しい気配は感じなかったわ」

「じゃあ、その原因は…?」

アラタが問いかける

あの強さにはなにか原因がある筈だ、とアラタは踏んでいた

「恐らく相当以前から彼女の心の深いところに潜んでいて、それが何かキツカケがあり、その心の乱れの間隙について具現化したと思われます」

「…やっぱりか…」

そのようなことだろうという一つの線は考えていた

人間は心の弱みにつけ込まれるとどうしても精神がやられてしまう

彼女も、その心の弱さに見入られたのだろう

「追い出すにはどうすればいいの?」

海音がハヤテからお茶を受け取って一口すする

そして両手で湯のみを膝の上に置きながら問いかけた

「…追い出すだけならば簡単です」

「…え？」

意外な返答が返ってきた

「いくら英霊と言っても、理事長さんのような強い力の持ち主に取
り憑くのは無理があるんです」

それに、と伊澄が続ける

「心の奥底に何もせず潜むだけならともかく、ああいう融合するか
のように憑くには、何らかの具体的な「合意」が必要です」

「つまり、その「合意」ってのを崩せば、その英霊を引き離せるん
だな」

「あの時のセリフから察すると、「石を手に入れる」が共通の「合
意」。つまり」

「その石を、渡すか、砕くか」

ハヤテの表情が変わった

「合意」つちゆうのを崩さずに追い出す事は出来へんのか？」

「できなくはありません。しかしその場合無理やり引き剥がすことになるので、理事長さんの魂に致命傷を負わせてしまうこととなります」

ハヤテの表情から血の気が引いた

見えるのは、苦悩

「なんや、それなら簡単やんか」

そんなハヤテの内心を知ってか知らずか咲夜がよしてきたという風に
声を出す

「け、けど咲夜さん！！ この石は……」

「どんな宝石かは知らんけど、石を理事長さんに渡して化け物追
出して、その後返してもらたらええんと違っ？」

その言葉を聞いたハヤテはまたハツとする

「これなら石も失わずに英霊も追い出せる。まさに一石二鳥やっ」

そうだ、仮に石を渡してもそれを取り替えせば問題はない

これが最善の策

これならナギもアテネも救える

「ダメだ」「ダメです」

士と伊澄の声が同時に聞こえてきた

『…え』

その戸惑いの声はその場にいた全員のものだ

「あの英霊の最終目標は石の入手。つまり渡す選択は相手に万札を渡すようなもんだ」

「け、けど渡してすぐに取り返せばええやんか、追い出すためにちよつと、みたいな…」

「それで取り返せなかったらどうします」

伊澄の言葉が抉るように突き刺さる

先ほどまで消耗していた反動で白くなっていたその髪も力を取り戻し黒く戻ってきていた

「そんなことは起こり得ない。九十パーセントそんなことにはならないと思ってますが、ゼロではない。ゼロでないなら、その可能性は排除しなければなりません。でないと」

伊澄ははっきりとその言葉を口にする

「世界が、終わる可能性があるのですから」

世界が終わる

いつの間にそんな大それた事になっていたのだとアラタは内心驚いていた

最初は気まぐれで受けた橙子の依頼

その緩んでいた気持ちを改めて引き締める

「ま、いきなりこんな事になっても、壊させてくださいなんて頼めるわけないよな」

「当たり前です土さん。…ねえハヤテくん。今更なんだけど」

海音はハヤテの首にかけてある王玉を見ながら

「それってなんなの？ 三千院さんからもらった、思い出の品とか
躊躇いがちに聞いた

「…いえ、思い出の品とかではなく、この石を、渡したり壊したりすると、お嬢さまが三千院家の遺産を継ぐ権利を失ってしまうんです…！」

「…、」

『は!?!?』

「なるほどな、そういうことやったんかい」

お茶とお茶菓子をつまみながらハヤテの話聞いたご一行

要約すれば、三千院家執事、つまり綾崎ハヤテの所持する王玉を破壊、もしくは奪い二十四時間経過すれば、ナギは三千院家の遺産を相続できなくなる…

こんな感じだろうか

「それやったら、壊したフリとかしてごまかせへんかいな？」

「それは無理よ。本物かどうかなんて理事長さんほどの人なら見間違えるなんありえないわ。眼前で本物を砕くかその残骸を見せない限り納得しないわ」

当然だ

見間違えるくらいの人物なら撤退する必要なんてないのだ

「そつか…じゃあしゃあないな…」

咲夜は自然な手つきで携帯を取り出すとどこかに電話をかけた

「咲夜さん、どこへ？」

「じいちゃんどこ。直接話聞く」

ワンコール、ツーコール、スリーコール

ガチャ、ど電話に出た音がした

「あ、もしもしじいちゃん？ ……………。あ、いやじいちゃんに聞きたいことがあるんけど……。…………。や、ナギの遺産と……、へ？ わかった」

ある程度話した咲夜は自分の携帯をハヤテに渡し

「かわってくれやと」

「え、僕に？」

> お電話かわりました、綾崎ですけど <

「ルールはだいたい把握したな」

電話の向こうにいるハヤテが言う前に三千院帝は口を開いた

電話の向こうで息を呑むのがわかったほどだ

>…ルール？<

「そう、お前が三千院家の執事としてやっていけるかどうかの試験。誰かを犠牲にしても主を守れるかという試験じゃ」

>…!<

「言うておくが相続の条件にもう変更はないぞ。後継者などいくらでもいる。石をお前が失えばナギは三千院家の後継者としての資格を失う」

帝は淡々と続けていく

「あの屋敷にも住めなくなる。三千院家の所有するそのミコノスヤ、下田の別荘、ヘリも飛行機も自由に使えなくなり、将来手にする何兆円という金も、すべて失うことになる。今のような法外な生活は一生できん」

帝は続ける

ただ淡々と現実を

「あの贅沢が染み付いて生まれてずっと金に守られてきたあの娘が、金のない生活ができると思うか？」

>そ、それは…<

「ナギよりもアテネを選びたいなら好きにしる。遺産をナギが失えばナギの執事は続けられぬとも、アテネの執事にはなれるじゃろう。借金も、アテネが肩代わりしてくれるじゃろう」

>…………。な、なぜ、こんな事を…<

「…なぜ？ …なぜ…」

帝は若干口角を吊り上げながら

「ワシはサンタになろうとも、お前にプレゼントはやらんといつてどじゃ」

サンタ？

いったいどういうことだろう

確かにハヤテは幼いときサンタのような人と会ったことはあるが…

>では好きな結末を選ぶがいい。ただしこの事をナギやマリアには口外するなよ。言ったらその時点で終わりじゃ<

「あ、ちょっとおじいさま！…」

電話が切られてしまった

「なんやじいさんもマジやなあ…」

「あとこの事をお嬢さまに口外するなと」

「それは俺たちも賛成だ」

それは海音、士、アラタが話し合って決めた事だ

「石の事も理事長さんのことも、私が色々調べてみますので、あまり人に言わない方がいいでしょう…」

「だけど綾崎。お前は、急いで決断してくれ」

アラタの問いにハヤテが聞き返す

「決断？」

「石の破壊は綾崎と三千院さんの関係の破壊、けど奪われたり渡してしまつと、あの人も救えず、綾崎の主も不幸になる」

アラタはハヤテの視線から目をそらさない

しっかりとハヤテを見据えている

「最後は、あと数日石を守りきること」

「…数日？」

アラタは頷いて

「さつき鷺ノ宮さんから聞いたんだが、あと数日経てば、石を砕いても分離はできなくなる」

アラタの言葉を引き継いで今度は士が口を開く

「そうなくてもアイツは死ぬわけじゃない。世界の敵になる訳でもない。アイツが融合を望んでないとも限らない」

今度は海音

「融合したアテネさんがなお石を求めてくるなら、今度こそ力で叩き潰すか、鷲ノ宮の家の人たちに協力してもらって封印する術を考える」

けど、と海音は言葉を区切って

「力を封印しても、融合したアテネさんは戻らない。アテネさんはもう、違う何者になる」

「違う、何者かに…!?!」

アーたん…

「石を守れば、アテネさんを傷つける、けど、ナギちゃんは守れる」

そこで間が開いた

長い、永い、沈黙

「…綾崎」

そんな沈黙を破ってアラタが口を開いた

左手で白いソフト帽を頭に被せながら

「お前にとって、守りたいモノはなんだ？」

ハヤテの心を抉り取る質問

今のハヤテには答えられる訳のない、無理難題

「一番大切な人は、誰だ」

「…、」

「どっち選んでも俺たちは何も言わない。もしかしたら石を壊さない方法もあるかもしれない。それは鷺ノ宮さんに調べてもらうし、他の選択肢も考える」

だが、とアラタは鋭い眼孔のままハヤテを見て

「選ぶのはお前だ綾崎。だから、お前が選べ」

ハヤテは絶句したまま呆然と立っただまま

「明日の夜結論を聞く。…だからそれまでに、どうしたいのか考えておいてくれ」

鏡祢アラタは三千院の別荘に戻ってきた

ハヤテと一緒に戻るのは気まずかったから少し早めに帰ったのだ

皆寝ている

当然だ

部屋に戻るとスヤスヤと寝息を立てる我が親友、上条当麻の姿があった

「…ズルいな、俺は」

ばふ、とベッドに横たわる

そんな体験した事ないからあんな言葉がほざけるのだ

大切な人二人を天秤にかけられて、どちらかを選べなんて言われたら

「…無理だ」

そう、無理だ

鏡祢アラタは選べない

今そんな状況にハヤテは立たされているのだ

だからアラタはハヤテがどちらを選ぶのが全力で手伝う事を決めていた

自分には無理だから

「…あと、一日」

今日を除いて明日一日が最終日

長かったその旅行も、終盤

最後の一日が、始まる

「では、必要な分は渡したぞ。あとは臨機応変に使い分けてくれ」とある空港

蒼崎橙子は一人の青年にあるアイテムを渡していた

「おう！ 戦い方も学んだし、自分を鍛えにちよっくら行ってくるぜ！」

「鍛えに行くのもいいが最初に言った事も忘れるなよ」

頭を整えるように撫でながら青年は

「任せとけて！ 言われた事はしっかりとやり遂げてみせるぜ！」

青年はぐっ！ と親指を立てながら歩き出した

「…さて、アラタはうまくやってるかどうか…」

そんな橙子の呟きを聞きながら青年は嬉々とした歩みを止めない

「待ってるよアラタ！ お前とも、ダチになってやるぜ！」

青年は右手に掴んだスイッチを押す

カチン！ とそれは小気味良い音を立てた

今、歯車は、廻りを止めて

終劇へと誘っていく

チャプター16 (後書き)

アラタ「最後に出てきたアイツ…、わかる人ならわかるよなっ！」

チャプター17 (前書き)

終わる日の始まり

チャプター17

最後の一日が、始まる

「はー、長かった旅行も今日で最後かー」

日差しが差し込む洗面所で、西沢歩が呟いた

彼女は普通がトレードマークみたいなものだからこういった旅行が本当に楽しかったのだろう

「明日の朝にはもう帰国。やっぱりちょっとさみしいなー…」

「よいではないか。さみしいってことは充実してたってことだろ？」

同じように隣で顔を洗っていた三千院ナギが西沢にそんな言葉を投げかける

「そりゃそうだけど…」

「だがしかあし！！ 心配するな皆の衆！！」

何やらいきなり洗面所の扉が開いて慣れた声が聞こえてきた

生徒会三人娘だ

「だから、旅の最後は！！ 派手に行くぜ！！」

そんなどこかの海賊戦隊みたいなフレーズと共に一日が始まった

お前にとって、守りたいものはなんだ？

一番大切な人は、誰だ？

昨日問われた言葉が頭の中をぐるぐると駆け巡っていた

綾崎ハヤテは窓から差し込む陽の光で眼が覚めた

駆け回るその言葉はぐるぐるとまるで螺旋階段のように止まることはない

しかしその階段にゴールはなく、決断を下さない限り終わることはない

石を砕けば、天王洲アテネを救える、しかしそれでは三千院ナギが不幸になる

石を守れば三千院ナギを救える、しかしそれでは天王洲アテネはもう笑わない

あれから何度も考えた

だけど答えなんて出てこない

どちらかを選べなどという選択肢などハヤテには選べる訳はないのだ

そもそも、選べる立場でもない

(…やっぱり、石を壊さないで彼女を救う方法を見つけるしか)

「おはよーハヤ太君!!」

意識を完全に別の方向に向けていたため背後から襲撃に気づかず直撃しすっころんだ

「…どうしたハヤ太君。ずいぶん弱々しいじゃないか」

すっころんだハヤテを一瞥しながら理沙が言った

「い、いえ、別に…」

「全く、そんな弱々しさじゃ、今日が思いやられるぞ」

「…え？ どういうことですか？」

何か予定とかがあったのだろうか

少なくともハヤテに覚えはない

「ふっふーん!! 我々はお金持ちだぞハヤ太君!!」

と理沙の背後にいた美希が高らかに宣言し

「そして女の子だぞ!!」

泉が満面の笑顔で言う

そして最後に三人娘が

『だから旅の最後には、お楽しみのお買い物タイムだっ！！』

「旅の最後は笑顔で行こうって…みんなで購入物しようって事だったの」

呆れた表情でヒナギクが言った

前日神那賀が風呂に襲撃し帰った後、なんと同じ浴槽に美希が潜伏していたのだ

そしてくしくも神那賀と同じように笑顔で行こうなんて言っていたからどんな派手な事をやらかすのかと思っていたら…

なんの事はない買い物だったとは

いまこの市街にいるのは生徒会三人娘に三千院家のお三方、そしてヒナギクと西沢に海音と千桜、そして二人にくっついてきた通りすがり

次にアラタと美琴、そしてアラタの知り合いの探偵さんお二方に、美琴の後輩の三人の女の子に神那賀嬢

最後に上条当麻とインデックスだ

総勢二十一人という大所帯だ

「てか、海外で買い物ってあんま経験はないけど、そんなに楽しいもんなのか？」

歩きながら前に行く上条当麻が尋ねた

「ふ、お子さまだな上条くんは」

「まるでわかってないなー」

はあく…、と思いきり溜め息をつきながら嘆息した

それに多少なりともムっ、と来た当麻は

「じゃーあんた達は、海外での買い物の心得みたいなのわかってるのかよ！」

そう言われるや否やキラリ、と目を光らせて待ってましたと言わんばかりに声をだす

「トーゼンっ！ 何せ日本にはない様々なデザインがあるっ！！」

と理沙

「おまけに日本よりも超安い！！！」

と美希

最後には二人声を揃えて

『ていうかムダ遣いは、楽しみに決まってる!!』

その言葉を聞いた上条当麻はドギヤァン!! と何やら衝撃を受けた様子で硬直した

いつも金欠に悩まされている当麻としてはその言葉は全身に冷水をぶっかけられたような感覚だった

「とうま? どうして固まってるの? とうまー?」

「気にするなインデックス。その内蘇るからなー」

とりあえず硬直した上条当麻を置いて総勢二十人は歩いていく

そんな大所帯から数十メートル離れた位置に五和と建宮、伊達と紅司、咲良に「必要悪の教会」ネセサリウスの三人は歩いていた

「…前は楽しそうですねー…」

「そんなおおっぴらに黒いオーラ放つのは止めてほしいのよな…」
じとー、と歩きながら前を睨む五和

なんだかなだめてばっかなのよな、と建宮は心の中で呟いた

そんな天草式二人から後ろ

ちようど斜め後ろの位置に「必要悪の教会」ネセサリウスの三人が歩いていた

「…こんな往来で買い物、か。あまり僕達はやらないね」

「いいじゃねえか、結局何にも起こらなかつたんだから。取り越し苦勞に終わるならそれでいいさ」

煙草を吸いながら言うスタイルに返すのは齊堵

神袮もそれに同意しながら

「今回は、あの女も企んでないようですし。…どうせなら旅行を楽しもうじゃありませんか。あの人たちみたいに」
と神袮が何気なく指を指したその先には伊達たちが

「伊達さん伊達さん、これなんていいんじゃないですか？」

「お、咲良ちゃんセンスあるねえ。学園都市のカエルのドクターのツボ、わかってるっ」

「…あの人なら笑顔で何でも受け取りそうですけどね」

そんな皮肉を交えながらいろいろ見て回る伊達たち

「…彼らは終始あんなんじゃないか」

最後にスタイルがそんな言葉を投げ捨てた

美琴がある一点を凝視している

ここはショッピングモール

たまたま目に入ったお店がここだからみんなが入ろう、という事になったのだ

で、美琴があるストラップに釘付けになっている

「…あらあらお姉様、海外でもゲコ太ですよ？」

指摘されて美琴は顔を赤くしながら

「ば！ バカいつちやいけないわよっ！？ だ、だってカエルよ！
？ りよーせーるいよ！」

そう言つて美琴はゲコ太ストラップから目を背けようとする、が捨てきれず目だけをちらー、とストラップに向けていた

好きなものだから仕方がないのだ

「…やれやれ。相変わらずの強気っ娘だな。俺の恋人は」

苦笑いを浮かべて美琴の頭にぽむ、手を乗せる

にやふ、と息を吐く声が聞こえ

「こいつか？ ゲコ太」

美琴が見ていた海外版ゲコ太ストラップは紳士服でなかなかダンディなお髭が描かれており、いかにも海外！ って感じがする商品だ

「い、いいの？」

「断る理由がないしね」

うーん、とドアを抜け、アラタはお店へと入っていく

「…すっかりラブラブね、御坂さん」

「あ、神那賀さん…」

横合いから神那賀雫が声をかけてきた

二人はアラタに好意を持つ恋敵だ

そして先に美琴がアクションを起こし、晴れて結ばれた

結ばれたのだが…

「ふふふ…、いつか泥沼の三角関係を引き起こしてみせるからねー」

「な！ じよ、上等よ、いくら神那賀さんでも、アラタは渡さないんだから！」

普段はとても仲が良いのだが、時たまこんな会話を交えるのだ

「お二方って、仲が良いのですか…」

そんな二人を訝しげに感じた美琴の後輩、白井黒子が呟いた

「仲良き事は美しいですからねー」

「ねー」

そんな黒子の後ろで初春と佐天が頷きあつた

「…あなたたちはノーテンキですわねー」

あの人は僕の、好きな人です

その言葉を思い出す気持ちが沈む

ああ、ダメだな…私は

綾崎ハヤテは十六歳だ、好きな人だって当然いるに決まっている

桂ヒナギクはそんな事を思いながらまた別のお店に足をいれる

そのお店には他にもアラタや歩、ナギたちも入っていた

歩は何やらサングラスコーナーを熱心に見てまわり、アラタは何やらネックレスやペンダントを漁っている（プレゼント用だろうか）

気持ちがドンドンとネガティブになっていく

ヒナギクは拳を握り締めて、若干瞳に涙が浮かんだとき

「やー！ お買い物は！ 超テンション上がるんじゃないかなー！」

何やら横長で細いサングラスを試着した西沢歩がそう叫んだ

そんな西沢をポカンと見ながらためらいがちに声をかける

「え、歩…？ 何そのサングラス」

「いや、さつきそこで見つけてあまりの格好良さに思わず買ってしまったのです」

試着じゃなかった

「こんな派手なサングラス、日本にはなかなかないからねっ！ そもそも日本じゃサングラスなんてかけないからね！！」

「だったら買わない方が良かったんじゃない？」

努めて冷静にヒナギクは言葉を紡いでいく

修学旅行とかそう言った旅先で木刀を購入する人がよくいるが実際に使ってる所を見た事はない

「確かにテンションで買い物すると失敗もするでしょう。家に帰っ

てから後悔することもあるでしょう…」

しかし、と言いながらサングラスを取りながらビシッ、と決め顔で

「後悔は…、決して前には出来ないのです…！」

その場にいた全員が旋律した

後悔は、決して前には…出来ない…！！

けどよく考えてみると名言っばく言ってるだけで、言ってる事自体はものすごく普通な事だった事にすぐ気づく

「けどまあ、そうかもしれないな」

しかしナギには通じた（かはわからないが）ようぞで

「…よし…！ ハヤテ…！」

「は、はい…！」

「私たちもお買い物に行くのだ…！」

そう言ったナギの笑顔は何物にも変えられない、素晴らしい笑みだった

アंकは珍しく苛立っていた

八つ当たり気味に小石を蹴飛ばしながら口を開く

「アイツ…！ 次見つけたら今度こそぶっ潰す！」

「アंकちゃん。ぶっ潰すなんて物騒な単語、簡単に使っちゃダメよ」

あらあら、と宥めるのら後ろを歩くアंकレディ、通称レディだ

「だが姉貴、あの怪人を放っておいたら後々面倒くさい事になるぞ」

「ん…、アंकちゃんの言いたい事もわかるけど…、それでも道行く人にガン飛ばしながら行くのはどうかと思うわ」

痛いところをつかれた

先ほどドーパントと交戦したあと苛立ったあまりつい目つきが険しくなってしまうのだ

「仕方ねえだろ。…本当にイライラしてんだからよ」

「アंकちゃんは本当に短気ねえ…」

「うつせえ」

返しながらふと前を見る

その視線の先に楽しそうな金髪ツインテールの女の子と、それを追う青い髪の少年が見えたのだ

「あらあら…、楽しそうな顔」

レディが柔和な笑みを浮かべて呟く

「…まあ、見た感じな」

対してアंकはそっけなく返事を返すだけ

「…私たちの戦う理由、覚えてるでしょう？」

唐突にレディが問うてきた

「あ？ なんだいきなり」

「…人間に憧れて、今まで生きてきたけど、人間にはなれない…。ならせめて、その人間の笑顔は守りたい…。そうだったでしょ？」

「だが俺たちを迫害する奴らは消えない。俺たちがいくら尽くそうと、それは変わらない」

強い目つきでレディを喝する

レディは節目がちに顔を背けながら

「…アंकちゃん…」

「…辛気くさいのはナシだ。こんなんじゃあ、映司に笑われる」

「…そうね、ごめんなさい。こんな話して…」

構わない、とアंकが短く返して空を見上げた

「…嵐が来るな。戦いの嵐が」

散々ナギに振り回されて、いくつか荷物を持たされた

けど決して悪くない

むしろ心から楽しいものだし、この何気ない時間さえも愛おしいものだ

「楽しいですね、ハヤテくん」

「へ？」

不意にマリアにそう聞かれ思わず荷物を落ちそうになりながらも持ちこたえマリアに返答する

「…そうですね。…お嬢さまとの日々は、本当に楽しいです」

それは偽りのない本心

居場所がなくなった自分に居場所を作ってくれた大切な人だし、かけがえのない主だ

…石を砕けばその恩人との関係性を壊すかわりに、最愛の人を救う
ことが出来る

借金も彼女が負担してくれるだろう

だけど

(…失えない！ お金はお嬢さまを守るお嬢さまの力そのものだ。
石は何がなんでも渡せないし壊せない！！)

だったらアテネを見捨てるのか！？

ずっと苦しんでいる、たった一人で苦しんでいる彼女を！！

彼女は死ぬわけじゃないと言われている

石を守ればナギを救える、アテネ自身が融合を望んでないとも限ら
ないとも言われた

ハヤテ…来るな！！

(僕に近づくなと彼女は言った)

十年振りに再会したときも他人のフリをして拒絶した

拒絶することで別の誰かになろうとした？

…
けど貴方の心が、助けてって叫んでいるのだけは聞こえますわ

（いや違う！ 彼女は助けを求めている！）

天王洲アテネを救いたい ！！

しかし三千院ナギは犠牲に出来ない ！！

（僕はいつたい…！！ どうすれば…！！）

ただ時間だけが過ぎていく

綾崎ハヤテの叫びとは関係なく

ただ、淡々と

チャプター17（後書き）

アラタ「アラタと!!！」

ヒナギク「ヒナギクの!!！」

『執事つうしーん!!！』

アラタ「…珍しい組み合わせだな」

ヒナギク「そうね、本編ではたまにしか話してないのだけれど…」

アラタ「まあ気にしないで行こう。今回で23巻が終了、次回から決着の24巻がスタートだ」

ヒナギク「変身していない人も変身して、決戦には今話題のライダーも出るらしいわ、まあいつになるかはわからないけど」

アラタ「…あまり期待しないで、気長に待っててください…」

ヒナギク「ちょ、鏡祢くん!? テンションだだ下がり…、え、これ言えばいいの? …こほん」

ヒナギク「次回も、この番組に、フェードイン!!！」

ヒナギク「…ねえ、なんなのこれ」

チャプター18 (前書き)

これから先の未来

チャプター18

「ああ…ついに、最後の夜になっちゃった…」

ホテルのとある一室にて

そこで西沢歩がそんなことを呟いた

彼女は少し窓の夜景に目をやり、ビル群が照らし出す光にうつとりしながら、やがて再び大きなため息をもらす

「…はああああ…」

そして壁にかつ、と手をついて

「帰りたくないなあ…日本」

西沢歩が非ホームシックにかかっておられました

「…、」

そんな歩を軽く汗をかきながら見守っているヒナギクは言葉に迷った

とりあえず話題を変えようとヒナギクが口を開く

「…けど何かしら。美希たちがくれたこの手紙…」

「へ？」

と現実に戻ってきた西沢がヒナギクの持っていた紙に視線をやった
買い物が終わりに解散となった時に、美希たち三人娘に一枚の招待券
みたいなのをくれたのだ

そこにはとあるホテルの屋上に今晚十九時に水着を持って集合！
といったものだ

確かに三人娘は最後は派手に、とか後半もどうとか言っていたが…

そんなこんなでリムジンを走らせ数十分

車を降りるとかなりそびえ立つ超巨大なビルが目の前に広がっていた

驚くべきはそれだけじゃなく二人が扉を開けて中に入った途端

『お帰りなさいませ！！ お嬢さま！！』

執事とメイドが待ち受けていた

「…な、え？ 何これ？」

「や、やあ…」

お辞儀している執事とメイドに挟まれながら先へ進む

しばらく進むと「ようこそ」と書かれた看板が見えた

その看板が置かれたすぐ先に扉があった

「…」
「…」
「よね？」

「う、うん」

何があるのか、と軽く警戒しながら扉を開ける

そこには

「うわー…!!」

幻想世界が広がっていた

とても大きく、それでいて広いプール、テーブルには見るからに高
そうなシャンパンやフルーツ、と、どれをとっても最高級

「何これ！ スゴイ…!!」

西沢の感嘆の声もうなずける

ヒナギクも声には出していないが驚きを隠せないでいた

ていうかあの三人娘にお金があるからってこんなところに招待できるのだろうか…

「ふっふーん！！ 気に入ってくれたかなご兩人！！」

「旅の最後は派手にいこうと言ったろう！」

「理沙、美希…」

不適な笑みを崩さないまま理沙は言う

「だからこのギリシャ最高のホテルのプールを…」

「我々のためにホテルごと貸し切ったのだ！！」

美希が引き継いで言葉を紡ぐ

「えええー！？ そ、そんなこと出来るのー！？」

さすがお金持ち

やることのスケールが違う…！！

「ちなみに手配すべてナギちゃんがしてくれたのだ！！ ていうか

このホテルは三千院家の所有物なのだー！！」

「…よくそれ知ってたな…」

明かされる真実

だが西沢は若干ためらうように、おずおずとナギに問う

「で、でもいいのかな？ そんな贅沢して……」

「別に構わないさ」

対してナギは背中を向けたまま、軽く頬を赤らめ

「せつかくの皆の旅だ。…最後に一生忘れられない夜があってもいいではないか……」

面と向かって言うのが恥ずかしいからナギは背を向けているのだろう

それを察した西沢は柔和な笑顔を作つて素直に感謝の言葉を述べることにした

「ありがとう。ナギちゃん」

「べ、別にお前のためじゃないんだからな……」

ツンデレが間近にいと感じた瞬間である

「さあ皆さーん！ お料理が出来ましたよー……」

「お待たせして申し訳ありません……」

そんなタイミングを見計らつてか、マリアと五和が料理のトレイを持って歩いてきた

その後ろには料理を運んでいるアラタたちや当麻たちが

「おー！ ありがとうマリアさんに五和ちゃん！ 後ろの大多数もごくろーさまー！」

「いえいえ！ マリアさんから様々な料理の基礎、学ばせていただきましたよー！」

美希の言葉に返したのはロングの女の子、佐天涙子だ

「若干十七歳でこれほどの料理の腕…、興味深いね」

すでに軽く味見をしたであろうフィリップが賞賛する

「あらあら、誉めても何も出ませんよ？」

マリアが軽く微笑んで受け流していると

「どーもー！ お呼びいただき光荣です！」

先ほどヒナギクたちが入ってきた入り口の場所に伊達と紅司、咲良の三人がいた

「広い…！！」

「おつきい…！！」

目を星みたいに輝かせながら紅司、咲良が辺りを見回す

「よし。遊んでこいおまえたち。ちゃんと話す事は聞くんぞー」

「うんー！」

「わかったー！」

たたたー、と元気よく走っていく二人

見た目は十四前後だが、施設暮らしが長かったためか、こついった景色に目がないのだ

「楽しそうですねー。ご招待した甲斐がありました」

「なんかいろいろと、本当にありがとございます」

ことり、と料理のトレイをテーブルに起きながら神袈火織は申し訳なさそうに呟いた

「お気になさらないください。あの子の友達になってくれた恩返しです。珍しくナギも楽しそうでしたしね」

「…そう言ってくたさると、救われます」

「ほうあー！！こ、これはあっ！！！」

唐突に西沢の叫びが聞こえてきた

「ん？」

そんな叫びを聞いたナギが様子を見に歩いてくる

「どうしたー」

「じ、これって…!! 殻付きのクルミ!？」

テーブルに置いてあるクルミを凝視しながら西沢が一つクルミを手に取った

「…いや、まあそうだけど…。それがどうしたのだ」

よくわからない、という感じでナギが聞く

「どうしたって、殻付きのクルミはブルジョアジの証だよ!」

「そ、そうなのか？」

「そりゃそうよ! 殻付きのクルミとマドラーはマハラジャの家にしか置いてないのよ!」

そう言っつて西沢はぐっ、と力を入れてクルミを割ろうと試みる

「映画なんかではほら、ダンディーなお金持ちが手でこっつ…」

ぐっ

「じっ…!」

ぐぐぐぐぐぐぐ…

二、三分待ってみたが割れる気配は微塵もない

やがて

「割れないのは私が真のブルジョアジーでない証」

「いやいや、女の握力じゃ割れないのが普通だ」

当然です

と西沢がうなだれていると

「お。おー！ これはよく映画でダンディーな金持ちがよく手で割るあのクルミ！」

上条当麻が混ざってきた

隣にはアラタもいる

「…よく押さえてるな、そんな情報」

「なに言ってるんだよアラタ。クルミっていやあよく香港映画でシヤム猫はべらせたダンディーで金持ちな悪者がワイン片手にクルミを弄びながら最後は砕くってというのがお約束だぜ」

「…お前そんなに香港映画見てたっけ。あと多分それは違うと思う」

「よし…！ やはり夢は、叶えるものだ！ いざ、クルミ割り！」

バツ！ と適当にクルミを一つ手に取って先ほどの西沢みたいに力を入れて割ろうとする

が、当然ながら罅ひびはおろか全く割れず

「…俺の夢は、殻という壁の前に崩れ去った…」

「いやいや、分かりきってた事だろう」

「そう言うアラタは割れるのかよー」

「…二つあればなんとか」

言いながらアラタはクルミを適当に二つ持って一つのクルミを入念に観察する

いつの間にか興味を持ったナギと西沢もじつ、と見守っていた

「クルミってのは、どこかにくぼみみたいなのがあんだ。そこにこのもう一つのクルミを押し付けて力を入れる、と割れたはず…」

ぐっ、と力を入れて数秒

ベキー！！ と音を立ててクルミの殻が割れ中身が見えた

当麻とナギ、西沢が「おー…」と感嘆の声をあげる

因みに「秘密のケン ヌン ヨー」で培った知識である

「へえ…、鏡祢くんって割と物知りなんだね」

いつしか興味を示したようにヒナギクもアラタの近くに来て手元を覗き込んでいた

「普通にクルミ割り器使った方が早いですがね…」

正論だ

「ヒナさん、ちょっと、元気でたかな？」

「…うん。ありがとう、歩」

今更ながらヒナギクは気付いた

昼間あんな変なグラサンつけてあんな言葉を言ったのは全部、自分を元気づけようとしてくれてやってくれたことなのだ

「…あの、私…その…」

と何かを言いかけた時なんだか体が浮く感覚を覚えた

「そんな事より、まずは泳ぐぞ！」

それはちょうど二人の間を走り、ヒナギクと西沢を両手で押したからなのだ

無論二人とも重力に逆らえる力は持っていない

結果

『きゃー！』

だばーん！ とプールに着水

「もぉ、バカー！ 私まだ水着着てないわよー！」

「うははははー！ だがそれがいいー！」

「ひゃー！ 気持ちいいー！」

プール内でバシャバシャと騒ぐ三人

そんな三人を見ながらナギは呟く

「若者は元気だなー」

「…君が一番若いんじゃないかな」

うつすらと汗をかきながらアラタが突っ込んだ

「あむ。…流石海音。料理の腕は衰えていないな」

門矢土はテーブルに乗せられた料理を食べながら舌包みを打っていた

「…食べてばかりじゃないですか、貴方は」

料理のお皿を持って歩いてきたのは海音と千桜だ

「…この人って、本当なんなのよ…」

海音の隣で手伝いをしていた千桜がウンザリとした表情で呟いた

「…まあいいよ、好きにさせとこつ」

「…そうね」

また別の料理を運ぶべく、海音と千桜の二人はまた厨房へと戻っていった

「…さて、次の料理は…。…うげ、ナマコ入れやがったなアイツ…。」
フォークで料理をつつきながらそんな事を呟く

「…未だに、ナマコは食べられない？」

料理をつついてると背後から聞き慣れた声が聞こえてきた

「…やっぱりお前か。海東」

海東大樹

士と同じ仮面ライダーであり、次元を渡る旅人である

「あの時他のライダーを呼び出したのも、お前だろ海東」

「…ご名答だよ士。…元気なところを見ると、上手く脱出できたみたいだね」

「おかげさまでな。：お前はなんであの城に忍び込んでたんだ。まあ、あらかたなんか盗もつと思っただらうがよ」

「当然さ。あからさまになにかありそうなのに、忍ばない事は出来ないからね」

「：相も変わらず泥棒か。で、なんかあったのか」

海東はテーブルに置かれた料理を軽くつまみながら

「残念ながらめぼしいものはなくってね。それでまたいろいろと歩き回ってたら、騒がしい音が聞こえてきてね。行ってみたら君たちが戦ってた所に遭遇したのさ」

「：暇なんだな、お前も」

そう言うと海東はむっ、とした様子で

「一緒にしないでくれたまえ。これでも僕は忙しいんだ」

「泥棒しかないだらうが…」

そんな事をぐちぐち言いながら、今日の時間は過ぎていく

「で、アラタ。桂さんたちと何話してたのよ」

先ほどのクルミ割りの件を美琴に見られていたようで、現在腕を捕まれております（結構な力）

「いや、別にクルミ割りの実演してただけだよ…。…いたたたっ
！ つねるなつねるな！」

嫉妬してくれた事は素直に嬉しいがからかいすぎると命が危ないか
ら、素直に謝る

「本当に何もないうてば。安心しろ」

「わかってるけど…」

ぷくー、と頬を膨らませる美琴

「…つたく、本当可愛いなお前は」

「…何回も言われて慣れちゃったわよ。…嬉しいけど」

そして何気なくプールを見る

三人娘にヒナギクと西沢が楽しそうにはしゃいでいる

最初は苦い表情だったヒナギクだったが今はまんざらでもない表情だ

同じく厨房にて

「マリアさん、カット野菜ここに置いておきますね」

「ありがとございます佐天さん。あ、次はそのオープンの中で焼

「いってるピザの焼き加減見ててくれませんか？」

「りょうかーいっ！」

「そう元気に返事してオーブンの前に駆けて行った」

「マリアさん。パスタが茹で上がりましたー」

「わざわざありがとうございます、初春さん、次はフランスパンのスライスを頼んでいいでしょうか？」

「はい、おまかせください！」

返事をするスライス用の包丁を持つとフランスパンを手際よく斬り始める

「なんだか今日は料理が楽しいね、海音くん」

「マリアさんに、あの女の子二人がいるからね。おまけに…」

ふと右側に設置されたフライパンから火の手があがる

それはチャーハンを作っている五和だ

「あの人もものすごく料理が上手だよね…、…」

ふと千桜は考えた

海音＝料理すっごい上手い

マリアさん＝上記と同じ

五和「これも上記と同じ」

佐天さん初春さん「割と人並みに」

わたし「佐天さん並五和以下」

「…なんなんだろう私」

どよーん、と黒いオーラをまといながら食材を切る千桜
なんだか危なかつしく指まで切つてしまいそうな勢いだ

「…て千桜さん！？ 危ない危ない！」

厨房は楽しそうな雰囲気、クッキングタイムが続く

「やほー、二人共楽しんでるー？」

神那賀がソーダグラス片手に、アラタと美琴の会話に入り込んだ

「お前は十分満喫してるな」

「当然よ。せっかくの海外だし、こんな高そうなホテルなんて私たちじゃ不可能よ」

「高そう」ではなく本当に「高い」んだが

「てな訳で…。じゃん！」

神那賀はグラスをテーブルに置いて背中に手を隠すとどこからともなく二人分の水着を取り出した

間違いない神那賀と美琴の水着だ

「御坂さんに似合う水着探すの苦労したよー」

神那賀のはシンプルに黒いビキニ、美琴のは胸、パンツと別れたタイプだが可愛いフリフリがついている

見た目子供っぽい水着だ

「よ、よく見つけたわねこんな水着…」

「んっふっふー、神那賀さんを舐めんなって。さ、早く泳ぎましょう！」

高らかに神那賀が言うと美琴の手を掴み駆け出した

「…やれやれ、元気だな」

変わらない二人に安心しながら、そして刻々と迫るタイムリミットを思いながら鏡祿アラタは空を見上げた

『あの贅沢が染み付いた娘が、金のない生活が出来ると思うか？』

そうおじいさまに言われた言葉が深く、鋭く突き刺さる

ナギとアテネ

選べるのはどちらか一人

不条理な天秤

どちらかを殺す代わりにどちらかを救うなどというふざけた二択

どちらか一人

大事な方を選べ？

なんだよ大事な方って

「…そんなの二人とも大事に決まってるだろ…!!」

思わず声に出してしまった

その声色は優しいハヤテの声色でなく、怒りに震える声色だ

その怒りの矛先は誰でもなく、自分自身

あれから何度も考えた

だが答えなんか出なかった

そもそも答えなんかないんだ

どちらも救うなんて夢物語をずっと頭の片隅に置いてただ時を待ってしまった

いくら考えても答えなんて出ないから

「…神様…!!」

最後には居もしない架空の存在に願いを馳せる

…本当にハヤテは追い詰められていた

「僕は、僕の身はどうなってもいいですから…!!」

目尻には涙もあつた

アテネもナギも自分の人生を大きく変えてくれた最愛の恩人だ

見殺しなんて、出来る訳がない

「どうか…、二人を助ける術すべを…!!」

「ハヤテ」

ハッとした

思わず振り向くと、そこには主、三千院ナギの姿があつた

思えば様子が変だったのは明白だった

なにやらげんなりしている時間が多いし、話しかけても上の空

「えっと、パーティーはいいんですか？」

どこか躊躇いがちにハヤテがナギに聞いてきた

それにナギはさもありませんといった感じで

「問題ない。マリアにもちゃんと許可は取った。…ところでハヤテ」

ナギはハヤテの前に躍り出て、笑みを作ったまま瞳を見つめながら聞いた

「あのジジイからもらった石を見せてくれないか？」

「え？ これ、ですか？」

戸惑いながらもハヤテは首からその石を取り、ナギに手渡した

ナギはその石を受け取ると月の光に照らすように翳しながら自分の頭上にあげる

「…キラキラ中が光って、まるで星のように綺麗だな」

「…ええ、そうですね…」

「これは絆の石だと教えられたんだ。人と人の、絆を試す星の石だと」

母からの受け売りだが、今この場で言っても母は笑って許すだろう

「絆を試す…星の石…」

少し良い話をしたところで場の空気が和んだ気がした

「なあハヤテ」

だから

ナギはハヤテとの絆を今、試す

「この石のせいかな？」

「この石のせいかな？」

その言葉を聞いた時、ハヤテは意味がわからなかった

「ハヤテが苦しそうなのは、この石のせいか？」

的確すぎるその言葉にハヤテは内心ドキリとした

「あ、いえ…、」

慌てて言葉を取り繕うとした時、「いい」とナギが制した

「言葉にすれば誤解を生む。言葉は不完全だから、勘違いの元となる。…そうだろ？」

ナギは柔らかな笑みでハヤテを見た

その優しい笑顔にハヤテは何も言い返せなくなってしまった

「……。この石さ。世界にもういくつもないっていう貴重品らしいんだよ」

「…そうですね」

ハヤテの答えはどこかそっけないものだった

そっけないがゆえに、次にナギが起こす行動が読めなかった

「…けどその貴重品が、ハヤテを苦しめているのか」

そう言った直後ハヤテは目を見開いた

あるつことかナギはその石を、「王玉」をクルミ割り器に挟んだのだ

「だったらこんな石は」

「お嬢さま、何を　　！！」

ハヤテの静止など聞かず、ナギはぐっ、と力を込める

刹那

パリン！ と甲高い音が響き渡り、周囲に、星くずのような光が辺りに振りまかれた

ハヤテは理解出来なかった

しかしナギはどこか清々しい様子で、毅然としていた

主のように、堂々と

「お嬢さま何を――！！？」

「何って、ハヤテを苦しめる悪者を成敗してやったのだ」

ハヤテは訳がわからず、一瞬言葉に詰まった

「これでジジイの企みも水の泡。気分爽快だな」

こんな時に何を言ってるんだ、とハヤテは思った

だからハヤテは言葉を紡ぐ

「何言ってるんですかお嬢さま!!」

ハヤテは地面に落ちた「王玉」の残骸を取りながらさらに言葉を繰り出す

「この石はお嬢さまにとって大事な石なんですよ!?! 三千院家の、何兆円という遺産を継ぐために必要な石です!!」

王玉は三千院ナギを主張する絶対防壁

いわば、力

「別にいいではないか。…こんな石ころ一つでハヤテが苦しむなら、そんなものはいららないのだ」

「よくありませんよ!! お金は、お嬢さまを守っているものです!!」

溢れ出す思いが言葉となって次々と流れ出していく

「お嬢さまの人生を、あらゆるものから守っている大事なものです!!」

ハヤテはさらに声を張り上げて叫ぶ

「この旅行やパーティー、ヘリや船に飛行機も!! 下田の別荘やお屋敷だって、全部!! お金があればこそじゃないですか!!」

ハヤテは涙を流しながら主であるナギを見つめながら、主の言葉を待つ

それしか、できなかつたから

「…確かにお前の言う通り、私は今まで、金に守られてきたのかもしれん」

「そうですね！！ それなのに…！！ それなのにっ！！ ……どうして…！！？」

涙を流すハヤテに、ナギは告げる

「…だつたら」

ナギは体を軽くハヤテの方へ向けながら、ハヤテに言った

「ここから先の明日は、お前が守ってくれ」

綾崎ハヤテの心の中に、一筋の、希望の光が舞い降りた

チャプター18 (後書き)

新年明けましておめでとごいざいます

今年も一年、どうかよろしくお願いします

チャプター19 (前書き)

決戦開幕

チャプター19

「あの星に約束したではないか。過去でも未来でも、お前が私を守るって。」

三千院ナギは煌びやかに輝く夜空の内、ひとときわ光が強い星を指差して言う

「だったらここから先の未来は、お前が私を守ってくれ。…お前が守ってくれるなら、だったらお金はいらないよ。」

ナギはハヤテに向き直り笑みを浮かべる

それは本当に、天使みたいな微笑みで…

「お金にかわって、お前が守ってくれるなら…」

一拍置いてまたナギが呟く

「守って…、くれるんだろ？」

【お前にとって、一番守りたいものはなんだ】

僕にとって…一番守りたいもの…？

【お前にとって、一番大切なものは誰だ】
一番…大切な人…

私の執事をやらないか？

それは自分に居場所を与えてくれた言葉

いい…！ ハヤテが無事なら、それでいい…！！

それは執事クエストで毒を負った自分を気遣ってくれた言葉

この三千院ナギの、新しい執事だ

それは自分が三千院ナギの新たな執事と認めてくれた言葉

ハヤテ！ 私とお前は、ずっと一緒だ

いつも、そうだった

我が儘で自分勝手に、学校には基本行かない引きこもり

家でゲームやって漫画読んで漫画書いて爆睡

だけど…

ハヤテ！

そんな…

ハヤテ！

そんなお嬢さまが

ハヤテっ！！

守りたいものは、すぐ近くにあったんだ

「お嬢さま」

「ん？」

直後ハヤテは無をいわずナギを強く抱き締めた
とても、強く

「ふええ！？ ちよっ、ハヤテ！？」

「お嬢さま。…お嬢さまに一つ、お願いがあります」

「は、はい!! 为什么呢!?!」

あまりに突飛過ぎたため思わず敬語になってしまった

「今夜一晩だけ、お暇をください」

「…ヒマ?」

「はい。…どうしても、助けなくてはならない人がいます。その人は、僕にとって本当に大切な人で、命の恩人です」

ハヤテは顔を真っ赤にするナギを地面におろして瞳を見つめながら

「その人が今、苦しんで、一人で消えようとしています。その人を救わなくては、決着をつけなければ僕は前に進めません」

ナギを見つめるハヤテの瞳は今朝のように揺らぐ事はなく

「だから今から、その決着をつけてきます。全て終わったら、僕は必ず。お嬢さまの元に帰ってきます」

だから、とハヤテは言って

「だから…一晩だけ…」

その瞳を見てナギは確信する

否、確信しなくてもわかってる

ハヤテは必ず、帰ってくる

だからナギは短くこう言った

「ああ。待っているぞ」

自分を案じてくれるアテネを助けるために

そしてどこまでも自分を信頼してくれる主、ナギのために

自分は誰だ？

「僕の名前は、綾崎ハヤテ」

着慣れた執事服を着る

袖を通して、ボタンを閉める

靴を床にたたき整えて

「三千院ナギお嬢さまの…執事だ!!」

もう、迷いはない

「…そろそろか」

携帯の時計を見ながら鏡祢アラタは呟いた

「ん？ どうしたのアラタ」

隣にいた水着姿の美琴が携帯を覗き込む

「お、もう上がったのか？」

「ええ、プールは気持ちいいし、温度も適温だけど、入り続けるとふやけちゃうしね」

「…そんな長い時間入ってないだろ」

せいぜい指がふやける程度だと思う

「で？ 携帯で時間確認して。なにしてたの？」

「…気になるか？」

「気にならない方がどうかしてるわよ」

「…それもそうだな。話しておくよ」

アラタは携帯を閉じてポケットに仕舞いながら

「もうそろそろしたら、俺は出掛ける」

「出掛ける？ どこに？」

そう問われたアラタは軽く笑みを浮かべて

「ちょっと、「友達」を助けに」

「…、」

その言葉を聞いた瞬間、美琴には伝わったようで

「…そっか」

美琴は笑顔でそう言った

こういう時全てを察してくれるところはとても頼りになる恋人だ

「まーた私の知らないところで、なんか事件に首突っ込んだんでし
よう？」

「…お察しの通り」

「…このお人好し」

と美琴はアラタの胸元をつん、とつついた

「はは。…知ってるだろ、俺の性格」

「当たり前よ。貴方の彼女だもの。お見通しよ」

言って笑顔を振りまくその姿にアラタは心を洗われる

と、美琴に見とれていると、頬に柔らかい感触が

思わず目だけを動かすと目を瞑った美琴の唇が頬に当たってた

ようにするに「ほっぺにちゅー」である

「…美琴？」

アラタが言つと美琴は唇を離して赤らめた頬を隠そうともせず笑顔のまま

「必勝のおまじない。負けたら許さないから」

「…、」

…これは、負けられない

いや、負ける訳がない

最大の加護をもらったアラタは

「ああ、任せな」

軽く頭をポンと叩いてアラタは歩を進める

「…鏡祢アラタ」

誰にともなく呟いた

「学園都市の仮面ライダーだ」

（海音）

「ん？」

トントンと小気味よい包丁の音が響く中、海音はモモタロスに返答する

（わかってると思うけどよぉ…）

「うん。…そろそろだね」

もうそろそろ鷺ノ宮伊澄の所に行かなければいけない

海音は一通り切り終えた材料を皿に移しマリアに渡す

「すみません、僕ちょっと出てきます」

「あ、わかりました。夜風は風邪を誘発し易いですから、寒さ対策はしっかりとしてくださいね」

「了解です」

エプロンを取りながら短く答えを返す

「海音くん」

エプロンを机に畳んで置いたタイミングで千桜が話しかけてきた

「…出掛けるの？」

「うん。待ってて、くれるかな」

千桜にそう言って軽く笑顔を見せる

千桜はそれに笑顔で返し

「うん。頑張ってたね」

その一言がどれだけ心強かったか

「うん！」

海音は力強く頷くと厨房を出る

厨房を出ると壁に体を預けていた土と遭遇

「…準備はいいか」

「もちろん」

海音が土の隣を通り過ぎると同時、土も隣を歩き出す

「…皇海音」

「…。門矢士」

「時を守る」

「通りすがりの」

『仮面ライダーだ』

鏡祢アラタが約束した場所に来ると既に伊澄と咲夜、海音と士がいた

「…後は綾崎だけか」

「ええ」

アラタが聞くと伊澄が短く返答する

「お待たせしました」

返答した数秒後、ハヤテが歩いてきた

アラタはハヤテに向き直り、あの言葉を口にする

「…結論は」

するとハヤテは拳を差し出して

「これが結論です」

拳を開く

その掌には砕け散った王玉があつた

「僕の気持ちを察してくれたお嬢さまが、僕のためを思っていてくださった事」

ハヤテは瞳を閉じて数秒、間を開ける

「だから僕は、お嬢さまの気持ちに応えるために、彼女を救います！」

「…完全に迷いを吹っ切れたみたいだな」

ハヤテの表情はイキイキとしているのがすぐわかる

方針は決まった

あとはどう彼女を救い出すかだ

「だけど分離ってどうするんです？ 伊澄さん」

「石が壊れた事を知れば合意は崩れ、理事長さんと化け物の魂が離れます」

すると伊澄は「こそこそと着物の袖からなにやらピコピコハンマーを取り出した

…ピコピコハンマー

「あとはこの鷺ノ宮に伝わる伝説の宝具、「神のピコピコハンマー」
「で中のヤツを叩き出してやりましょう」

「…なんだか頼りないな」

海音がピコピコハンマーを見ながら呟いた

「なあに。じゃが効果はバツグン」

するといきなり声が聞こえた

慌てて声がした方を振り向くと、木の枝に着物を来た幼子が立っていた

その正体は

「銀華ばあちゃん」

それは鷺ノ宮伊澄の叔母、鷺ノ宮銀華だ

「久しぶりじゃのうお前たち。何人か、見慣れぬ顔がいるが」

銀華は地上にすたっ、と着地する

「…。ばあちゃん？ 見た目ただのロリータじゃないか」

「お主ワシをバカにしてるのか」

アラタの発言に若干イラツとしながら銀華がアラタに反論する

「銀華大おばさまはれっきとしたおばあさまですよ。人の限界ギリギリの血液を得る事で若さを保ってるんです」

「…ドラキュラか」

「聞こえたぞその古臭いカメラ持った優男！」

「誰が優男だ誰が！」

と、銀華と土が言い争っているとザリ、と地面をこする音が聞こえた

アラタとハヤテがその方へ向けるとそこにはスタボロのマキナがいた

「!!! あ、貴方は!?!」

ハヤテが驚いて声をあげる

それもそうだ

先日自分をぶちのめした敵が目の前にいるのだから

「…さて綾崎。…様子がおかしい」

「…え？」

「アテネを…、助けてくれ…」

マキナから聞いた言葉は予想に反して意外な言葉だった

それきりマキナはぼったりと倒れてしまった

「…鷺ノ宮！」

アラタが叫ぶと伊澄が頷いて

「いきましょう！」

「あ、伊澄さん、万が一に備えて連絡用のケータイ持ってき！」

「ありがとう咲夜！」

「海音、俺たちも行くぞ！」

「はい…！」

五人は顔を合わせて頷きあい、アテネの城に向かって走り出した

「せやけど自分、ボロボロやけど大丈夫か？」
倒れてるマキナに咲夜は語りかけた

「う、うう…、ハンバーガー…、ハンバーガーがあれば、なんとか…」

「ハンバーガー？ そんなんでええならウチが作ったるか？」

「…え？」

予想外の言葉が来た

ハンバーガーは買って食べた事しかないマキナにとってそれはとても素晴らしい一言で

「ちょうどナギらがホテルでパーティーしとるみたいやしそこ行ってみよか。きつと材料もぎょーさんあるからいっぱいハンバーガー作れるでー」

マキナは顔を上げて咲夜の顔を見る

「争つのもなんやし、それで仲直りっちゅうのはどや？」

「は、はいっ！」

それはとても力強いいい返事だった

天王洲アテネのいる城までは何事もなく普通についた

しかし油断はできない

周辺に注意を払いながら城の扉を開けて進んでいく

「…どうだ、鷲ノ宮」

「…昨日はただならぬ気配を感じてここに来て、門の所にどうも気になる紋章があつてカマをかけてみただけだったのですが…」

伊澄は着物の袖を口元へやり辺りを見回しながら

「この雰囲気は…少々マズいですね…」

同じように辺りを見回したアラタが

「…思つてた以上に融合が進んでるのかも知れないな…」

アラタの呟きを聞いてハヤテは内心焦りながらも先を促す

「…とにかく急ぎましょう、皆さん!!」

「ああ!!」

ハヤテに促され四人は一斉に走り出す

「けどこの中は相当広いですから、迷子にならないように」

そうハヤテが注意を呼びかけた瞬間だった

「あれ、鷺ノ宮は？」

「え？」

鷺ノ宮伊澄が忽然と失踪しておられました

「い、伊澄さん！？」

「おいしいい！！ 注意促してまだ一秒も経ってねえぞおお！！」

「ちょっと目を離しただけなのにっ！？」

士とアラタが二人してツツコミを入れたその時ゴソツ、と怪しい物音が聞こえた

四人はそれが伊澄だと判断した

ていうか無駄にテンションが上がって伊澄としか判断できなかったのだ

「良かった伊澄さん！」

「まだ近くに」

と海音がヒョコと覗き込んだら

両刃のバトルアックスを持った神話に出てきそうなミノタウロスみたいのがいた

「…え？」

ふと思い出す

あれほどの実力者であるマキナがなぜあそこまでボロボロにされたのか

「…なるほど、こんな事になってた訳か！」

士が叫んでデイケイドライバーを腰に巻きつけた

「綾崎、お前は先に行け！」

士と同じようにロストドライバーを腰に巻きつけたアラタがハヤテに先へ行くよに促した

「え！？ でも」

「お前は天王洲を、大切な人を助けるんだろう！ だったらこんなところで後ろ向くな！」

「鏡祢、さん…！」

頭ではわかってる

だけどいくらなんでも、こんな見捨てるような真似は…

「止まるな！！ 行け！ 「ハヤテ」！！」

アラタにそう言われハヤテはついに決心する

「すぐに、ケリをつけてきます！」

綾崎ハヤテは真っ直ぐに扉へ向かって走り抜ける

「…さて、さっさとこいつ倒して綾崎追うか」

士は優雅かつ自然な手つきでカードを取り出す

「ええ、綾崎くんは何でも一人でやろうとしますから」

言いながら海音は電王ベルトを勢い良く巻きつけて、右手にライダーパスを持つ

「そつと決まったら…」

アラタは白スーツの内ポケットからスカルメモリを取り出し

> SKULL <

起動させる

「行くぞ！」

士が勇んで二人に言う

そして三人は同時にあの単語を叫んだ

『変身!』

しばらく走ってハヤテは昨日アテネと再会した場所へとたどり着いた

天井には巨大な王玉にた何かが吊されており、壁にかけてある同じように巨大な時計が目を引き

その真下にアテネはいた

「わざわざ石を持ってきてくれてありがとう。ハヤテ」

「アーたん…。…!!」

そこでハヤテは気づいた

アテネの右側…、ハヤテから見たら左側に権限された巨大な骨の腕

その拳が握り締めている人物に見覚えがあった

「伊澄さん!?!」

気を失った伊澄が握られていたのだ

(…マズい、伊澄さんが気を失っては…分離が…！)

そんなハヤテの心配を余所にアテネはハヤテの近くに剣を落とす

「…つけましようか。十年前の決着を」

一本の剣をもちこちらに突きつけるアテネの姿があった

「僕は、君と戦いに来たんじゃないんだ」

「そう？　なら石を渡してくれるかしら」

「そ、それは出来ないよ…」

そう答えるしかなかった

伊澄がいない状態で砕けた王玉を見せたらどうなるかわからないのだ

「けどハヤテ。私は貴方に「王玉をください」ってお願いしてるワケじゃないのよ？」

「え？」

「渡せと命令してるんだ」

刹那アテネの剣がハヤテに襲いかかった

咄嗟にハヤテは地面に刺さった剣を引き抜きその一撃を防ぐ

しかし力が強く、緩和すべく大きく後ろへ飛ぶ

「ア―たん!？」

「無駄口を叩く余裕はないですわよ!」

再び金属同士が叩き合う音が鳴り響く

ガイン!! ガイン!! と何度も剣を叩きつける

「怪我をする前に石を渡した方が得ですわよハヤテ!」

彼女を傷つける訳にもいかず、かといってただでやられる訳にもい
かない

ゆえに思つように攻勢に移れないのだ

(く…、このままじゃ…)

そんな時、ある会話が脳裏に浮かび上がった

それはアテネの城に行く前にしたこんな会話だ

「…鷺ノ宮、一つ聞いておきたい事があるんだ」

さてどうするかと話そうとした時アラタが伊澄にそんな事を問いかけた

「はい、なんででしょうか？」

「…昨日、その石は世界を滅ぼすだなんて言ってたけど…それってどういう意味なんだ？」

「…私も、詳しくはわからないのですが」

伊澄は淡々と語り始めた

「その石は、道を開くための石だと書かれていました」

「道を開くための石？」

「神様の力が封じられた、王族の庭城への道…」「人の負の感情の爆発を利用して、城への道は開かれる」…と

神様の力が封じられた城

神様とはいったいどういう事だ

「戦いの最中に考え事とは余裕ね」

ハツとした

ハヤテは剣を自分の前に構えるとアテネの剣を受け止める

またガイン！！ と金属特有の音がする

「この十年で、本当に強くなったわね、一生懸命教えた甲斐があったというものですわ」

「ア…たん…！」

「だけど…」

ぐぐぐ…！！ とアテネの力が強くなる

「強くなったのが貴方だけだと思ったら、大間違いですよ…！」

鋭いアテネの刺突が繰り出される

なんとかの剣の腹で受け止めたがその衝撃は凄まじいもので吹き飛ばされた

「…ぐ…！！」

「…直接的な手段を使いましょうか」

天王洲アテネは頭上の球体を指差した

「あれがなんだかわかる？ ハヤテ」

突然振られたハヤテは何がなんだかわからない様子で頭上の球体を見上げた

「あれは王玉のレプリカ、けど失敗作。力を流す度に神話の化け物を実体化させてしまう」

それは、つまり…

「力を流せば流すほど大量に、この城や近くの街や…」

そこでアテネは嘲笑うように冷笑を浮かべてその球体に力を流し込む

「どこぞのホテルのパーティー会場なんか」

「っ！！ アーたん！！？」

ハヤテは一瞬で理解した

変化は現れた

例えば厨房

淡々とマリアの手伝いをする佐天と初春のすぐ後ろに蠢く影が現れたのは

例えばプール

テーブルを囲んでガールズトークに花を咲かせる女性陣の背後

同じように黒い影が現れたのは

その他、多々いろいろな場所に黒い蠢く影が浮き出てきていた

その異常に気づいたものは、いない

「さあどうしますハヤテ！ 石を渡すか道を開くか、私を倒すか。選びなさい！」

「なんで！！ なんでそこまで石を欲しがるのさ！！ 君は、あの城から出たかつたんじゃないのか！！」

その言葉はアテネの心に少し届いたのか軽く戸惑いの色を見せる

「城から、出たい…？」

「そうさ！！ あの時間が止まったような城で、ずっと一人が嫌だつたんじゃないのか！？」

「…ずっと、一人…」

「そつだよ！！　なのに、なんで城に戻るための石が必要なんだよ！？」

「う、うるさいっ！！」

激情に駆られたアテネは剣をハヤテに振りかぶる

しかしハヤテは一切避けるような事はせず、堂々と素手でその一撃を受け止めた

その手から夥しい鮮血が溢れ出す

「あの頃僕らは一緒に城を出ることができなかった。幼くて色々な事を許せなかったからだ。けど今は、一緒に城の外にいる、だから…、石は必要ないじゃないか！！」

「な、何を勝手な事を！！　あの時だって、剣がたまたま折れたから生かしてやっただけで…！！」

「違う、あの時、君は助けてくれたんだ！！」

「なっ！　何を証拠にそんな事を…！！」

「証拠ならっ！！」

ハヤテは叫びながら持っている剣をアテネに振り上げる

咄嗟にアテネは剣を振りかぶりその剣を防御する

すると再びまたガイン、と音が響き渡った

それが何よりの証拠

「…十年経って強くなった力で全力でぶつけても、この剣は折れないよ。だからあの時に、間違っても子供の力で碎けるなんて有り得ないんだ」

子供の頃、別れる前に戦った時は互いに剣が碎け散った

しかし成長し強くなった力で思い切りぶつけても罅^{ひび}つかない

それはどういう事が

「君が細工したんだ。これが碎けて折れるように…」

それが、証拠

「何かに乗っ取られて、怒りで我を忘れても、誤って僕を傷つけないように…」

ハヤテは剣を床に落とした

カラン、という濁いた音が響き渡る

「君が守ってくれたんだ。たとえ一人になっても、僕だけでも逃げられるようにって。…だから、君に言いたかったんだ」

ハヤテはアテネをまっすぐ見て微笑みながら言った

「…守ってくれて、本当にありがとう」

まっすぐな感謝の言葉を耳にしてアテネは>カアア…！<とゆでだこのように真っ赤になってしまった

「…そ、そんな目で見つめないでください…。照れます…」

よくよく考えればハヤテなワケがないではないか

こんなに自分の事を想って理解してくれているハヤテが力になんて

『いいや違う！ こいつが王族の力を奪ったんだ！！』

アテネにまた頭痛が疾った

不気味な声色が頭の中に響き渡る

『だからアイツは石を渡さないんだ！！ もう一度私の力を手に入

「…ええ？」

「…ええ？」

「…ええ？」

「…ええ？」

「…ええ？」

「…ええ？」

「…ええ？」

「…ええ？」

「…ええ？」

「…ええ？」

「…ええ？」

「…ええ？」

「石は僕の気持ちをくんでくれたお嬢さまが、何兆という資産と引き換えに、君を救うために、壊してくれたんだ」

ハヤテはそれを取り出した

砕け散った王玉を

「だから君たちの目的は…、もう果たせないんだ」

一瞬の静寂

そのときアテネの声を聞いた

「逃げる、…ハヤテ…!!」

それは彼女が心から振り絞った言葉だった

「え?」

と言う前に体中が切り裂かれる

見えなかった

《私の石…！！ 大事な私の石をよくもお…！！》

アテネから何かが現れる

「あ、アーたん…！？」

否、アテネではない

何かが現れているのだ

大きく翼を広げて、身体にはろっ骨のような骨、そしてその表情は骸骨の顔のように、その大きく開いた口からは幾重もの剣山と、

天王洲、アテネ

「こんなのであるんだ…」

御坂美琴はホテルの地下にある着ぐるみルームにきていた

どれもこれも素晴らしい技術レベルに素直に美琴は感心していたのだ

「私この反魚人着ぐるみでナギちゃんたちを驚かして来るのだ」

泉が反魚人着ぐるみを装着し、頭にガポツとかぶる

どこから見ても反魚人だ

「ほどほどにしてよね、泉さん」

「わかってるよ、ミコたん、行ってきまーす」

とたたたー、と勢いよく走って行ってしまった

「全く、元気だなあ泉さんは」

「御坂さんは何か着ないの？」

美琴の隣で色々と着ぐるみを見ていた神那賀がふとそんな言葉を投げかけた

「えー…、私そんな柄じゃないし。見てるだけでだいじょう

美琴の言葉が止まった

「？ ……御坂さんどうしたの？」

「神那賀さん後ろ！！」

「え？」

危機を感じた神那賀は後ろを振り向かず前方へ飛んだ

同じように美琴も後ろへ飛び退いた

直後神那賀がいた場所が空を裂く

そこにはカマキリのような剣を構えた怪人がいたのだ

「なにこれ、ワーム!?!」

「にしては細い気がするけど…!!」

言いながら神那賀はバーストライバーを巻きつけてセルメダルを右手に持つ

「けど、早い内にやっつけときましょう!! 御坂さんは一旦プールに戻って!!」

「わかった!! 神那賀さんも無茶しないでよ!!」

「わかってるって!!」

ピン! と右手の親指でセルメダルを弾き左手でそれをキャッチ、そしてそのメダルをドライバーに挿入し

「変身!!」

勢いよく右手の腹で一気にカプセルレバーを回す

カポーン! と小気味よい音が響き、神那賀の体にリセプタクルオーブが展開され、神那賀の姿を仮面ライダーバースへと変える

「よっし! 行くわよ!」

自分を鼓舞すると神那賀バースはカマキリ怪人へと突撃した

ちよつと前に時間はさかのぼる

左翔太郎は夜空を見上げながらなんとなく呟いた

「…なんだか嫌な予感がするぜ」

「君もかい、翔太郎」

隣で着ぐるみではしゃぐ泉やナギ、西沢を見ながら翔太郎に応えた

「それにしても、最近の着ぐるみってやけにリアルだね。興味深い

…」

何気に二人の前に歩いてきた着ぐるみを見てフィリップが言った

「そうだなあ…、…。…ん？」

なんか変だな、と翔太郎は思った

今フィリップが見てる着ぐるみをもう一度よく観察する

なんだか顔は白目を向いて、耳は鋭利に尖ってる

歯は剥き出しでなんか怖い

極めつけは髪の毛だ

なんだかへビが何十匹もうねうねうねしていて気持ちが悪い

「…フィリップ、それ着ぐるみか」

「え？」

言われて着ぐるみをフィリップは上から下までゆっくりと観察して

「…翔太郎。僕の知識が正しければ、これは」

「言うなー！ なんとなく、わかってるから」

翔太郎はダブルドライバーを巻きつけると同時、フィリップの腰にもダブルドライバーが浮かび上がった

「行くかい？ 翔太郎」

「ああ、行くぜ、フィリップ」

翔太郎はジャケットの内ポケットから一本のメモリを取り出す

フィリップも同様に取り出して、翔太郎の右側に立った

> CYCLONE <

> JOKER! <

『変身』

翔太郎は左手を右方向へ、フィリップは右手を左方向へスライドした

その手の動きは、Wを連想させる

そして先にフィリップがドライバー右側に差し込んだ

するとそのメモリが転送され、翔太郎のドライバーの右側に現れた

翔太郎はそのメモリを押し込んで深く差し、翔太郎自身のメモリを左側に入れて、開く

>CYCLONE JOKER!<

軽快な音楽と強い風が吹き荒れて、翔太郎の姿を変える

右側は緑色

左側は黒色

その姿は

「仮面ライダー、ダブル」

左手を軽くスナップさせそのメドゥーサ(?)を蹴っ飛ばした

「ちょ！ どうなってんのよ!？」

美琴がプールに戻ってきた時にはもう何がなんだかわからなかった
いろんな場所にわけのわからない異形の怪物が徘徊していたのだ

「何よこれ…、一体どういうこと…っよっ!！」

自分に攻撃を仕掛けてきた一体を雷撃の槍を当てて黙らせる

「嬢ちゃん!!！」

声が聞こえた方に振り向くと伊達と建宮が走ってきていた

建宮の手には波打つ大剣「フランベルジュ」が握られ、伊達の腰には
バーストライバーが巻かれていた

戦闘準備は万端だ

「なんなのよこいつら。こいつらも着ぐるみ、…なワケないか」

「あんな気味悪い着ぐるみ作れるヤツいたら尊敬するわよ」

「違いねえ、伊達ちゃん、暴れる?」

建宮は顔だけを伊達に向けるとニヒルな笑みを浮かべる

それに伊達は笑みを返して

「当然!」

セルメダルをバーストライバーに挿入し、カプセルレバーを回す

カポーン！ という音が響いて、伊達の姿をバースへ変える

「行くか！ 建宮ちゃん！」

「任せるのよな！ 伊達ちゃん！」

二人は一斉に蠢いてる集団に突撃していった

「…元気ねえ、あんなにお酒飲んだのに。…と、泉さんたち助けないと！」

ぬあー！ と言いながら逃げ回る三人娘を助けるべく、御坂美琴は走り出した

「しっかし自分、なんや怖いヤツかと思っただけど案外マヌケなヤツやったんやなー…」

厨房にて

マリアと咲夜、佐天と初春が協力して作り上げたハンバーガーをもふもふしてるマキナを見ながら咲夜はそんな事を呟いた

ちなみに佐天、初春、マリアは材料を調達するために席を外してる

今ここにいるのは銀華、咲夜、マキナだけだ

「ふえふえふえ。…しかしヤツらの合体攻撃が効かん理由はようわかった」

テーブルに乗っていた銀華がそんな事を呟いた

「？ 理由があるんか？」

「ああ。しかしそれはそれとして…色々困ったのお」

なにやら笑みを浮かべてなんでかそんな事を言った銀華

「…困ったって、何がよばーちゃん」

「んー」

銀華は唸りながらジャラリ、と鎖が付いたクナイを構えて咲夜の問いに応えた

「この状況がじゃ」

この状況、と言われて咲夜は辺りを見回した

「…うえ！？」

驚愕した

いや、驚愕しない方がおかしい

自分たちを中心に、何やらよくわからない化け物らに囲まれているのだから

「な、なんやこいつら!？」

「地獄門でも開けようとしているのじゃろう。ま、失敗しとるようじゃが…、最も」

銀華はずらしていた仮面をかぶり直し

「このオババの、敵ではないがおっ!！」

「…姉貴、ヤツが逃げ込んだのはここか」

アंकはそびえ立つビルを見上げながらレディに聞いた

「ええ、間違いないわ。…これ以上ミダスのメモリを野放しにしておけないもの」

二人は頷き合うとそのビルの入口へと突入していった

奇しくも、そのビルがナギたちのパーティー会場へ使われている事を知らずに

決戦の時は、
もろすぐそりまど近づいてくる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0772x/>

劇場版とある魔術の禁書目録～戦いの神と呼ばれた者～×時間を渡る電王《王

2012年1月9日23時53分発行